富山市埋蔵文化財調査報告30

富山市
上新保遺跡
発掘調査報告書

2009

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財調査報告30

富山市
上新保遺跡
発掘調査報告書

2009

富山市教育委員会

例　　言

1　本書は、富山市本郷町地内に所在する上新保遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、ホームネットとやま㈱が施工する本郷・清住宅地開発事業に伴うものである。富山市教育委員会埋蔵文化財センター指導監理のもとに有限会社山武考古学研究所が実施した。

3　遺跡の所在地、調査面積、調査担当者、調査期間は下記の通りである。

所在地　　富山市本郷町字万年割地内

調査面積　　704㎡

現地調査　　平成19年11月26日～同年12月20日

整理調査　　平成20年5月1日～平成21年3月31日

調査担当者　平岡和夫　田中寿明(山武考古学研究所)　　整理　折原洋一(山武考古学研究所)

監理担当者　藤田富士夫・古川知明・堀内大介（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）

4　発掘調査及び整理作業にあたり、下記の諸氏、諸機関にご教示とご協力を賜った。記して感謝の意を表するものである。

村家　博、桃井泰昌、ホームネットとやま株式会社、大路都市設計、エイテック(株)、パリノ・サーヴェイ株式会社　（順不同・敬称略）

5　本書の執筆は、下記の通りである。文末に各々の文責を記した。

第Ⅰ章　古川知明

第Ⅱ章～第Ⅴ章　平岡和夫・折原洋一

凡　　例

1　本遺跡の略記号はKSBである。

2　遺構の種別記号は次の通りである。

竪穴住居：SI、掘立柱建物：SB、 土坑：SK、溝：SD、ピット：P

3　挿図中の方位は、座標北（世界測地Ⅳ系）を示す。

4　本書の挿図の縮尺は下記の通りである。

遺跡全体図　　1/250　調査区全体図　1/2,500

遺構実測図　　竪穴住居・掘立柱建物　1/60　土坑　1/40　溝　1/80

遺物実測図　　1/3を基本とした。

5　遺構・遺物実測図で使用したスクリーントーンは以下の内容を示す。

遺構：焼土範囲
遺物：摩滅面

遺構：木炭分布範囲
遺物：煤付着

目　　次

Ⅰ　経過・・・・・・・・・・1

Ⅱ　遺跡の位置と環境・・・2

1　地理的環境・・・・・2

2　歴史的環境・・・・・2

Ⅲ　調査の方法と経過・・・4

1　調査の方法・・・・・4

2　調査の経過・・・・・4

3　基本層序・・・・・4

Ⅳ　調査の概要・・・・・9

1　遺構・・・・・・・9

2　遺物・・・・・・・30

Ⅴ　理化学的分析・・・・40

Ⅵ　総括・・・・・・・・44

写真図版・・・・・・・・49

報告書抄録・・・・・・・71

Ⅰ　経過

上新保遺跡は、昭和63年～平成3年に富山市教育委員会が実施した市内分布調査で発見された遺跡である。中世・近世を主体とし、182,000㎡の範囲に広がる。遺跡は平成5年3月発行『富山市遺跡地図(改定版)』に登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られることとなった。

平成6年組合施行土地区画整理事業に伴う試掘確認調査により、遺跡南部における遺構所在状況が把握され(富山市教委1996)、平成8年から10年にかけて同事業に伴う発掘調査が実施された。調査の結果、遺跡は中世を主体とする西側の第1地区と、中世・古代が2層重複する東側の第2地区に分かれ、特に第2地区においては、奈良・平安時代に120棟の竪穴住居跡と25棟の掘立柱建物が検出され、大規模な集落跡であることが明らかになった(富山市教委2000)。

平成19年4月、本郷町字万年割123-1において分譲宅地造成工事が計画され、同年5月一部の地域において試掘確認調査を実施した。調査の結果、埋蔵文化財の所在が確認されたため、計画は一旦中止された。平成19年9月、同地における分譲宅地予定地の残り部分の試掘確認調査が依頼され、同年9月25・26日に残る区域の試掘確認調査を実施した。調査の結果、工事全体区域8,726㎡のうち、5,500㎡に遺構・遺物の所在を確認した。遺構は平安・中世にわたるもので、竪穴住居跡や溝跡を複数確認した。

試掘結果は、10月5日土地関係者である桃井泰昌氏、工事施工者など関係者参集の上報告した。この調査結果に基づき、施工者(ホームネットとやま)・設計者(大路都市設計)と協議した結果、宅地部分は盛土造成により保護し、市道として道路構造令に基づく工事を行う704㎡について発掘調査を行うこととした。また発掘調査の実施は、桃井泰昌氏の全面的な協力を受け、施工者と委託契約した民間発掘調査会社が行い、市埋蔵文化財センターが監理することとした。民間発掘調査会社は山武考古学研究所が選定された。

この協議結果措置については、平成19年11月26日付けで施工者であるホームネットとやま・市教委・山武考古学研究所の三者による協定を締結し、同日から発掘調査に着手した。

発掘調査は同年12月14日まで実施し、平安時代の竪穴住居跡・畑、中世の溝を検出した。市埋蔵文化財センターが現地調査完了を確認後、12月14日付けで現地を引き渡した。

その後引き続き出土品整理を実施した。

桃井泰昌氏からは、試掘着手から発掘調査の完了までにわたり、物心両面で多大な協力を受けた。記してお礼申し上げます。

なお、今回の試掘確認調査の結果、遺跡全体の範囲が北側へ拡張することが明らかになったため、平成19年10月2日付け埋文第216号で包蔵地範囲の追加について富山県教育委員会に通知し、富山市遺跡地図に変更結果を登載した。　(古川)

【付記】平成21年1月7日付けで有限会社山武考古学研究所が破産宣告を受けたため、本報告書の再編集・発行は、折原洋一氏の協力を受け、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが行ったものである。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1．地理的環境

上新保遺跡は、富山平野のほぼ中央に位置し、ＪＲ富山駅より南方へ５km、北陸自動車道富山インターチェンジより西方へ2kmの富山市上新保地内に所在する。

富山平野は、神通川扇状地と常願寺川扇状地の複合扇状地と下流域の氾濫原より構成され、神通川と常願寺川の二大河川及びそれより派生する多く中小河川が存在し、地形的に区分される。上新保地区は常願寺川扇状地が神通川扇状地に複合する扇状地先端の北西に当たり、本地区は扇状地から氾濫原地帯に移行する傾斜返還点付近となる。遺跡は常願寺川扇状地を流れる中小河川のひとつである鼬川の左岸に立地する。鼬川は常願寺川から流れ出した後に神通川へと流れ込み、南東から北西に走行する川で、網の目のように分流・合流している。

遺跡周辺は、標高が25～40mで、全体として北西方向に下る緩やかな傾斜を有し、この標高より北西方向では等高線の幅が広くなり、東南方向では密となる。また、この等高線の範囲では自噴井と呼ばれる湧水点が数多く存在し、的場の清水・本郷の湯・経力の湯・刀尾神社境内内の功徳水・重要文化財浮田家住宅前の清水などが知られる。本遺跡周辺でも現在は工場などの地下水利用などにより地下水位は下がっているもの、2000年度の上新保の発掘調査では深さ2m程の井戸が検出されており（富山市教育委員会2000）、地下水脈は比較的浅かったことが理解できる。

地質は、地下５～6mに人頭大を超える礫を含む礫層が存在し、その上に砂層を中心とした層群が形成されている。この層群は主として黄色砂質土層と黒色土層が互層となっているが、黒色土層の多くは黄色砂質土層よりも層厚がかなり薄く、形成された期間が短期間であったと考えられる。今回の調査地区では最上層にある黒色土層を遺物包含層としており、その直下に黄色砂質層があり、遺構確認面となっている。

2. 歴史的環境

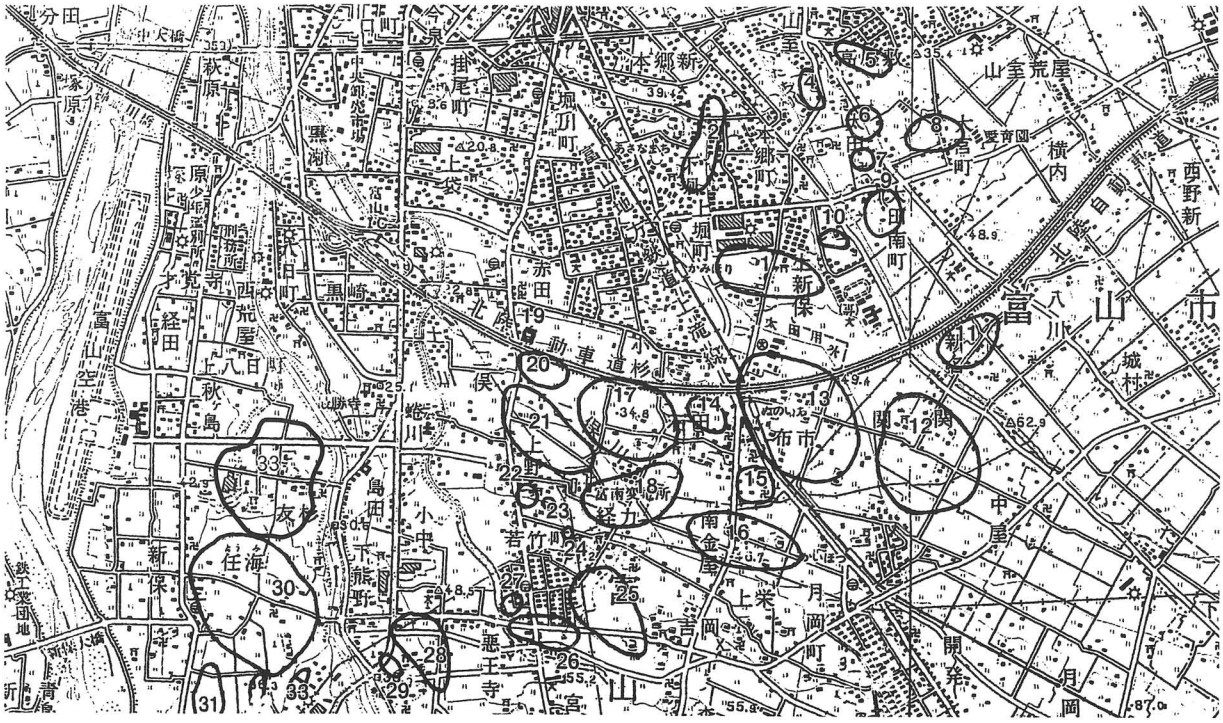
本地域では、縄文時代から中世の遺跡が知られる。

縄文時代では、本遺跡西方約2kmに中期に属する二俣遺跡が存在する。晩期では吉岡遺跡で石囲炉等が検出されており（富山市教育委員会2002）、同遺跡周辺は後・晩期の遺跡が集中する。

弥生時代では、遺跡数が少ないが吉岡遺跡・経力遺跡で竪穴住居・土坑などが検出されており（富山市教育委員会2002）、黒瀬大屋遺跡では後期の遺物が発見されている。

古墳時代では、神通川沿いの任海宮田遺跡などで知られるが、全体に希薄な分布状況である。上新保遺跡では、６世紀代の良好な須恵器が土坑からまとまって出土した（富山市教委2000）

古代では古墳時代以前とは大きく異なり、確認される遺跡数は大幅に増加し、本遺跡周辺の開発が進んだことが明らかである。集落遺跡としては友杉遺跡・任海宮田遺跡・吉倉Ｂ遺跡・上野井田遺跡・上新保遺跡などで集落が検出されている。任海宮田遺跡では100軒を越える竪穴住居や掘立柱建物などが調査され、「城長」「観音寺」「寺」「墾田」などの墨書土器が出土し、寺院や公的施設が存在したことを推測させる（富山県埋蔵文化財センター1996～1998）。吉倉Ｂ遺跡でも古代の集落が確認され、「北家」などの墨書土器が出土している（富山市教育委員会1997）。上野井田遺跡では竪穴住居と掘立柱建物が検出されている（富山市教育委員会1998）。上新保遺跡は2000年度にも今回の調査区より西方へ約100mの地点が発掘調査された。約100軒の竪穴住居や掘り立ち柱建物が検出され、今回の調査区も同集落の続きと考えられる。古代の集落である上新保遺跡は任海宮田遺跡と比較すると墨書土器の量が微量で大きく異なり、両遺跡に性格の差が認められる。



1　上新保遺跡　2　本郷椎木遺跡　3　堀遺跡　4　太田中田Ⅰ遺跡　5　太田惣見遺跡　6　太田中田Ⅱ遺跡
7　太田本郷城跡　8　大宮町遺跡　9　太田南町遺跡　10　本郷水上遺跡　11　新名遺跡　12　関遺跡　13　布市北遺跡
14　石田打宮遺跡　15　興国寺館跡　16　布市遺跡　17　石田北遺跡　18　石田遺跡　19　二俣寺跡　20　二俣北遺跡
21　二俣遺跡　22　上野亀田遺跡　23　上野遺跡　24　上野遺跡　25　吉岡遺跡　26　若竹町遺跡　27　悪王寺遺跡
28　下熊野遺跡　29　安養寺遺跡　30　任海宮田遺跡　31　吉倉Ｂ遺跡　33　友杉遺跡

第１図　　遺跡の位置と周辺遺跡

中世の新保地区は、寿永３年(1184)の源頼朝下文(賀茂別雷神社文書)などの史料に加茂社領新保御厨とあり、滑川新保と並び比定地候補のひとつとなっている。なお、新保御厨は永徳２年(1490)まで賀茂神社と関係があったとされている。

本遺跡の南方にある布市は、康永３年(1344)に越中守護となった桃井直常が観応の乱で足利方に敗れた後に余生を過ごした地という伝承が残されており、上新保地内にある桃井家はその末裔という。また、布市にある曹洞宗太平山興国寺は興国６年(1345)直常開基を伝え、周辺に中世寺社七宮七寺があったと伝えられている。なお布市には「古新保」という小字が存在し、新保と関係すると考えられる。

上新保遺跡は、2000年度の調査で、これらの史料や伝承と同時期の13～14世紀の掘立柱建物を中心とした村落が検出されている。

近世では、上新保遺跡の西方に近接して中世にまで遡る飛騨街道が存在する。主要な幹線である飛騨街道は飛州往来・飛州街道と呼ばれ、富山～小泉～布市～小黒～坂本～笹津の道程で、小泉～布市は小泉～大町～下堀～上堀～布市となり、布市～笹津までを布市道･布市往来と呼ばれていた。

上新保遺跡では2000年度の調査で、桃井直常の末裔という桃井清光家の敷地内より石垣遺構を伴う近世の屋敷跡を検出した。

Ⅲ　調査の方法と経過

1．調査の方法

遺跡地は、宅地造成工事予定地を対象に富山市教育委員会により平成19年9月25・26日の間に試掘調査が実施され、その結果平安時代と中世の遺構・遺物が検出された。この成果に基づき調査対象の道路予定部分の本調査を実施することとなった。

調査区は、公共座標（世界測地系）を基準に10m × 10mのグリッドを設定し、グリッドの名称は南北軸を北よりアルファベットでA・B・C・・・、東西軸を西より算用数字で1・2・3・・・とし、北西隅を代表させた。表土掘削は重機を使用し、遺物包含層及び遺構調査は人力により掘り下げを行った。遺構調査は土層観察用の畦を残し、埋没状況などを検討しつつ調査を実施した。実測は航空写真による実測を行い、部分的に平板実測により補足した。写真撮影は必要に応じ随時行い、35㎜カラーネガフィルム・35㎜白黒ネガフィルム、白黒6×7番フィルムを用いた。

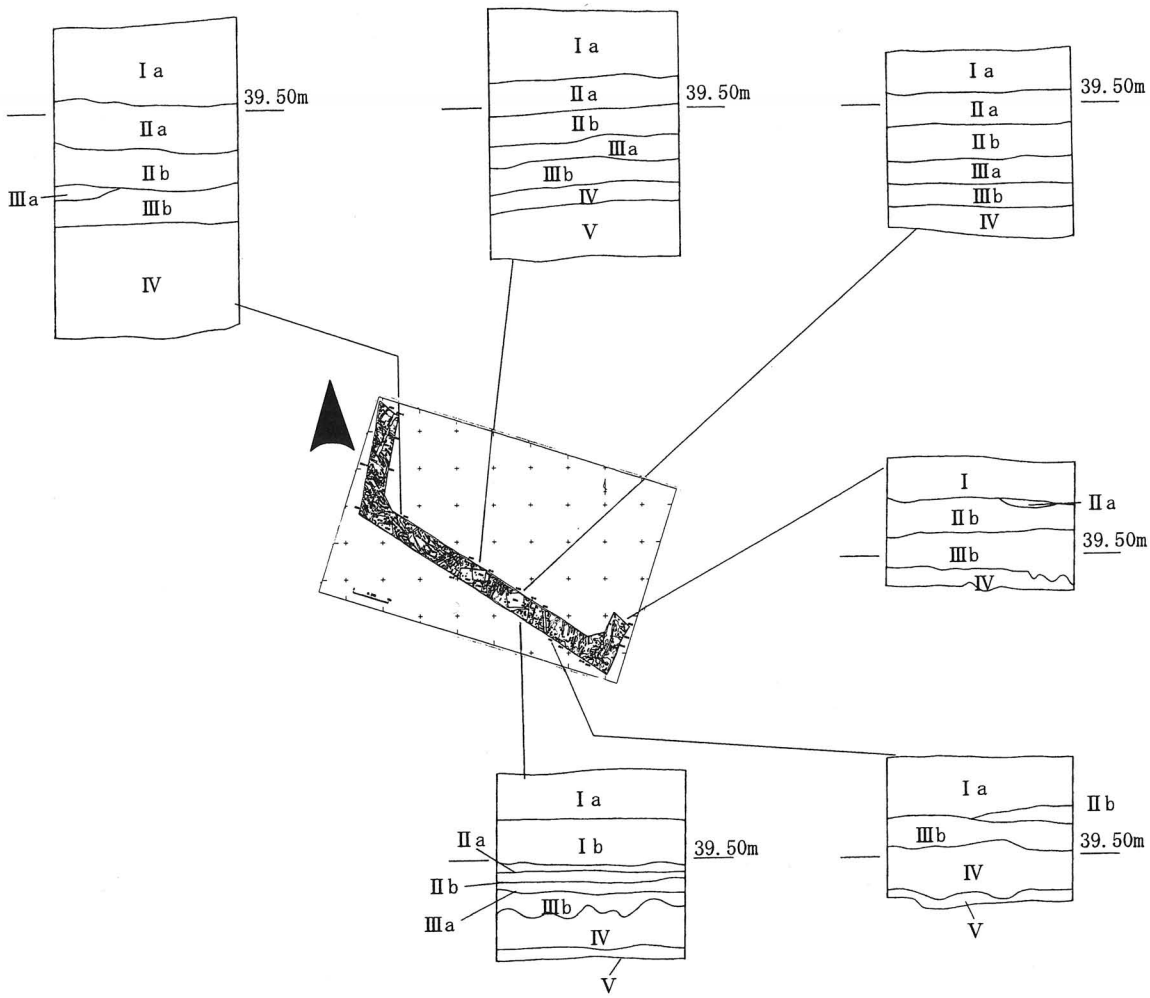
2．調査の経過

調査は、平成19年11月26日より開始し、同年12月20日に終了した。

11月26日　調査の準備を行う。
11月28日　調査区の東より表土掘削を開始する。
11月29日　表土掘削作業の継続、異物包含層掘り下げ・遺構確認作業を行う。
11月30日　表土掘削・遺物包含層掘り下げ・遺構確認作業を継続する。
12月　1日　表土掘削・遺物包含層掘り下げ・遺構確認作業を継続する。
12月　2日　表土掘削・遺物包含層掘り下げ・遺構確認作業を継続する。
12月　3日　表土掘削を終了し、遺物包含層掘り下げ・遺構確認作業を継続する。
12月　4日　遺物包含層掘り下げ・遺構確認作業をほぼ終了する。
12月　5日　調査区東部の遺構調査を開始する。
12月　6日　調査区南東部と中央部の遺構調査を継続し、土層断面・遺物出土状況の実測・写真撮影を開始する。
12月　7日　調査区南東部と中央部の遺構調査、土層断面・遺物出土状況の実測・写真撮影を行う。
12月　8日　調査区南東部と中央部の遺構調査、土層断面・遺物出土状況の実測・写真撮影を行う。
12月　9日　調査区南東部と中央部の遺構調査、土層断面・遺物出土状況の実測・写真撮影を行う。
12月10日　調査区南西部と中央部の遺構調査、土層断面・遺物出土状況の実測・写真撮影を行う。
12月11日　調査区南西部と中央部の遺構調査、土層断面・遺物出土状況の実測・写真撮影を行う。
12月12日　調査区南西部と西部の遺構調査、土層断面・遺物出土状況の実測・写真撮影を行う。
12月13日　調査区南西部と中央区の遺構調査、土層断面・遺物出土状況の実測・写真撮影を行う。航空写真測量のため対空基準点の設定を行う。富山市教育委員会埋蔵文化財センターによる調査終了確認。
12月14日　航空写真撮影を行う。
12月15日　機材の撤収をもって調査を終了。この間各段階で埋蔵文化財センターの確認を受けた。

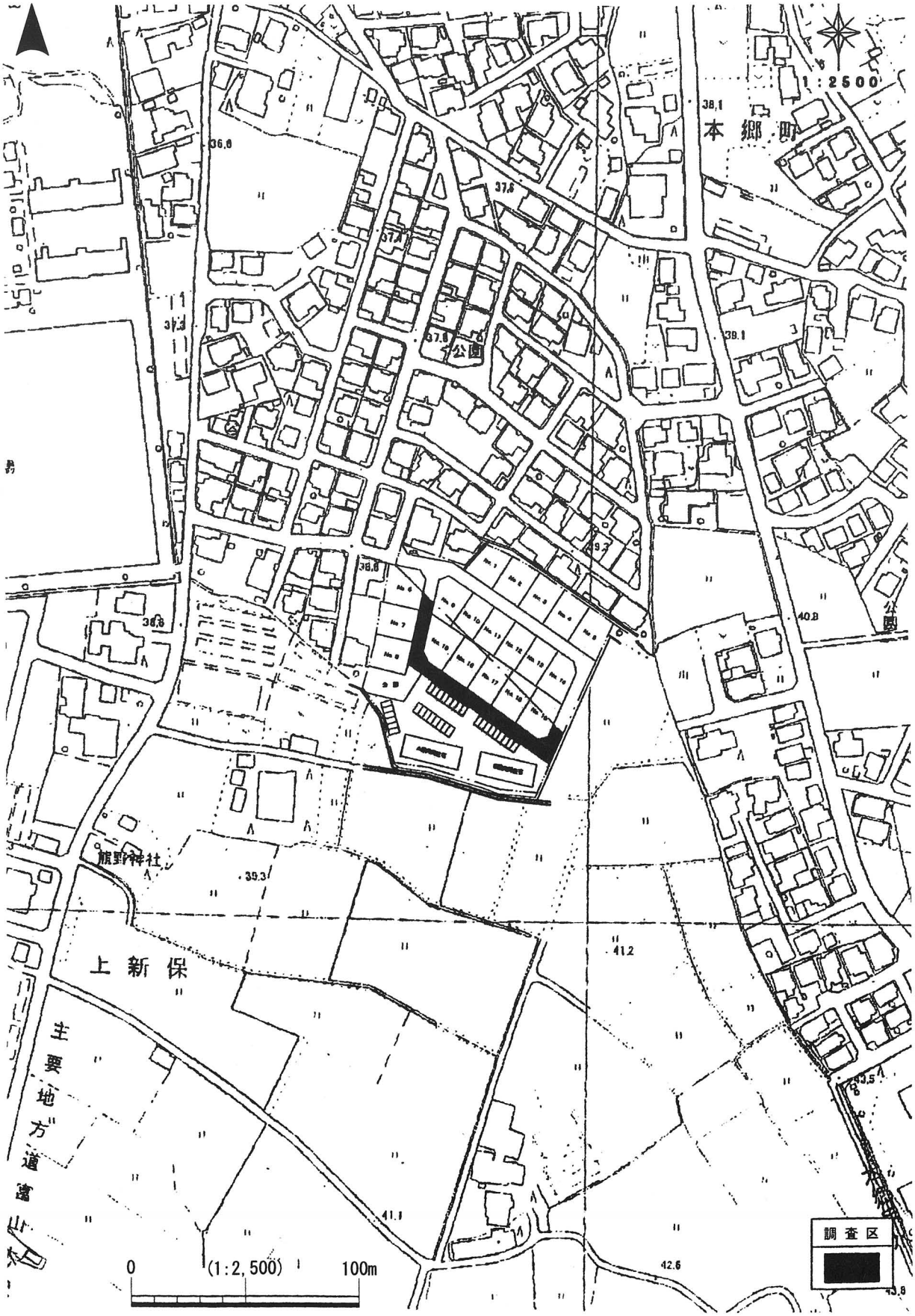
3．基本層序

調査区の土層堆積は、Ⅰａ層からⅤ層までの堆積が確認されている。表土層であるⅠａ層から遺構確認面となるⅤ層上面までの堆積は調査区の東から西に向かい厚くなっている。

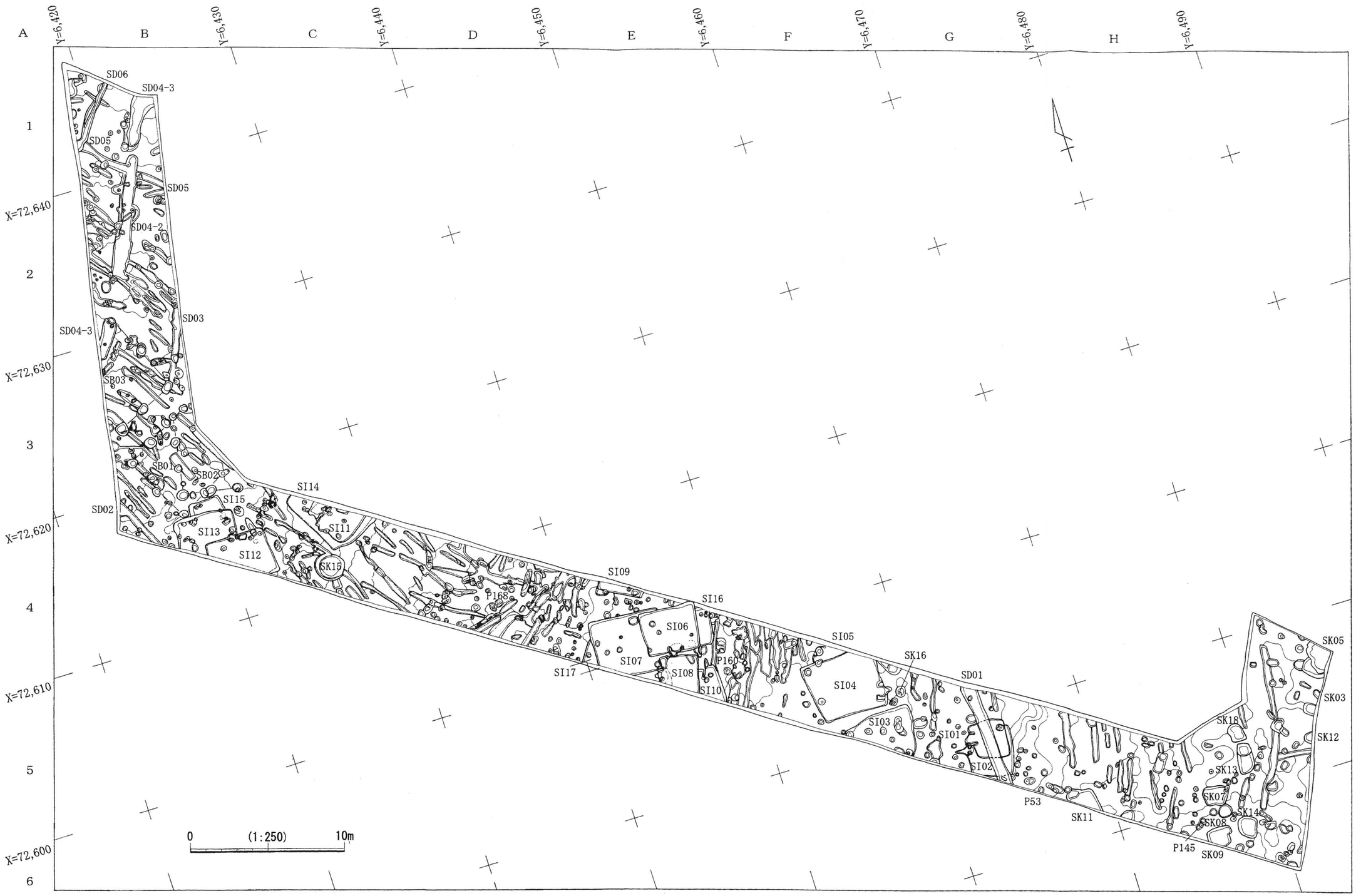


第２図　　基本層序

Ⅰａ層　　暗褐色土。現水田耕作土。
Ⅰｂ層　　灰褐色土。旧水田耕作土。
Ⅰｃ層　　明灰褐色土。旧水田耕作土。
Ⅱ　層　　明灰褐色土。下部に酸化鉄を有する。
Ⅲ　層　　灰黒色土。酸化鉄粒・炭化物を少量含む。粘性・しまりともに良好。中世遺物包含層。
Ⅳａ層　　黒色土。炭化物を少量含む。粘性・しまりとも良好。中世の遺物包含層。
Ⅳｂ層　　灰褐色土。炭化物を少量含む。粘性有、しまり良好。古代・中世の遺物包含層。
Ⅴ　層　　黄色砂質土。シルト質で、細粒均質な砂層である。上面が遺構確認面である。



第３図　　調査区域図


A
B
C
D
E
F
G
H
Y=6,420
Y=6,430
Y=6,440
Y=6,450
Y=6,460
Y=6,470
Y=6,480
Y=6,490
1
2
3
4
5
6
X=72,640
X=72,630
X=72,620
X=72,610
X=72,600
SD06
SD04-3
SD05
SD05
SD04-2
SD03
SD04-3
SB03
SB01
SB02
SD02
SI15
SI14
SI13
SI11
SI12
SK15
P168
SI09
SI16
SI06
SI05
SI07
SI08
SI17
P160
SI10
SI04
SK16
SD01
SI03
SI01
SI02
P53
SK11
SK05
SK03
SK18
SK12
SK13
SK07
SK14
SK08
P145
SK09
0
(1:250)
10m

第４図　　調査区全体図

Ⅳ　調査の概要

1．遺構

遺構は、古代の竪穴住居・掘立柱建物・土坑・畑址、中世の土坑・溝を検出した。

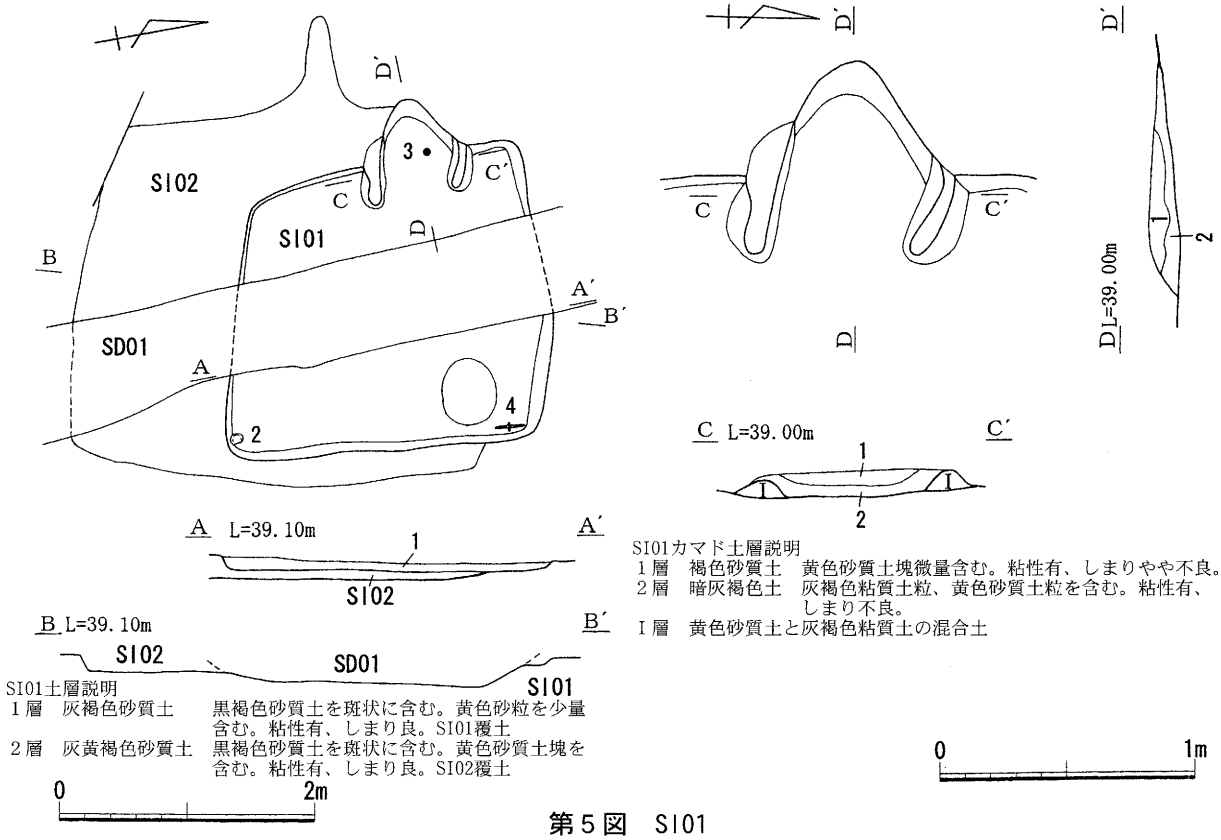
(1)竪穴住居

SI01(第５図　図版５－１～５)

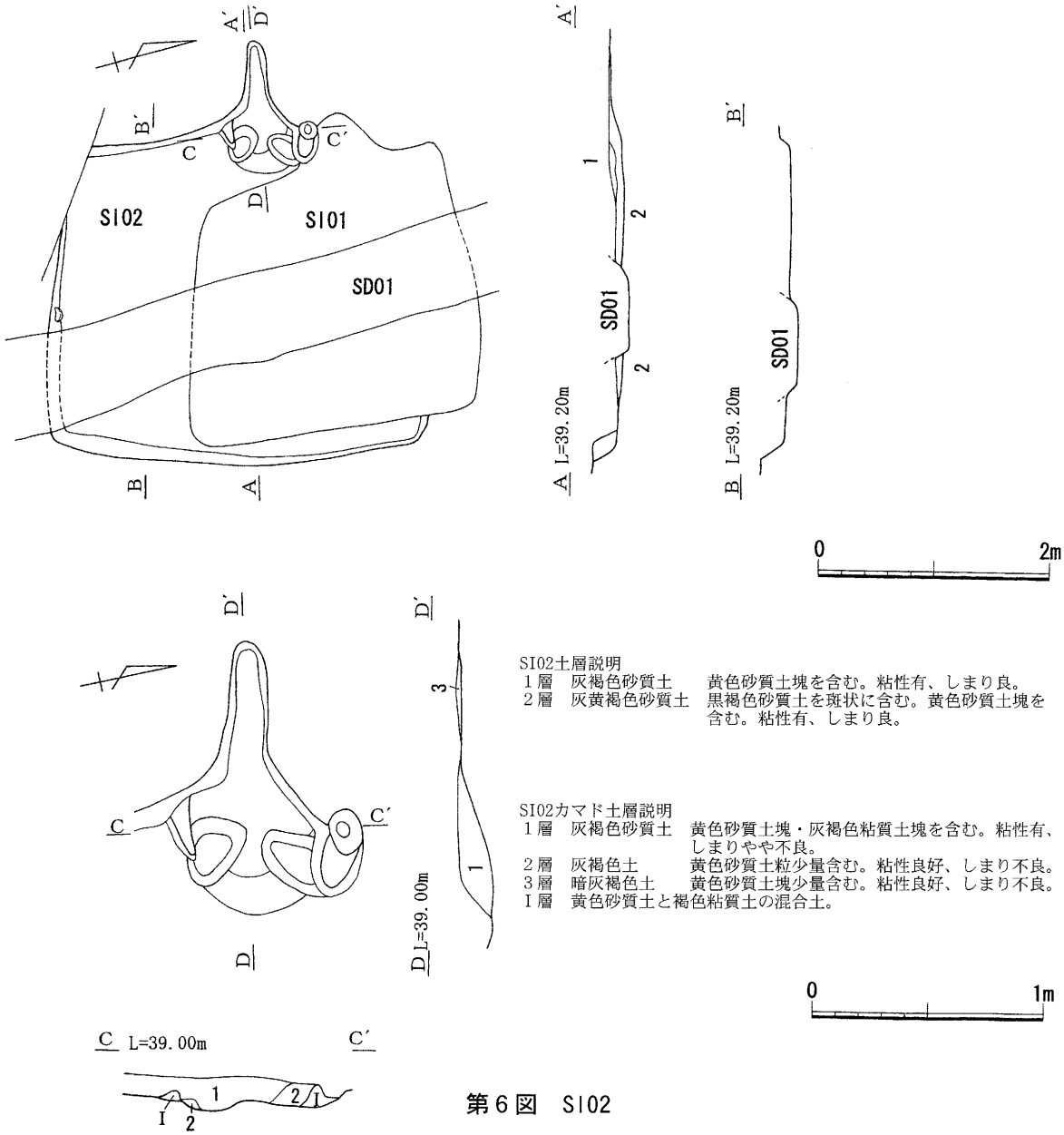
調査区の東部に位置する。重複関係はSD01とピットより古く、SI02より新しい。平面形は長軸長2.50m×短軸長2.32mの南北方向が僅かに長い長方形である。主軸方向はN-80°-Wである。壁は高さ10cmで、ほぼ直立する。床面は中央部をSD01に削平されて消失しており、住居北部は地山となる黄色砂質土を床面とし、中央部から南部はSI02の覆土中に構築され貼床となっている。貼床は締りが良好な黄色砂層ブロックを含む灰褐色土である。内部施設はカマドが存在し、柱・周溝等は無い。カマドは西壁の中央部やや北寄りに位置する。袖は黄褐色粘質土塊を含む黄色砂質土で構築されており、やや弧を描いて細長く延びる。燃焼部はほぼ平坦で、僅かに熱を受けた痕跡が見られる。煙道部は壁外へ延びており、幅60cm×長さ40cmのV字形を呈し、緩やかに立ち上がる。遺物は須恵器・土師器・鉄製紡錘車が出土した。1・2・4は覆土下層より、3はカマド上面から出土した。

SI02(第６図　図版６－１・２)

調査区の東部に位置する。重複関係はSI01・SD01とピットより古い。平面形は長軸長3.35m×短軸長2.98mの南北方向が僅かに長い長方形である。主軸方向はN-75°-Wである。壁は北壁～西壁北半がSI01に、南壁東部がSD01に削平され残存状況が悪いが、最も高いところで25cmを測り、やや傾斜して立ち上がる。床面は中央部をSD01に削平されて消失しており、地山となる黄色砂質土で構築されている。内部施設はカマドが存在し、柱・周溝等は無い。カマドは西壁のほぼ中央部



第５図　SI01



第6図　SI02

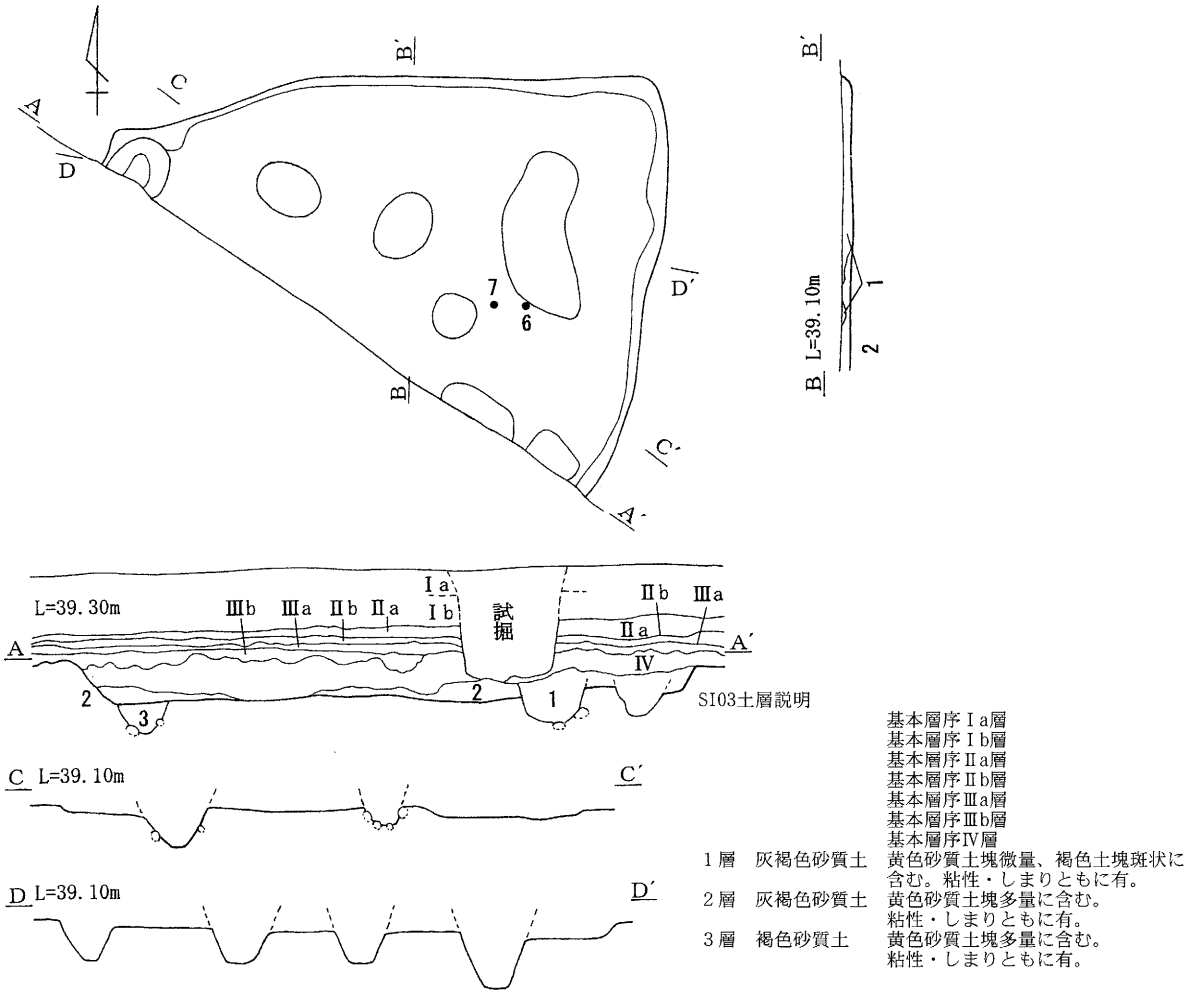
に位置する。遺存する袖は黄褐色粘質土塊を含む黄色砂質土であるが、その内側に石材抜き取り痕と推測される深さ10cmほどのピットが両袖に各1基ずつ存在し、石組と土によって構成されていたと考えられる。燃焼部は浅く皿状に窪み、僅かに熱を受けた痕跡が見られる。煙道部は壁外へ延びており、幅20cm×長さ65cmの細長いV字形を呈し、緩やかに立ち上がった後、水平に延びる。遺物は須恵器・土師器が出土した。5は覆土下層より出土した。

SI03(第7図　図版7－1)

調査区中央部の東寄りに位置する。重複関係は畑跡とピットより古い。住居南～東部にかけては調査区外へと延びており、規模形状は不明な点が多いが、東西長4.78m×南北長3.35m以上の方形である。主軸方向はN-90°-W。壁は最も高いところで40cmを測り、ほぼ直立する。床面は地山となる黄色砂質土に構築されているが、部分的に下層の礫層が露出している。カマド・柱穴・周溝は未検出であるが、住居北西隅よりピットが検出された。ピットは南半部が調査区外となるが、南北長40cm以上×東西長50cmの楕円形を呈し、断面形状は深さ20cmのU字状となり、性格は不明である。遺物は須恵器・土師器が出土した。6・7は床面より出土した。

SI04(第8図　図版7－2、8－1～4)

調査区中央部の東寄りに位置し、住居北東隅は調査区外となる。重複関係はピットより古く、

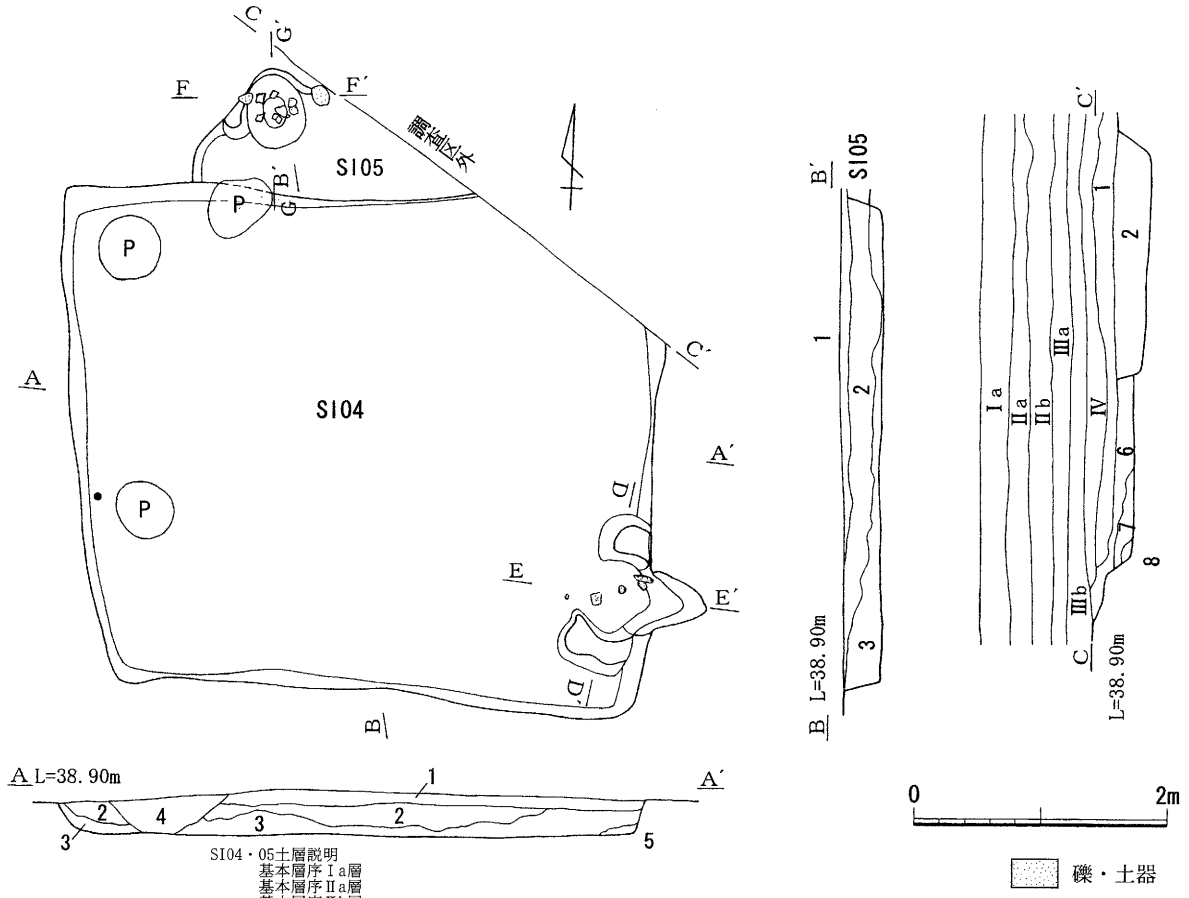


第７図　SI03

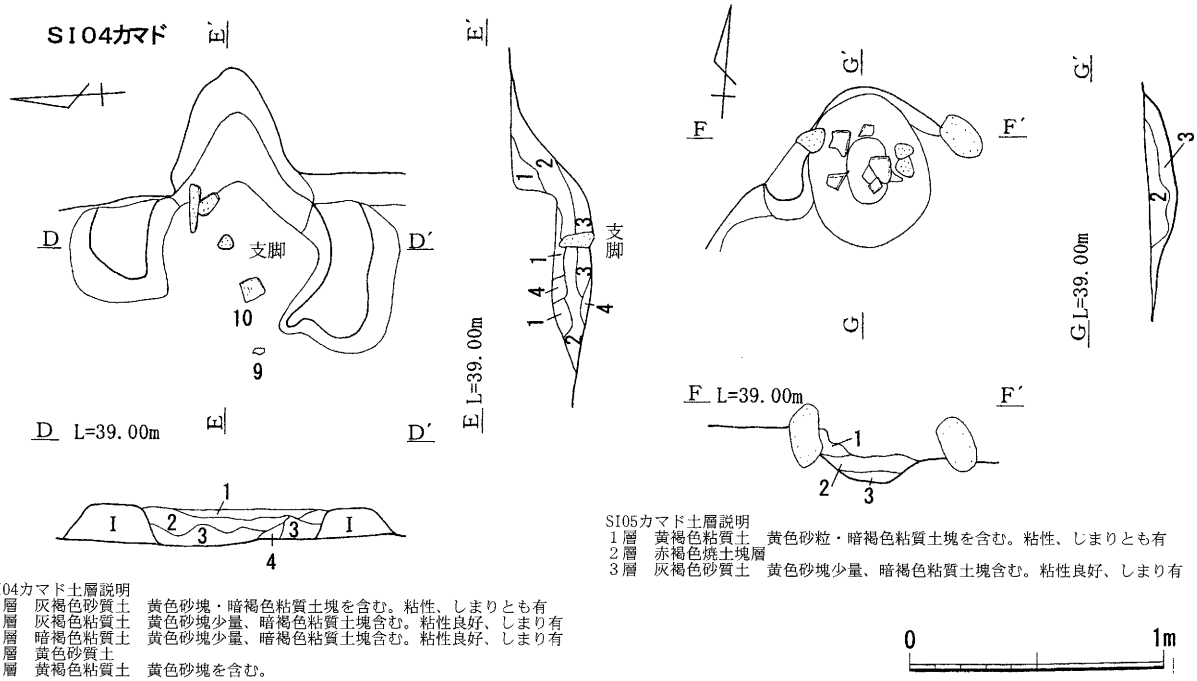
SI05 より新しい。平面形は長軸長 4.64m ×短軸長 3.85m の東西方向が僅かに長い長方形である。主軸方向は N-90° -E である。壁は最も高いところで 28cm を測り、やや傾斜して立ち上がる。床面は地山となる黄色砂質土に構築されているが、住居南西部は下層の礫層が露出している。内部施設はカマドが存在し、柱穴・周溝等は無い。カマドは東壁の南寄りに位置する。遺存する袖は黄色砂塊を含む黄褐色粘質土で、弧状に延びる。燃焼部は浅く皿状に窪み、熱を受け赤色化しており、中央部には棒状の自然礫の支脚が存在している。煙道部は壁外へ延びており、幅 50cm ×長さ 45cm の V 字形を呈し、緩やかに立ち上がる。遺物は須恵器・土師器が出土した。10・11 はカマドより、９は床面より、８・11 は覆土より出土した。

SI05（第８図　図版７－２・９－１）

調査区の東部に位置する。住居は大部分が調査区外へと延びており、南部では SI04 と重複し、SI05 が古いため、カマドが確認されただけである。平面形・主軸方向は不明である。床面は地山となる黄色砂質土に構築されている。内部施設はカマドが存在し、柱・周溝等は未検出である。カマドは北壁に位置する。袖は黄褐色粘質土塊を含む黄色砂質土と立石により構成されていたと考えられる。立石は左右の袖の内側に各１個が遺存するだけであるが、本来は数個が並び内壁を成し、その外側に黄褐色粘質土が覆っていと思われる。燃焼部は浅く皿状に窪み、僅かに熱を受けた痕跡が見られる。煙道部は壁外へ僅かに延び、緩やかに立ち上がる。遺物は須恵器･土師器が出土した。13 ～ 15 はカマドから出土した。



SI04・05土層説明
基本層序Ⅰa層
基本層序Ⅱa層
基本層序Ⅱb層
基本層序Ⅲa層
基本層序Ⅲb層
基本層序Ⅳ層
1層　黒褐色砂質土　黄色砂塊多くを含む。粘性不良、しまり有。
2層　灰褐色砂質土　灰褐色粘質土がラミナ状に、灰褐色粘質土が斑状に含まれる。粘性良好、締まり有。
3層　灰褐色砂質土　黄色砂塊やや多くを含む。粘性不良、しまり有。
4層　灰褐色砂質土　黄色砂塊多くを含む。粘性不良、しまり有。
5層　暗灰褐色砂質土　黄色砂塊やや多くを含む。粘性不良、しまり有。
6層　灰褐色砂質土　褐色粘土塊斑状に含む。粘性・締まりともに有。SI05
7層　暗褐色粘質土　黄色砂を含む。粘性・締まりともに良好。SI05
8層　黄色砂質土　暗褐色粘質土を含む。SI05



SI05カマド土層説明
1層　黄褐色粘質土　黄色砂粒・暗褐色粘質土塊を含む。粘性、しまりとも有
2層　赤褐色焼土塊層
3層　灰褐色砂質土　黄色砂塊少量、暗褐色粘質土塊含む。粘性良好、しまり有

SI04カマド土層説明
1層　灰褐色砂質土　黄色砂塊・暗褐色粘質土塊を含む。粘性、しまりとも有
2層　灰褐色粘質土　黄色砂塊少量、暗褐色粘質土塊含む。粘性良好、しまり有
3層　暗褐色粘質土　黄色砂塊少量、暗褐色粘質土塊含む。粘性良好、しまり有
4層　黄色砂質土
Ⅰ層　黄褐色粘質土　黄色砂塊を含む。

第8図　SI04・05

SI06（第９図　図版９－２、10－１）

調査区中央部に位置する。重複関係はピットに切られ、SI07・08・16を切っている。平面形は長軸長3.75m×短軸長3.10mの東西方向が長い長方形である。主軸方向はほぼ真北である。壁は最も高いところで25cmを測り、直立する。床面は地山となる黄色砂質土に構築されている。内部施設はカマドが存在し、柱穴・周溝等は無い。カマドは南壁の中央部に位置する。遺存する袖は黄色砂塊を含む黄褐色粘質土で、直線的に延びる。燃焼部は浅く皿状に窪み、熱を受け赤色化している。煙道部は壁外へ延びており、幅43cm×長さ20cmのＵ字形を呈し、やや急な角度立ち上がる。遺物は須恵器・土師器・鉄器が出土した。16～18は覆土より出土した。

SI07（第10図　図版10－２）

調査区中央部に位置し、住居南西隅は調査区外となる。重複関係はSI06・SI08・ピットより古く、SI17より新しい。平面形は長軸長4.64m×短軸長3.92mの東西方向が長い長方形である。主軸方向は不明である。壁は最も高いところで14cmを測り、直立する。床面は地山となる黄色砂質土に構築されている。柱穴・周溝等は無く、カマドは未検出で、SI06により削平された東壁に位置した可能性がある。遺物は須恵器・土師器が出土した。19は覆土上層より出土した。

SI08（第10図　図版11－１・２）

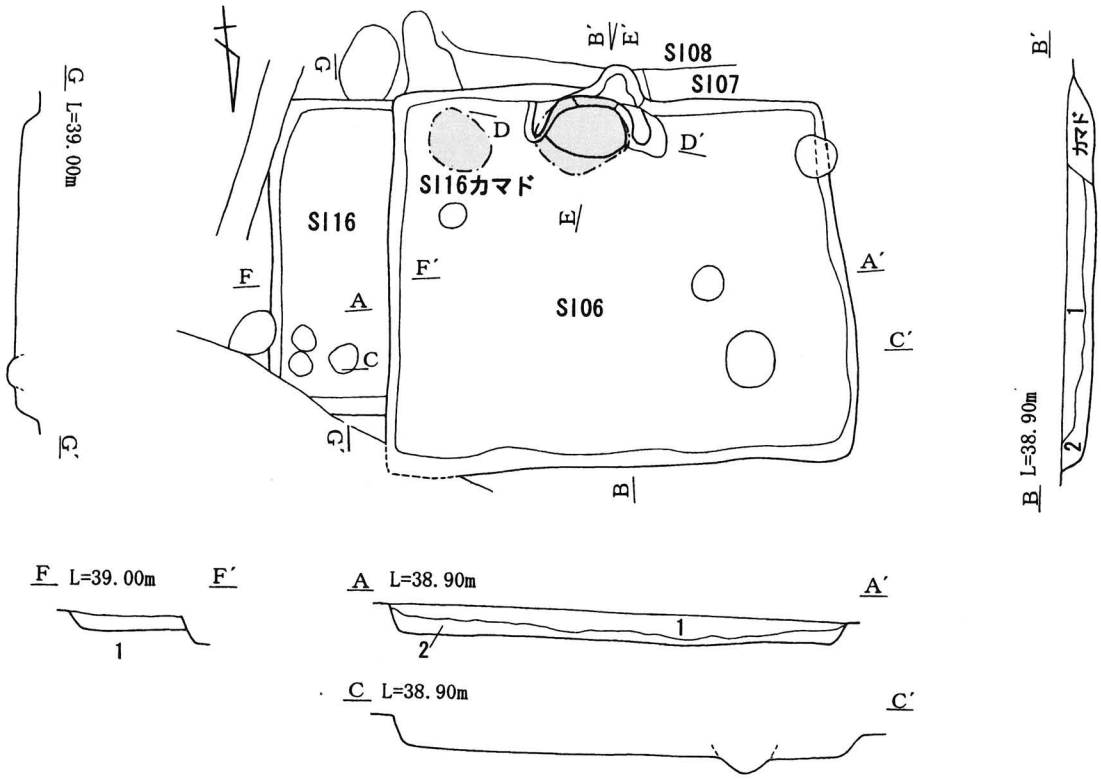
調査区中央部に位置し、住居南部は調査区外となる。重複関係はSI06・ピットより古く、SI07・10より新しい。規模形状は住居南部が調査区外となるため不明だが、南北長2.50m以上×東西長2.54mの方形基調である。主軸方向はN-80°-Wである。壁は最も高いところで14cmを測り、ほぼ直立する。床面は北部が地山となる黄色砂質土に構築され、住居南部はSI10の覆土の上に貼床を行っている。内部施設はカマドが存在し、柱・周溝等は無い。カマドは西壁の中央部やや北寄りに位置する。遺存する袖は灰褐色粘質土を含む黄褐色砂質土であるが、左袖の内側に大型の石材が倒れており、この石材を立てて内壁としていた。その外側を黄褐色砂質土で覆っていたと考えられ、内壁を構成していた石材の多くは抜き取られている。燃焼部は水平で、熱を受けた痕跡は見られるが赤色化していない。煙道部は壁外へ延びており、幅70cm×長さ45cmのＵ字形を呈し、急な角度で立ち上がった後、水平に延びる。遺物は須恵器・土師器が出土した。20はカマド内から、21～22は床面から出土した。

SI09（第11図　図版12－１）

調査区中央部に位置し、住居南部が調査されただけで、他は調査区外である。重複関係は畑跡・ピットより古い。規模形状は住居南部が検出されただけで規模形状は不明だが、南北長0.55m以上×東西長3.00mの方形基調である。主軸方向は不明である。壁は最も高いところで20cmを測り、ほぼ直立する。床面は黄色砂質土に構築される。カマド・柱穴・周溝等は未検出である。遺物は須恵器・土師器が出土した。24は覆土より出土した。

SI10（第11図　図版12－２・３）

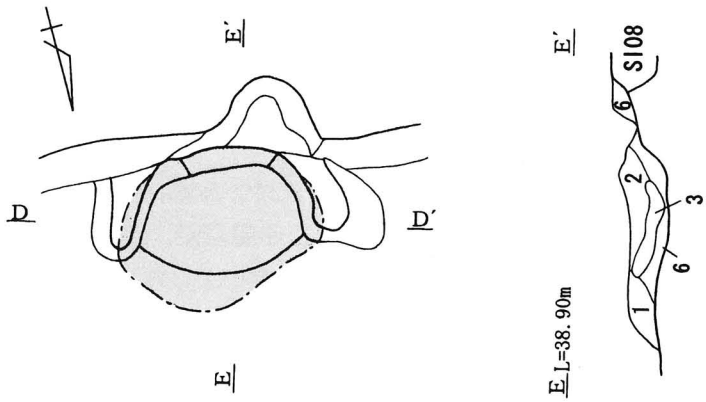
査区中央部に位置し、住居南部は調査区外である。重複関係はSI08・ピット・畑跡より古い。規模形状は住居南部が調査区外である、西部がSI08により削平されるため不明だが、南北長2.50m以上×東西長1.50m以上の方形と考えられる。主軸方向はN-5°-Wである。壁は最も高いところで18cmを測り、ほぼ直立する。床面は黄色砂質土に構築される。内部施設はカマドが存在し、柱穴・周溝等は未検出である。カマドは北壁の東部に位置する。袖は内側に大型の石材を立てて内壁とし、その外側に黄色砂を含む黄褐色粘質土で覆っていたと考えられ、一部を残し内壁を構成していた石材の多くは抜き取られたと推測される。燃焼部は皿状に窪み、熱を受けた痕跡はあるが赤色

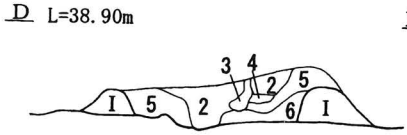


SI06土層説明
1層　灰褐色砂質土　褐色粘質土・黄色砂質土塊を含む。粘性有、しまり有。
2層　暗褐色砂質土　黄色砂粒を多量に含む。粘性不良、しまり良

SI16土層説明
1層　灰褐色砂質土　黄色砂質土塊を含む。粘性有、しまり良。

0　2m





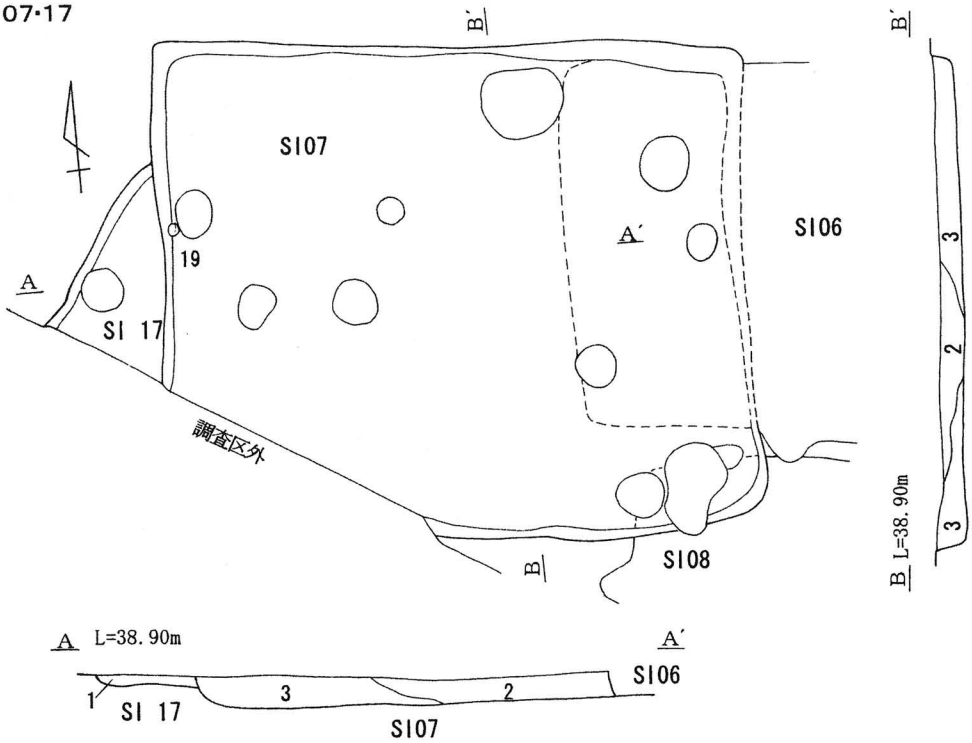
D′ SI06カマド土層説明

1層	灰褐色粘質土	黄色砂塊やや多くを含む。粘性有、しまり良
2層	暗灰褐色粘質土	黄色砂粒を大量に含む。粘性、しまりとも有
3層	灰黄色砂質土	暗灰褐色粘質土塊を含む。粘性、しまりとも有
4層	暗褐色砂質土	暗褐色粘質土塊を含む。粘性、しまりとも有
5層	灰褐色粘質土	焼土粒・黄色砂塊を含む。粘性良好、しまり良好
6層	灰褐色砂質土	黄色砂塊多量に含む。粘性不良、しまり良好
I層	灰褐色砂質土	黄色砂塊含む。

0　1m

第9図　SI06・16

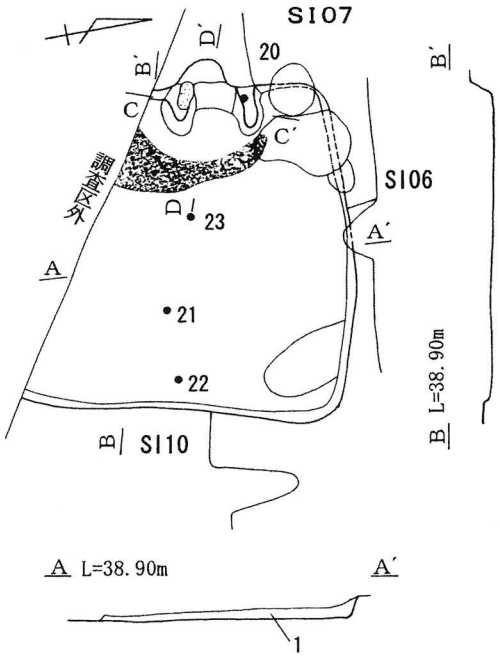
SI07・17

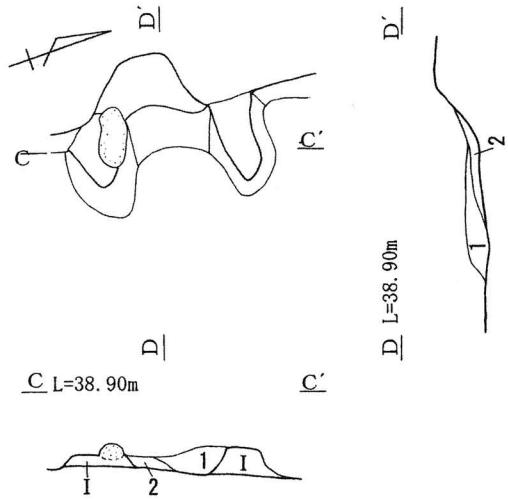


SI07・17土層説明
1層　灰褐色粘質土　　黄色砂塊を多量に含む。粘性良好、　しまり良。SI 17覆土
2層　暗灰褐色砂質土　黄色砂塊、灰褐色粘土塊を含む。粘性良好、　しまり良。SI07覆土
3層　灰褐色粘質土　　黄色砂質土塊、灰褐色粘質土を含む。粘性有、　しまり良。SI07覆土

0　2m

SI08





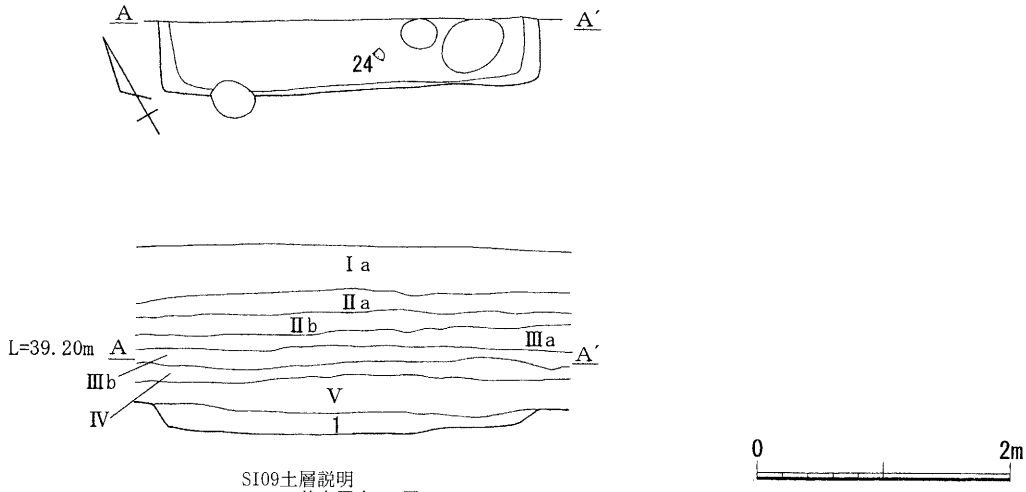
SI08カマド土層説明
1層　暗黄色砂質土　炭化物少量含む。粘性不良、しまり有。
2層　暗褐色土　黄色砂粒・炭化物を含む。粘性有、しまり有。
I層　黄褐色砂質土　灰褐色粘質土粒を含む。

SI08土層説明
1層　灰褐色砂質土　黄色砂粒を含む。粘性不良、　しまり良。

0　2m　　0　1m

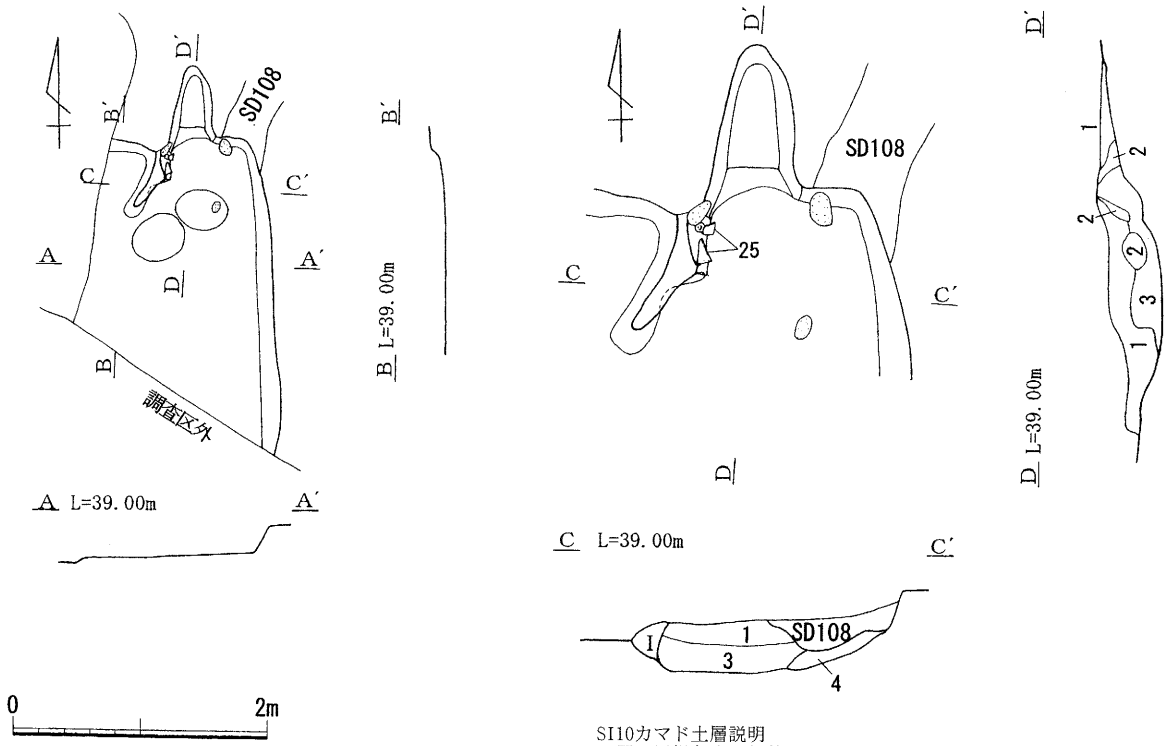
第10図　SI07・08・17

SI09



SI09土層説明
基本層序Ⅰa層
基本層序Ⅱa層
基本層序Ⅱb層
基本層序Ⅲa層
基本層序Ⅲb層
基本層序Ⅳ層
基本層序Ⅴ層
1層　灰褐色砂質土　黄色砂・炭化物を含む。粘性・しまりともに有。

SI10



SI10カマド土層説明
1層　黒褐色土　畑畝
2層　黄色砂塊
3層　灰褐色粘質土　黄色砂粒含む。粘性不良、しまりやや有。
4層　灰褐色粘質土　焼土塊を多く含む。粘性不良、しまりやや有。
Ⅰ層　黄褐色粘質土　黄色砂粒を多く含む。

0　1m

第11図　SI09・10

化していない。煙道部は壁外へ延びており、幅 37cm ×長さ 56cm の V 字形を呈し、燃焼部との境は急な角度で、それより後方は緩やかな角度で立ち上がる。遺物は須恵器・土師器が出土した。25 はカマドから出土した。

SI11（第 12 図　図版 13 － 1 ・ 2）

調査区西部に位置し、住居北部は調査区外となる。重複関係はピットより古く、SI14 より新しい。規模形状は住居北部が調査区外となるため不明だが、南北長 3.30m ×東西長 2.20m 以上の方形と考えられる。主軸方向は N-130° -W である。壁は最も高いところで 30cm を測り、ほぼ直立する。床面は北部が地山となる黄色砂質土に構築される。内部施設はカマドが存在し、柱・周溝等は無い。カマドは西壁の中央部やや北寄りに位置する。遺存する袖は灰褐色粘質土を含む灰褐色砂質土であるが、石材の利用は不明である。燃焼部は浅く皿状に窪み、熱を受けて薄く赤色化しており、直上には薄い炭層が見られる。煙道部は壁外へ僅かに延び、幅 70cm ×長さ 25cm の不整字形を呈し、急な角度で立ち上がる。遺物は須恵器・土師器が出土した。26 ～ 28・31・35 はカマドおよびカマド前面から、他は覆土中から出土した。

SI12（第 13 図　図版 14 － 1 ・ 2）

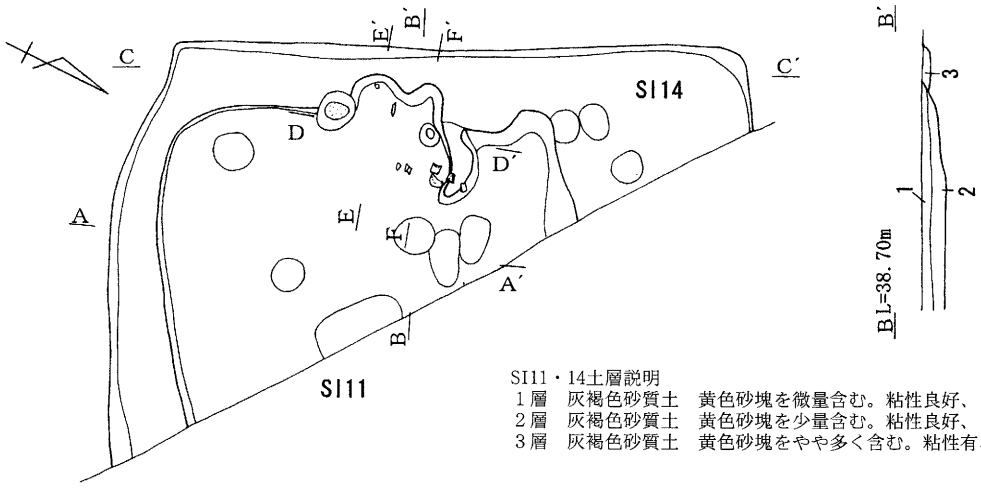
調査区西部に位置し、住居南西部が調査区外となる。重複関係はピット・畑跡より古く、SI13・15 より新しい。規模形状は南北長 2.97m ×東西長 3.15m の僅かに東西が長い長方形である。主軸方向はほぼ真北である。壁は最も高いところで 20cm を測り、ほぼ直立する。床面は黄色砂質土に構築される。内部施設には新旧 2 基のカマドが存在し、柱穴・周溝等は未検出である。新期のカマドＡは北壁の中央部に位置する。遺存する袖は黄色砂塊を含む灰褐色粘質土で構築されているが、左袖の内側に接して浅いピット状の窪みが見られ、これを石材抜き取り痕とすると内壁に石材を貼っていた可能性が考えられる。燃焼部は熱を受けた痕跡は見られるが赤色化していない。煙道部は壁外へ延びているが先端部をピットにより削平されているため全体の形状は不明であるが、幅 55cm ×長さ 20cm 以上の半円形を呈し、急な角度で立ち上がっていたと思われる。旧期のカマドＢは北壁の東部に位置する。袖は既に取り去られていたが、石材抜き取り痕と思われるピットが 2 基検出されている。ピットは推定される左右の袖先端部の位置に各 1 基があり、少なくとも焚き口部は石材を用いていたと考えられる。燃焼部は長軸長 45cm ×短軸長 40cm の楕円形を呈し、深さ 10cm の土坑状となる。カマド前面には薄い炭化物層が存在する。煙道部は幅 50cm ×長さ 85cm の細長い V 字状を呈し、緩やかに立ち上がる。遺物は須恵器・土師器が出土した。37 ～ 41 は覆土内から出土した。

SI13（第 14 図　図版 15 － 1）

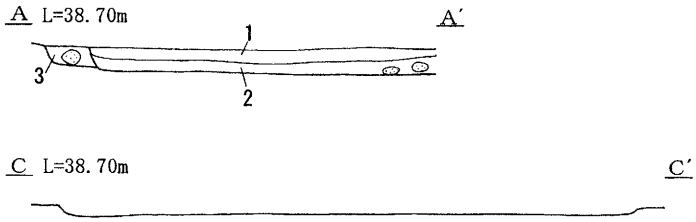
調査区西部に位置し、住居南部は調査区外である。重複関係は SI12・ピット・畑跡より古く、SI15 より新しい。規模形状は住居南部が調査区外であり、西南部を SI12 により削平されるため不明だが、南北長 2.90m 以上×東西長 3.90m の方形と考えられる。主軸方向は N-5° -E である。壁は最も高いところで 16cm を測り、ほぼ直立する。床面は黄色砂質土に構築される。内部施設はカマドが存在し、柱穴・周溝等は未検出である。カマドは北壁の東部に位置するが、遺存状況が悪く、火床と袖の一部が検出されただけである。袖は立石が 2 個残るだけで、残存状況から複数の石材を用いていたと推測される。燃焼部は焼土と炭化物が存在する。煙道部は不明である。遺物は須恵器・土師器が出土した。42 ～ 44 は覆土内から出土した。

SI14（第 12 図　図版 13 － 1）

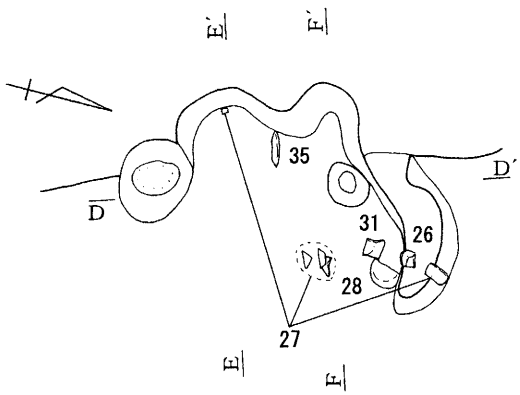
調査区西部に位置し、住居北東部は調査区外となる。重複関係は SI11・ピット・畑跡より古い。

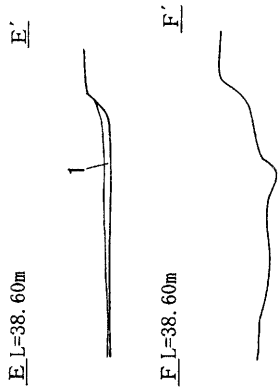


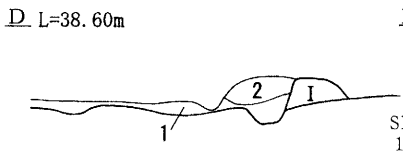
SI11・14土層説明
1層　灰褐色砂質土　黄色砂塊を微量含む。粘性良好、しまり良。SI11覆土
2層　灰褐色砂質土　黄色砂塊を少量含む。粘性良好、しまり良。SI11覆土
3層　灰褐色砂質土　黄色砂塊をやや多く含む。粘性有、しまり良。SI14覆土



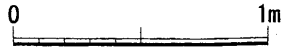
SI11カマド



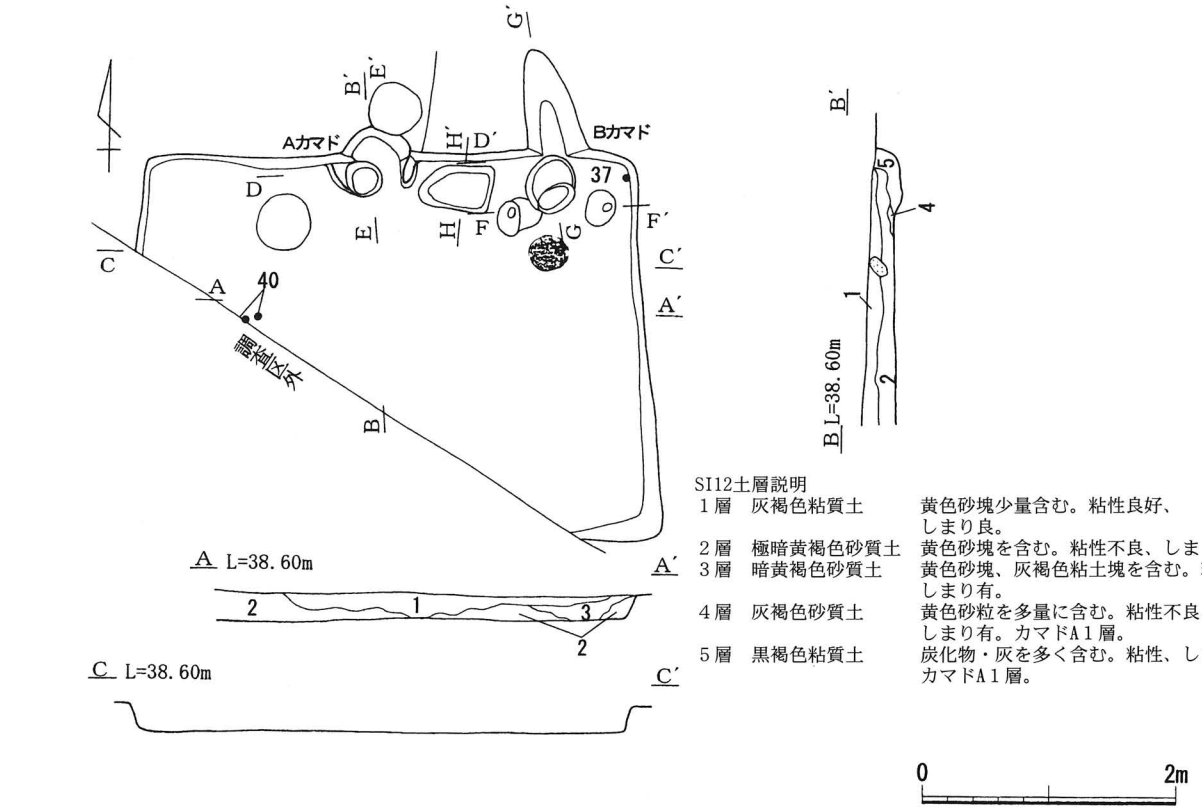




SI11カマド土層説明
1層　黒色土　炭化物多量、砂粒含む。粘性良好、しまり有。新期カマド。
2層　橙灰褐色粘質土　焼土塊・焼土粒多量、砂粒含む。粘性良好、しまり有。
I層　灰褐色砂質土　　灰褐色粘質土粒を含む。

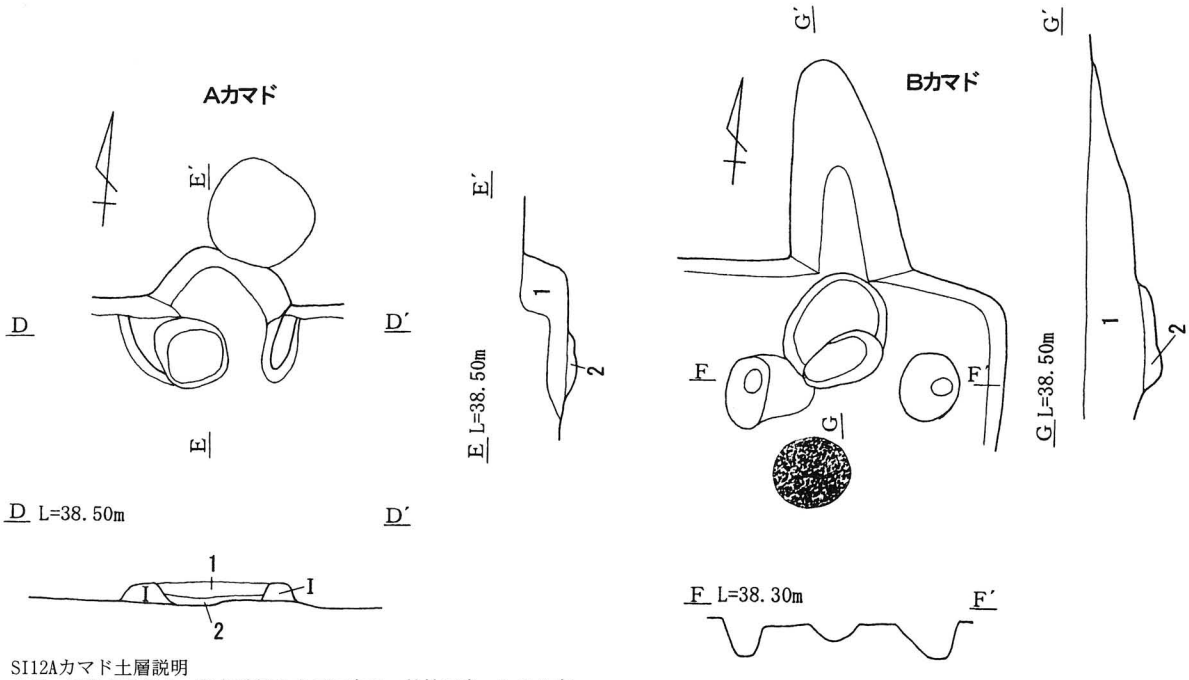


第12図　SI11・14



SI12土層説明

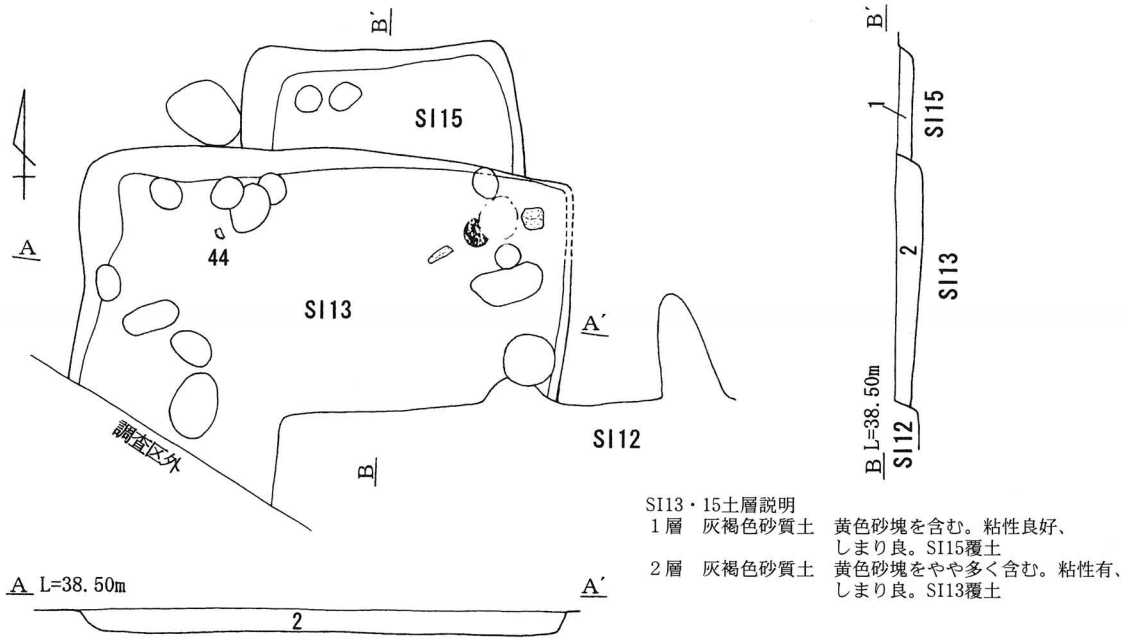
1層	灰褐色粘質土	黄色砂塊少量含む。粘性良好、しまり良。
2層	極暗黄褐色砂質土	黄色砂塊を含む。粘性不良、しまり有。
3層	暗黄褐色砂質土	黄色砂塊、灰褐色粘土塊を含む。粘性有、しまり有。
4層	灰褐色砂質土	黄色砂粒を多量に含む。粘性不良、しまり有。カマドA1層。
5層	黒褐色粘質土	炭化物・灰を多く含む。粘性、しまりとも有。カマドA1層。



SI12Aカマド土層説明
1層　灰褐色砂質土　黄色砂粒を多量に含む。粘性不良、しまり有。
2層　黒褐色粘質土　炭化物・灰を多く含む。粘性、しまりとも有。
I層　灰褐色砂質土　黄色砂塊含む。

SI12Bカマド土層説明
1層　暗灰褐色土　黄色砂粒を少量含む。粘性不良、しまり有。
2層　黄色砂質土　砂粒・炭化物を多く含む。粘性不良、しまり有。

第13図　SI12



第14図　SI13・15

規模形状は住居南部が調査区外となるため不明だが、南北長3.30m以上×東西長4.80mの方形と考えられる。主軸方向は不明である。壁は最も高いところで18cmを測り、ほぼ直立する。床面は黄色砂質土に構築される。カマド・柱穴・周溝等は未検出である。出土遺物はない。

SI15（第14図　図版15－1）

調査区西部に位置する。住居南部はSI13と重複し、それより古い。規模形状は不明だが、南北長1.00m以上×東西長2.20mの方形と考えられる。主軸方向は不明である。壁は最も高いところで10cmを測り、ほぼ直立する。床面は黄色砂質土に構築される。カマド・柱穴・周溝等は未検出である。遺物は土師器が出土した。

SI16（第9図　図版15－2）

調査区西部に位置する。住居西部はSI06と重複しそれより古い。規模形状は不明だが、南北長2.52m×東西長0.80mの方形と考えられる。主軸方向はほぼ真北である。壁は最も高いところで22cmを測り、ほぼ直立する。床面は黄色砂質土に構築される。柱穴・周溝等は未検出である。カマドはSI06に削平され、火床のみ残存する。遺物は土師器が出土した。

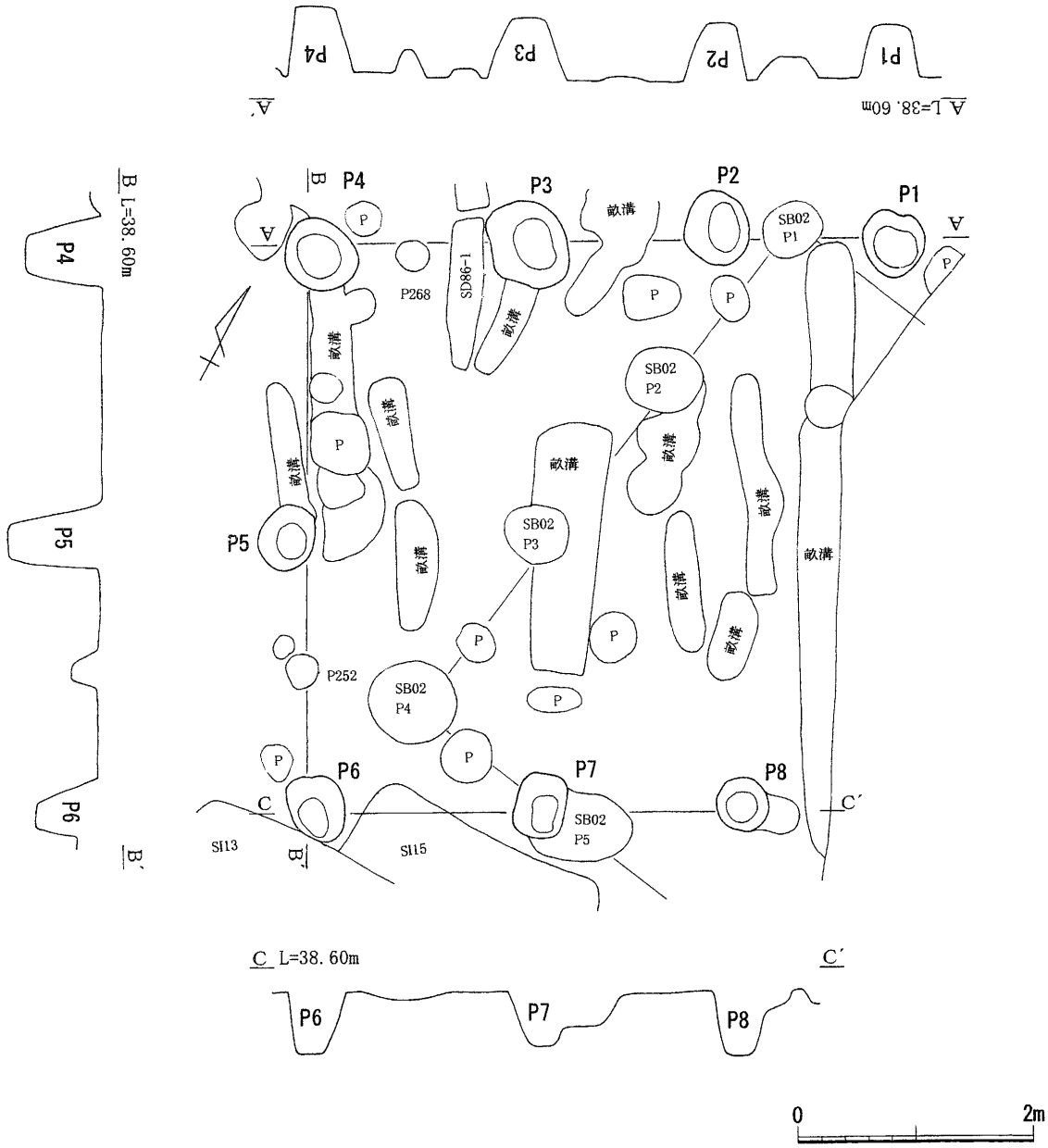
SI17（第10図　図版10－2）

調査区中央部に位置する。住居南部はSI07と重複し、それより古い。住居の大部分が調査区外とSI07に削平され、西壁と床面の一部が確認されるだけだが、南北長1.50m以上×東西長1.00m以上で、壁が直線となることから方形と考えられる。主軸方向は不明である。壁は最も高いところで6cmを測り、ほぼ直立する。床面は黄色砂質土に構築される。カマド・柱穴・周溝等は未検出である。遺物は土師器が出土した。

（2）掘立柱建物

調査区の西部より古代の掘立柱建物を3棟検出した。

SB01（第15図　図版3－1）

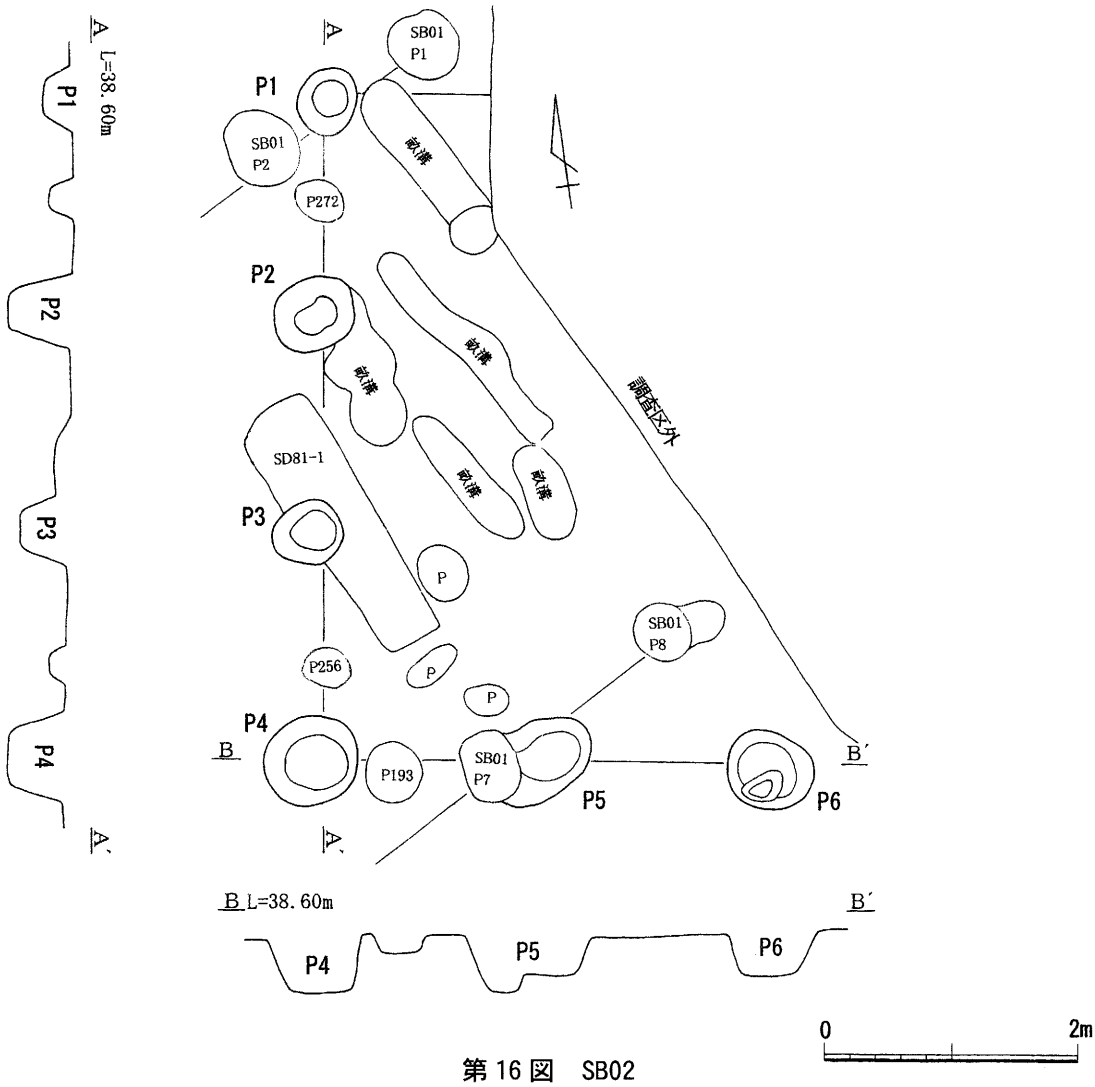


第15図　SB01

調査区西部に位置する。建物東部は調査区外に延び、SB02より新しく、畑跡より古い。平面形状は一部が調査区外となるため不明だが、長軸長5.20m以上×短軸長4.85mの長方形を呈す桁行き3間以上×梁行き2間の建物で、主軸方向はN-60°-Eである。柱間距離は桁行きで1.60～1.95m、梁行きが2.30～2.50mを測る。柱穴は円形を基調とする。遺物は土師器・須恵器の細片が出土した。

SB02（第16図　図版3－1）

調査区西部に位置する。建物東部は調査区外に延び、畑跡とSB01より古い。平面形状は一部が調査区外となるため不明だが、南北長5.25m×東西長3.50mの長方形を呈すと思われ、桁行き3間以上×梁行き2間以上の建物となる。主軸方向はN-10°-Eである。柱間距離は桁行1.70～1.90m、梁行1.70～1.80mを測る。柱穴は円形を基調とする。遺物の出土はない。



第16図　SB02

SB03（第17図　図版3－1）

調査区西部に位置する。建物の西～北部は調査区外に延びている。畑跡に切られている。平面形状は一部が調査区外となるため不明だが、南北長3.90m×東西長3.80m以上の方形基調を呈すと思われ、桁行き2間以上×梁行き2間以上の建物で、主軸方向がN-23°-Wを測る。柱間距離は桁行きで2.00～2.20m、梁行きが2.70～2.95mを測る。柱穴は方形と楕円形が存在する。遺物の出土は無い。

（3）穴

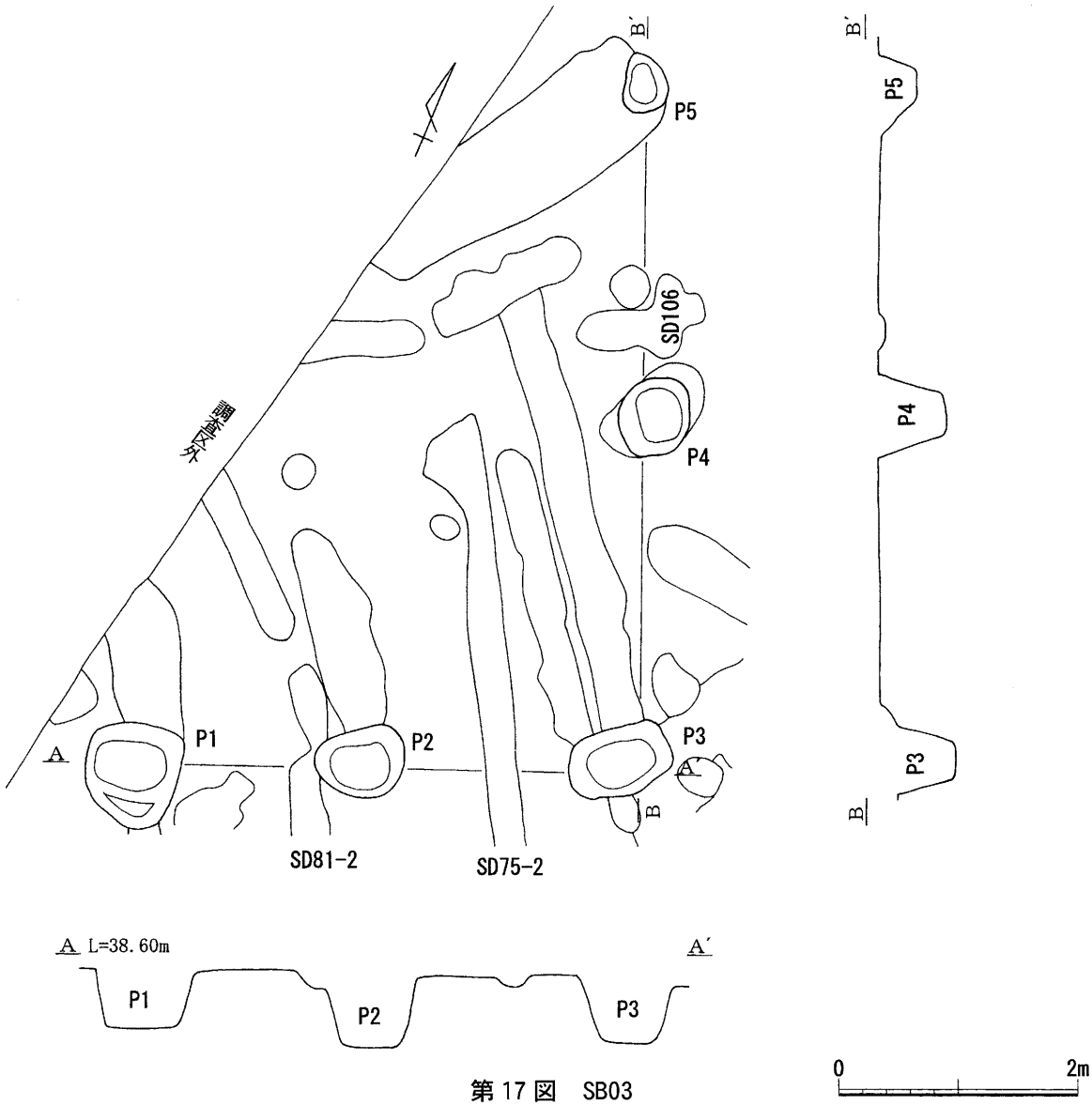
穴は、当初20数基存在すると思われたが、整理段階において掘立柱建物の柱穴と判明したため欠番が生じ、12基となっている。構築時期は古代と中世である。

SK03（第18図　図版17－1）

調査区東部のH6区に位置する。遺構南半は調査区外である。長軸長50cm以上×短軸長41cmの長楕円形を呈する。深さは32cmで断面形状は鍋底状となる。壁と底面は黄色砂質土層である。遺物は須恵器が出土した。構築時期は古代である。

SK05（第18図　図版17－2）

調査区東部のH6区に位置する。遺構の北東部～南東部は調査区外である。南北長250cm以上×東西長230cm以上の不整形を呈し、深さは45cmを測る。底面は凹凸が著しい。形状及び土層



第 17 図　SB03

の堆積状況から複数の土坑の重複と思われるが、詳細は不明である。壁と底面は黄色砂質土層である。遺物の出土はない。構築時期は不明である。

SK07（第 18 図　図版 17 － 3 ・ 4）

調査区東部の G6 区に位置する。長軸長 168cm 以上×短軸長 130cm の不整長方形を呈している。断面形状は深さ 15cm の鍋底状となる。壁と底面は黄色砂質土層である。遺物は珠洲焼と自然礫が出土した。構築時期は、覆土上層より出土した炭化材の放射性炭素年代測定より、13 世紀後半～14 世紀後半と考えられる。

SK08（第 19 図　図版 17 － 5）

調査区東部の G7 区に位置する。長軸長 90cm 以上×短軸長 83cm のほぼ円形を呈する。断面形状は深さ 10cm の鍋底状となる。樺と底面は黄色砂質層である。遺物は出土しなかった。構築時期は、覆土が中世の構築である SK07 の覆土に類似することより、中世と考えられる。

SK09（第 19 図　図版 17 － 6 ・ 7）

調査区東部の G7 区に位置する。遺構南西部は調査区外となる。長軸長 139cm ×短軸長 127cm の長方形を呈し、北東部に幅 56cm ×長さ 30cm の長方形の突出部を有している。断面形状は深さ 30cm の鍋底状で、底面は平坦である。壁と底面は礫層である。遺物は珠洲焼と砥石が出土した。構築時期は中世である。

SK11（第19図　図版17－8）

調査区東部のF6区に位置する。遺構南部は調査区外となる。遺構の北西部がピットと重複するが新旧関係は不明である。長軸長170cm以上×短軸長190cmの長方形を呈し、北西部に幅100cm×長さ55cmの三角形のテラス状の張り出しを有している。深さは56cmで、断面形状は鍋底状となり、テラス部分の深さは34cmである。壁は礫層となり、底面は黄色砂質層である。遺物は出土しなかった。構築時期は、基本土層Ⅳ層から掘り込まれていることから、中世と考えられる。

SK12（第19図　図版18－1）

調査区東部のH6区に位置する。遺構西部は調査区外となる。南北長73cm×東西長55cm以上の長楕円形を呈する。断面形状は深さ25cmの鍋底状となる。壁と底面は黄色砂質土層である。遺物は出土しなかった。構築時期は不明である。

SK13（第20図　図版18－2）

調査区東部のG6区に位置する。長軸長100cm×短軸長108cmの不整の長方形を呈する。底面は二段となり中央部から南部が深さ47cm、北端は深さ59cmを測り、長軸長90cm×短軸長80cmの方形を呈す落ち込みとなっている。壁は礫層で、底面は黄色砂質土層である。遺物は出土しなかった。構築時期は不明である。

SK14（第20図　図版18－3）

調査区東部のG7区に位置する。長軸長141cm×短軸長118cmの台形を呈している。断面形状は深さ35cmの鍋底状となる。壁と底面は礫層である。遺物は出土しなかった。構築時期は不明である。

SK15（第20図　図版18－4）

調査区西部のB3区に位置する。畑跡より新しい。南北長183cm×東西長200cm以上の不整円形を呈している。断面形状は深さ27cmの鍋底状となり、西半部の壁際はテラスを有している。壁と底面は黄色砂質土層である。遺物は少量の須恵器が出土した。構築時期は畑跡より新しく、中世以降と考えられる。

SK16（第20図　図版18－5）

調査区中央部のE5区に位置する。長軸長76cm×短軸長60cmの楕円形を呈している。深さは57cmを測り、底面は二段となっている。壁と底面は黄色砂質土層である。遺物は出土しなかった。構築時期は不明である。

SK18（第20図　図版18－6）

調査区東部のG6区に位置する。長軸長120cm×短軸長90cmの不整方形を呈している。深さは60cmで、断面形状は鍋底状となる。壁と底面は礫層である。遺物は出土しなかった。構築時期は不明である。

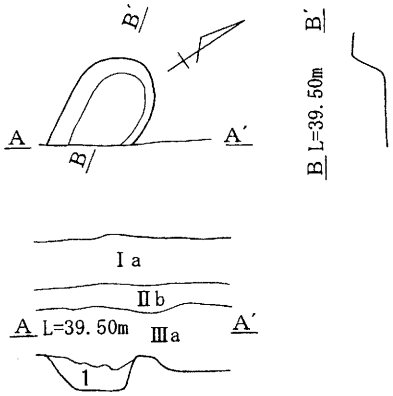
（4）溝

ここでは、畑跡を除く一般的な溝として認識される事例について取り扱い、畑跡は別項に記述する。溝は6条検出し、いずれも畑跡より新しい。SD04から珠洲焼が出土していることから中世以降の所産と考えられる。

SD01（第21図　図版18－7・8）

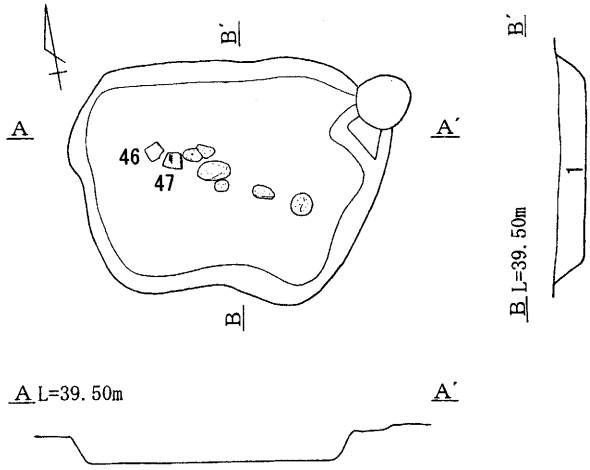
調査区東部のやや中央よりのF6・7区に位置する。SI02・03より新しい。ほぼ南北方向を直線的に走向し、南北両端は調査区外となる。調査部分における断面形状は幅80cm×深さ35cmの逆台形を呈し、底面は平坦である。壁は黄色砂質土層、底面は黄色砂質土層であるが一部礫層が露出

SK03



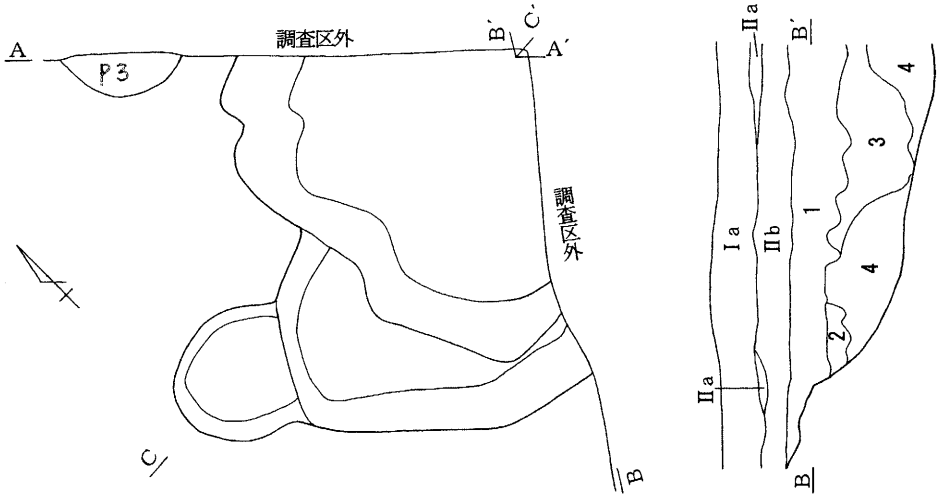
SK03土層説明
基本層序Ⅰa層
基本層序Ⅱb層
基本層序Ⅲa層
1層　灰褐色砂質土　黄色砂粒を含む。粘性不良、しまり良好。

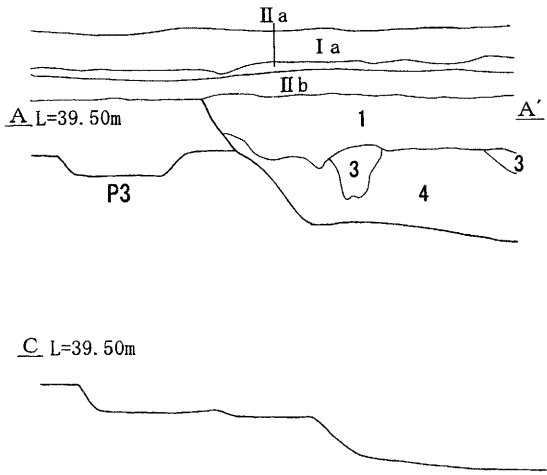
SK07



SK07土層説明
1層　黒褐色砂質土　黄色砂粒を含む。粘性不良、しまり良好。

SK05

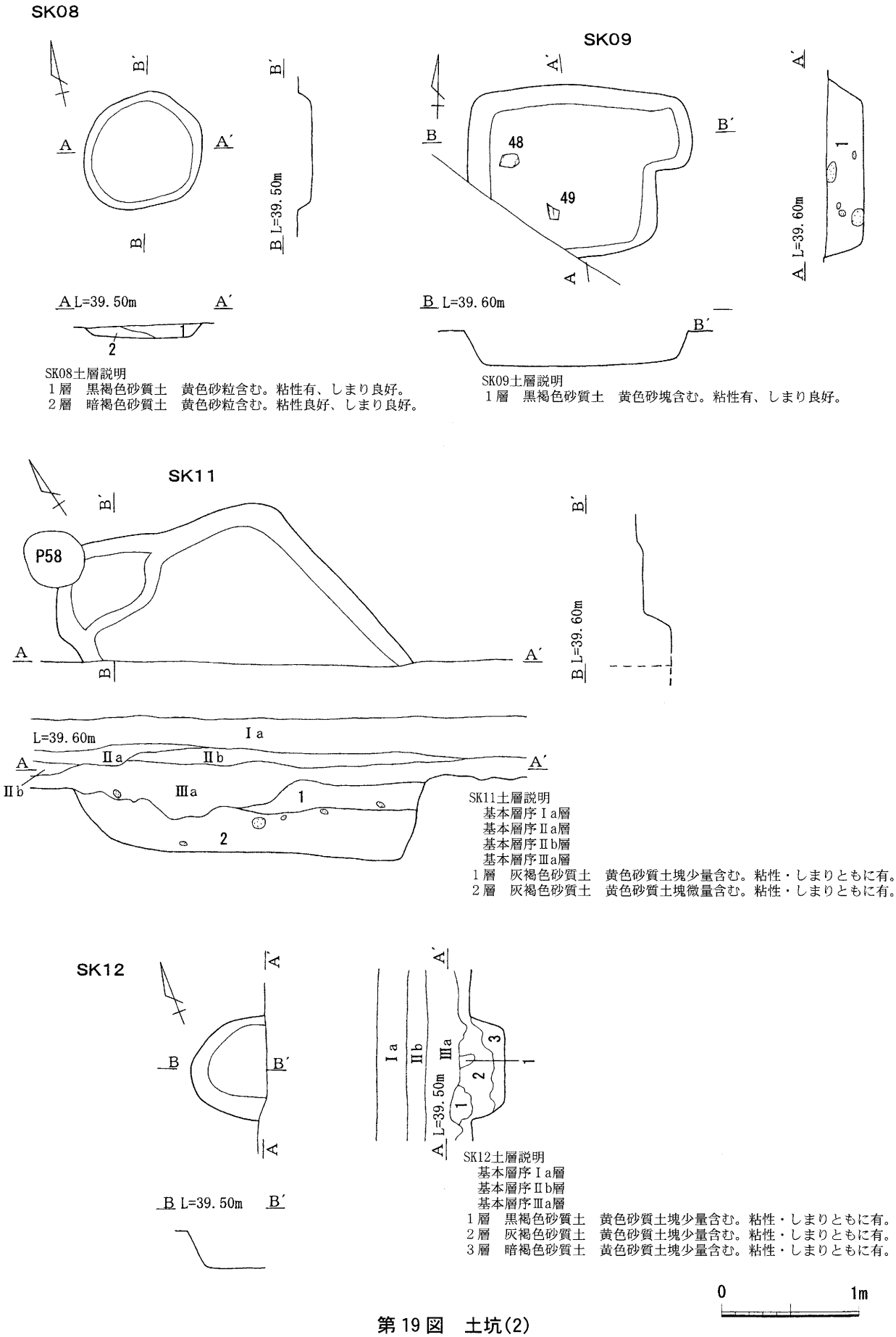




SK05土層説明
基本層序Ⅰa層
基本層序Ⅱa層
基本層序Ⅱb層
1層　灰褐色砂質土　黄色砂質土塊微量に含む。粘性、締まりともに有。
2層　灰黒色土　灰褐色土粒を含む。粘性、しまりともに有。
3層　灰褐色砂質土　黄色砂質塊含む。粘性有、しまり良好。
4層　灰褐色砂質土　黄色砂質粒含む。粘性有、しまり良好。

0　1m

第18図　土坑(1)



SK08土層説明
1層　黒褐色砂質土　黄色砂粒含む。粘性有、しまり良好。
2層　暗褐色砂質土　黄色砂粒含む。粘性良好、しまり良好。

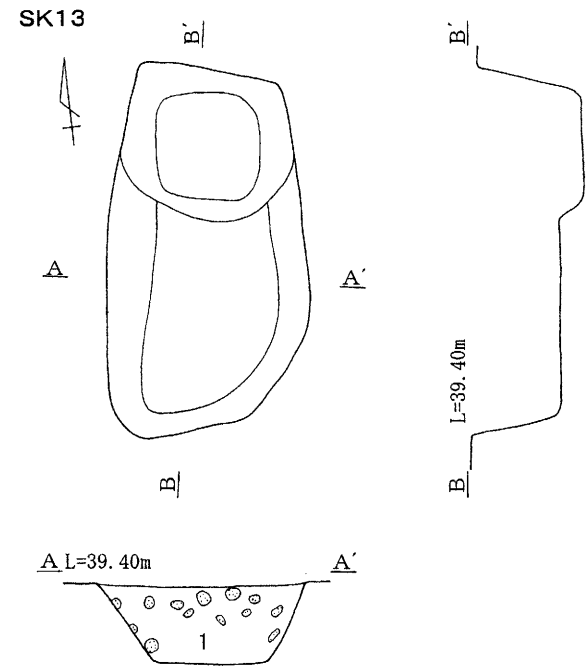
SK09土層説明
1層　黒褐色砂質土　黄色砂塊含む。粘性有、しまり良好。

SK11土層説明
基本層序Ⅰa層
基本層序Ⅱa層
基本層序Ⅱb層
基本層序Ⅲa層
1層　灰褐色砂質土　黄色砂質土塊少量含む。粘性・しまりともに有。
2層　灰褐色砂質土　黄色砂質土塊微量含む。粘性・しまりともに有。

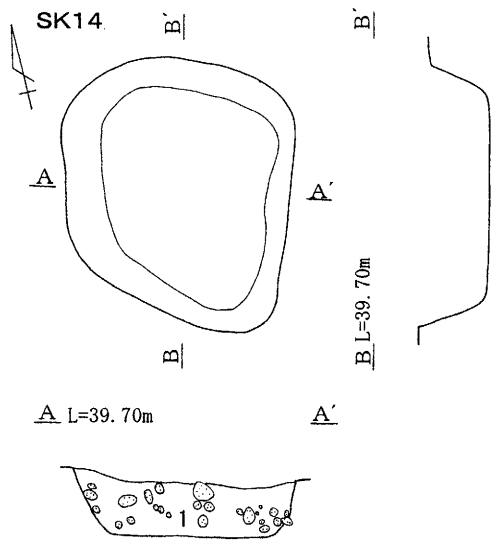
SK12土層説明
基本層序Ⅰa層
基本層序Ⅱb層
基本層序Ⅲa層
1層　黒褐色砂質土　黄色砂質土塊少量含む。粘性・しまりともに有。
2層　灰褐色砂質土　黄色砂質土塊少量含む。粘性・しまりともに有。
3層　暗褐色砂質土　黄色砂質土塊少量含む。粘性・しまりともに有。

0　1m

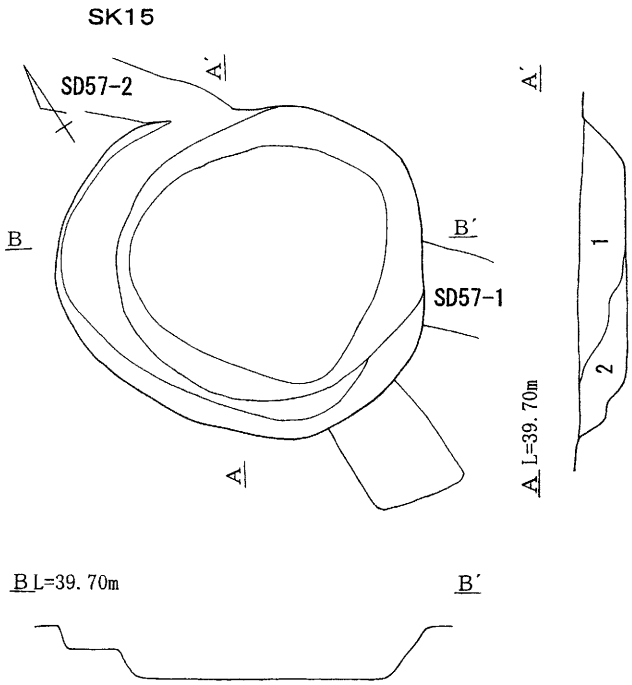
第19図　土坑(2)



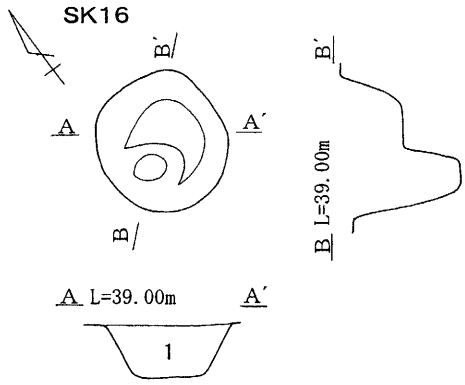
SK13土層説明
1層　黒褐色砂質土　礫多量、黄色砂粒含む。粘性有、しまり良好。



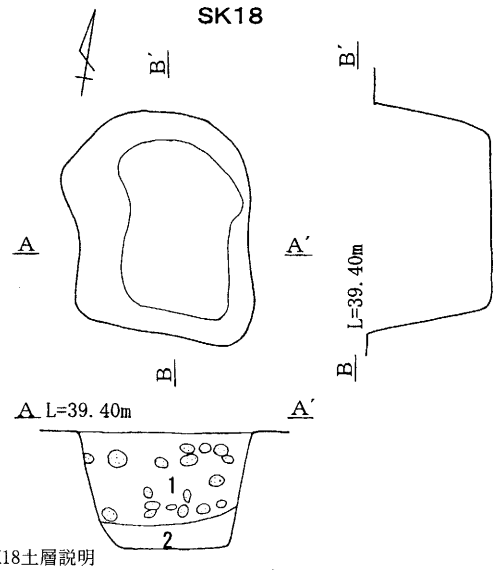
SK14土層説明
1層　灰褐色砂質土　礫多量含む。粘性有、しまり良好。



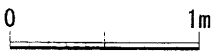
SK15土層説明
1層　黒灰褐色粘質土　灰色粘土塊、砂粒含む。粘性有、しまり良好。
2層　灰褐色砂質土　黄色砂塊含む。粘性有、しまり良好。



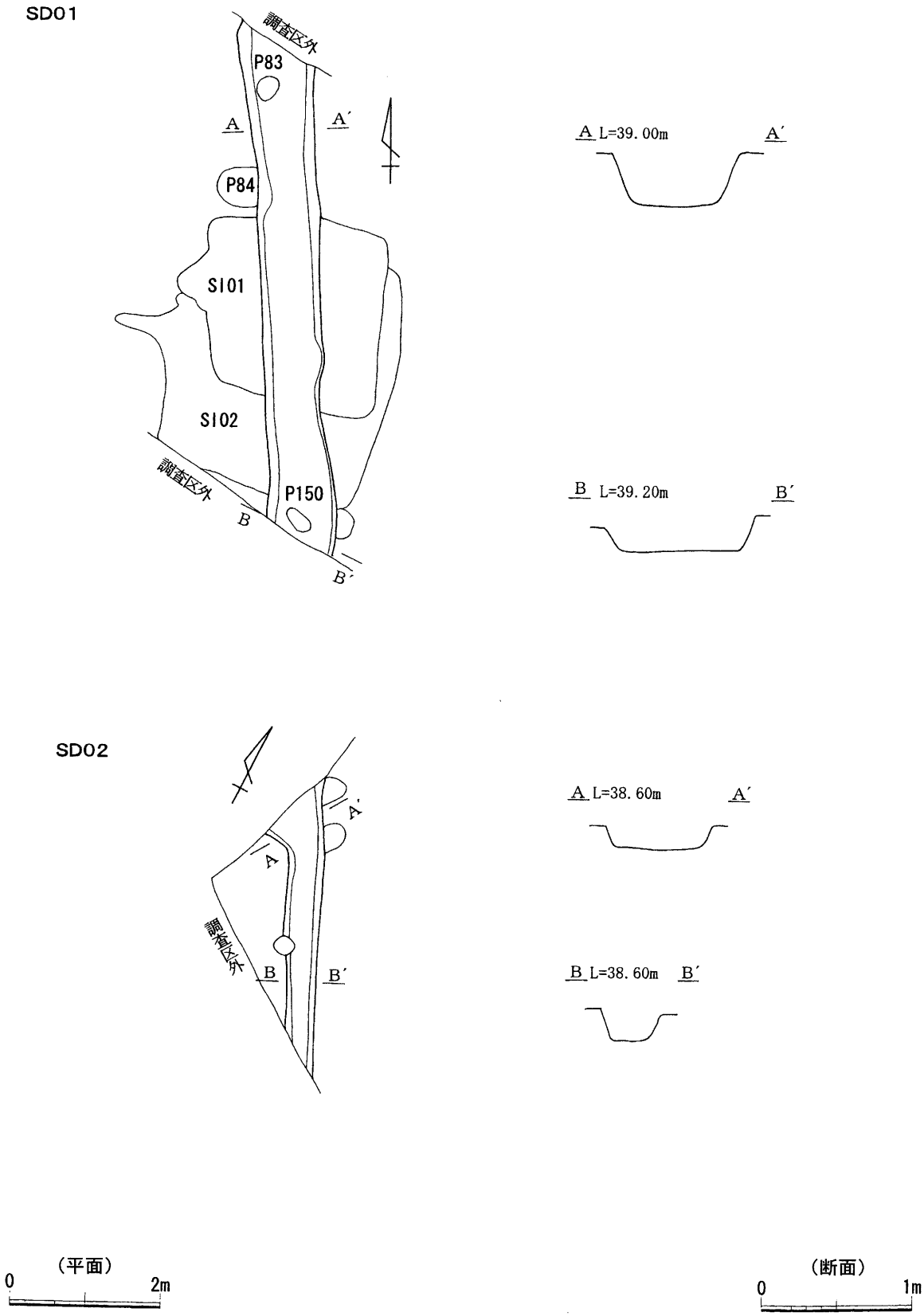
SK16土層説明
1層　灰褐色砂質土　砂塊含む。粘性有、しまり良好。



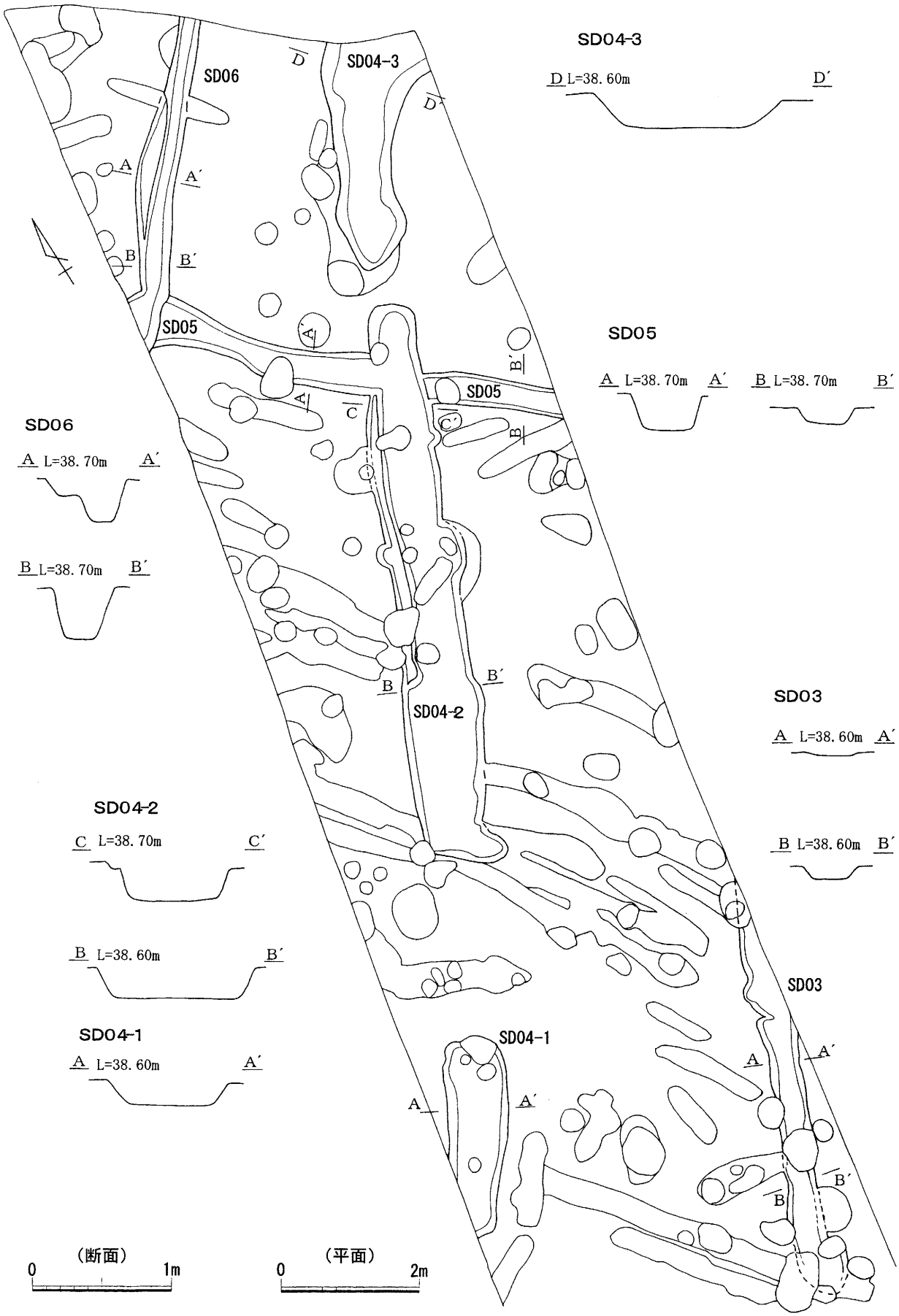
SK18土層説明
1層　黒褐色粘質土　礫多量砂塊含む。粘性有、しまり良好。
2層　灰褐色粘質土　黄色砂塊含む。粘性有、しまり良好。



第20図　土坑(3)


SD01
調査区外
P83
A
A′
P84
SI01
SI02
調査区外
P150
B
B′
A L=39.00m
A′
B L=39.20m
B′
SD02
A′
A
調査区外
B
B′
A L=38.60m
A′
B L=38.60m
B′
(平面)
0
2m
(断面)
0
1m

第21図　溝(1)


SD04-3
D L=38.60m D′
SD06
SD04-3
SD05
SD05
A L=38.70m A′
B L=38.70m B′
SD06
A L=38.70m A′
B L=38.70m B′
SD04-2
SD03
A L=38.60m A′
B L=38.60m B′
SD04-2
C L=38.70m C′
B L=38.60m B′
SD03
SD04-1
A L=38.60m A′
SD04-1
(断面)
0 1m
(平面)
0 2m

第22図　溝(2)

している。遺物は出土しなかった。構築時期は中世の遺物包含層である基本土層Ⅲ層を掘り込んで構築されていることから、中世以降と考えられる。

SD02（第21図）

調査区西部のA3区に位置する。古代のピットより新しい。北北西から南南東を直線的に走向し、南北両端は調査区外となる。調査された部分での断面形状は幅37～77cm×深さ15cmの逆台形を呈し、底面は平坦である。壁と底面は黄色砂質土層である。遺物は出土しなかった。構築時期は中世以降と思われる。

SD03（第22図）

調査区北西部のA～B1区に位置する。古代の畑跡・ピットより新しい。北北東から南南西を直線的に走向し、南端は調査区外である。SD04と3.80m離れて並行する。調査された部分での断面形状は幅37～50cm×深さ5～10cmの逆台形を呈している。壁と底面は黄色砂質土層である。遺物は出土しなかった。構築時期は古代の畑跡・ピットより新しく中世以降と思われる。

SD04（第22図）

調査区北西部のA～B1～3区に位置する。古代の畑跡・ピットより新しい。北北東から南南西を直線的に断続しながら走向し、南北両端は調査区外である。SD03と3.80m離れて並行する。調査された部分での断面形状は幅80～150cm×深さ18～28cmの逆台形を呈する。壁と底面は黄色砂質土層である。遺物は珠洲焼が出土した。構築時期は珠洲焼の出土から中世と考えられる。

SD05（第22図）

調査区北西部のA～B1～2区に位置する。古代のピットより新しく、SD04・06と重複するが新旧関係は不明である。北西から南東を直線的に走向し、東西両端は調査区外である。調査された部分での断面形状は幅39～80cm×深さ10～22cmの逆台形を呈する。壁と底面は黄色砂質土層である。遺物は出土しなかった。構築時期は中世以降と思われる。

SD06（第22図）

調査区北西部のA～B1区に位置する。古代の畑跡・ピットより新しく、SD05と重複するが新旧関係は不明である。北北東から南南西を直線的に走向し、南北両端は調査区外である。調査された部分での断面形状は幅30～50cm×深さ30～35cmの逆台形を呈する。壁と底面は黄色砂質土層である。遺物は出土しなかった。構築時期は中世以降と思われる。

（5）畑跡

畑跡は、調査区の全面に広がっており、重複関係は古代の竪穴住居・掘立柱建物よりも新しく、中世の土坑・溝よりも古い。遺構は幅15～50cm×深さ5～20cmの溝状を呈し、走向方位によりA～D群に分けることができる。A群は調査区の東半部に分布し、走向方位がN-8°-E～N-35°-Eとなる。B群は調査区の中央部C4区に分布し、走向方位がN-60°-E～N-75°-Eとなる。C群は調査区中央部やや西寄りのC4区に分布し、走向方位はN-60°-W前後となる。D群は調査区の西半部に分布し、走向方位はN-20°-W～N-30°-Wである。東から西へと畝溝同士には重複が認められ、複数回の耕作が行われたものと考えられる。構築時期は上限が重複関係より古代以降、下限が中世以前となり、遺物出土状況より須恵器・土師器は出土したが中世の遺物が無いことから平安時代後半に営まれたものと推測される。（平岡）

2．遺物

遺物は、古代を主体として少量の中世のものが出土しており、古代の須恵器・土師器・鉄器・砥石、中世の珠洲焼が出土した。

SI01(第23図　図版19)

1・2は須恵器無台坏である。1は体部が直線的に立ち上がり、口縁部でやや外反する。2は底部が右回転糸切りで、体～口縁部が内湾気味に立ち上がる。内底面には磨耗痕と墨痕らしき痕跡が認められ、転用硯の可能性がある。口縁部は一部欠損しており、墨を磨るのに都合がよさそうである。3はロクロ土師器甕である。口縁部は内側に丸めて肥厚させ、受口を形成する。4は鉄製紡錘車である。ほぼ完形で、欠損して不鮮明であるが心棒の上端が逆L字形に曲がっている。

SI02(第23図　図版19)

5は須恵器無台坏である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部でやや外反する。底部は右回転ヘラ切りである。

SI03(第23図　図版19)

6・7は須恵器蓋である。ともに口縁部端を直角に折り曲げており、7は天井部外面に右回転ヘラケズリ、天井部内面中央に手持ちのヘラナデを施している。

SI04(第23図　図版19)

8は須恵器無台坏である。体部は直線的に立ち上がり、底部は右回転ヘラ切りである。9～12は須恵器蓋である。9・10は扁平鈕で、口縁部端を直角に折り曲げている。内面天井部には磨耗痕と墨痕らしき痕跡が認められ、転用硯として利用された。11は口縁部端を直角に曲げている。内面天状部には磨耗痕と墨痕らしき痕跡が認められ、転用硯として利用されている。12は口縁部端を直角に曲げている。

SI05(第24図　図版19)

13は須恵器無台坏である。底部は回転ヘラ切りである。14・15はロクロ土師器長胴甕である。口縁部は外傾し、端部が面を成している。

SI06(第24図　図版19)

16は須恵器無台坏である。体～口縁部は直線的に立ち上がり、底部は右回転ヘラ切りである。17はロクロ土師器鍋である。口縁部端部を上方へ折り曲げている。18は不明鉄製品である。形状は2枚の鉄板を鉄棒が貫通していると思われるが、1枚の鉄板は未貫通の可能性もあり明らかでない。かなり変形している可能性が高く、用途や性格は不明である。

SI07(第24図　図版21)

19は須恵器有台坏である。内面接地の高台を有し、体～口縁部は直線的に立ち上がる。右回転ロクロ調整で、底部は回転ヘラ切り、内底面に定方向のヘラナデを施す。底部に煤が付着する。

SI08(第24図　図版21)

20は須恵器無台坏である。体～口縁部は直線的に立ち上がり、底部は右回転ヘラ切りである。口縁部内外面に煤が付着しており、灯明皿に転用している。21・22は須恵器蓋である。21は口縁部端を直角に折り曲げている。22は天井部外面が回転ヘラケズリ、内面に不定方向のナデを施す。23はロクロ土師器小型甕である。口縁部端部を上方へ折り曲げ、受口状とする。

SI09(第24図　図版22)

24はロクロ土師器甕である。口縁部は外傾し、端部が面を成している。

SI10(第24図　図版22)

25はロクロ土師器鍋である。口縁部はやや外反し、端部は面状となる。

SI11(第25図　図版22)

26・27はロクロ土師器無台坏である。ともに外面端部下端から底部は右回転ヘラケズリを施す。

26の内面は平滑に磨耗している。28は須恵器無台坏である。体～口縁部は直線的で、体部下端で急にすぼまり底部に至る。切り離しは右回転糸切りである。29は須恵器有台坏である。高台は外面接地で、体部は高台部より直線的に立ち上がり、口縁部が僅かに外反する。切り離しは右回転ヘラ切りである。30・31はロクロ土師器小型甕である。ともに丸みが強い胴部を呈する。30の底部切り離しは右回転糸切り、31の底部は手持ちヘラケズリを施す。32～34はロクロ土師器長胴甕である。32は口縁部の端部が外反しながら屈折し受口状となる。33は口縁部が外傾し、端部が面となる。34は口縁部端部が僅かに内屈する。35はロクロ土師器鍋である。口縁部端部が内方へと折り返し、丸め込んでいる。36は須恵器大甕である。胴部は外面が叩き後カキ目、内面が同心円当て具痕後カキ目を施す。

SI12(第26図　図版22)

37・38は須恵器無台坏である。ともに底部切り離しは回転ヘラ切りである。37の内底面には焼成前の線刻が見られ、窯記号か。39はロクロ土師器小型甕である。口縁部は内湾気味に立ち上がる。40は土師器長胴甕である。外面はケズリ、内面はハケ目を施す。41は須恵器横瓶である。外面は叩き後カキ目、内面は同心円当て具痕が残る。

SI13(第26図　図版22)

42・43は須恵器無台坏である。42は右回転ヘラ切りで、口縁部内面に煤が付着する。43は底部が右回転ヘラ切り後、指ナデが施され、口縁部内外面に煤が付着し、灯明皿に転用している。44は須恵器蓋である。外面天井部には焼成前の線刻による螺旋文と放射状文がみられる。内面には墨痕と摩滅痕が存在し、硯に転用している。

SK03(第27図　図版23)

45は須恵器有台坏である。底部よりやや内側に付く高台は内面接地で、底部はやや丸みを持ち、体部から口縁部は直線的に立ち上がる。切り離しは右回転ヘラ切りである。内底面及び高台接地面は摩滅が著しい。

SK07(第27図　図版23)

46・47は珠洲焼Ⅳ期(吉岡康暢1999)の片口鉢である。口縁部端部の面を水平に取っている。卸し目は46が1.1cmで6目、47が1.7cmで10目となる。

SK09(第27図　図版23)

48は珠洲焼片口鉢である。底部をハケ目調整している。卸し目は2cmで11目である。49は4面の研面をもつ凝灰岩製の仕上砥である。

SK15(第27図　図版23)

50は須恵器蓋である。扁平鈕で、内面に摩滅痕が認められ、転用硯とみられる。

SD04(第27図　図版23)

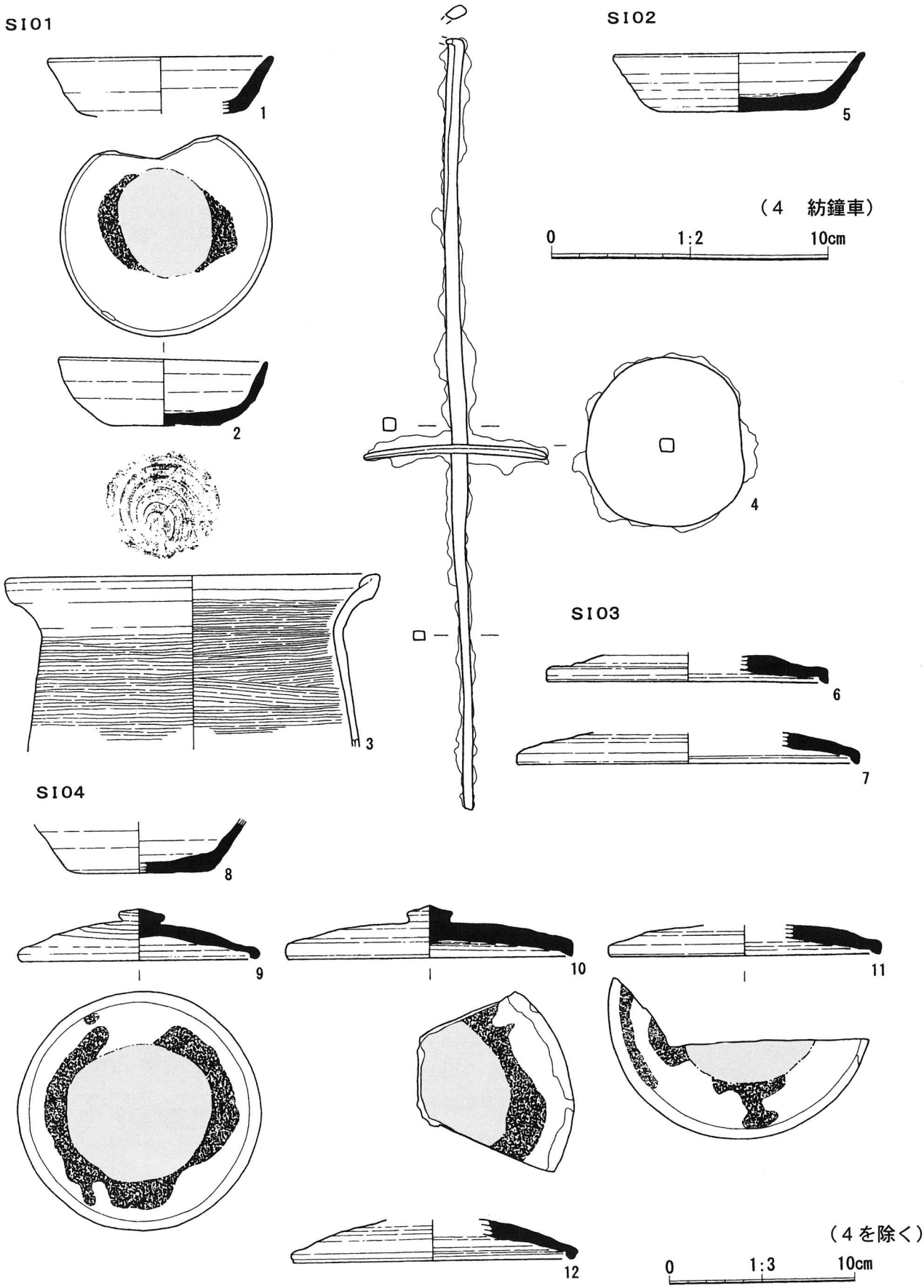
51は珠洲焼Ⅳ期の片口鉢である。口縁端部は水平に面を取る。

畑跡(第27図　図版23)

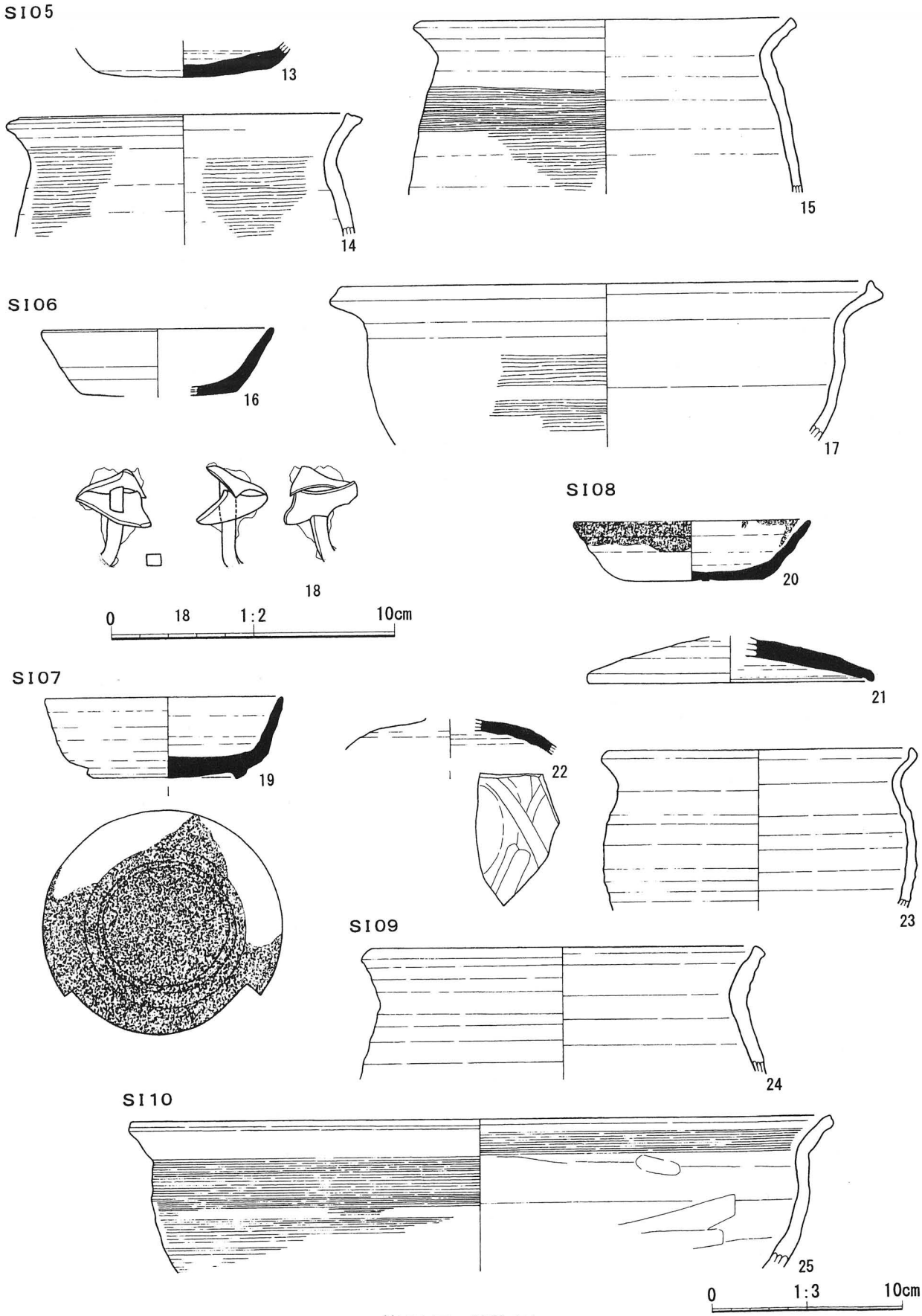
52は須恵器無台坏である。底部切り離しは右回転ヘラ切りである。53は須恵器有台坏である。底部中央寄りに付く高台は内端接地し、体～口縁部は直線的に立ち上がる。底部は切り離しが回転ヘラ切りで、中央には焼成前に刻まれた「十」の線刻を有している。

P53(第28図　図版23)

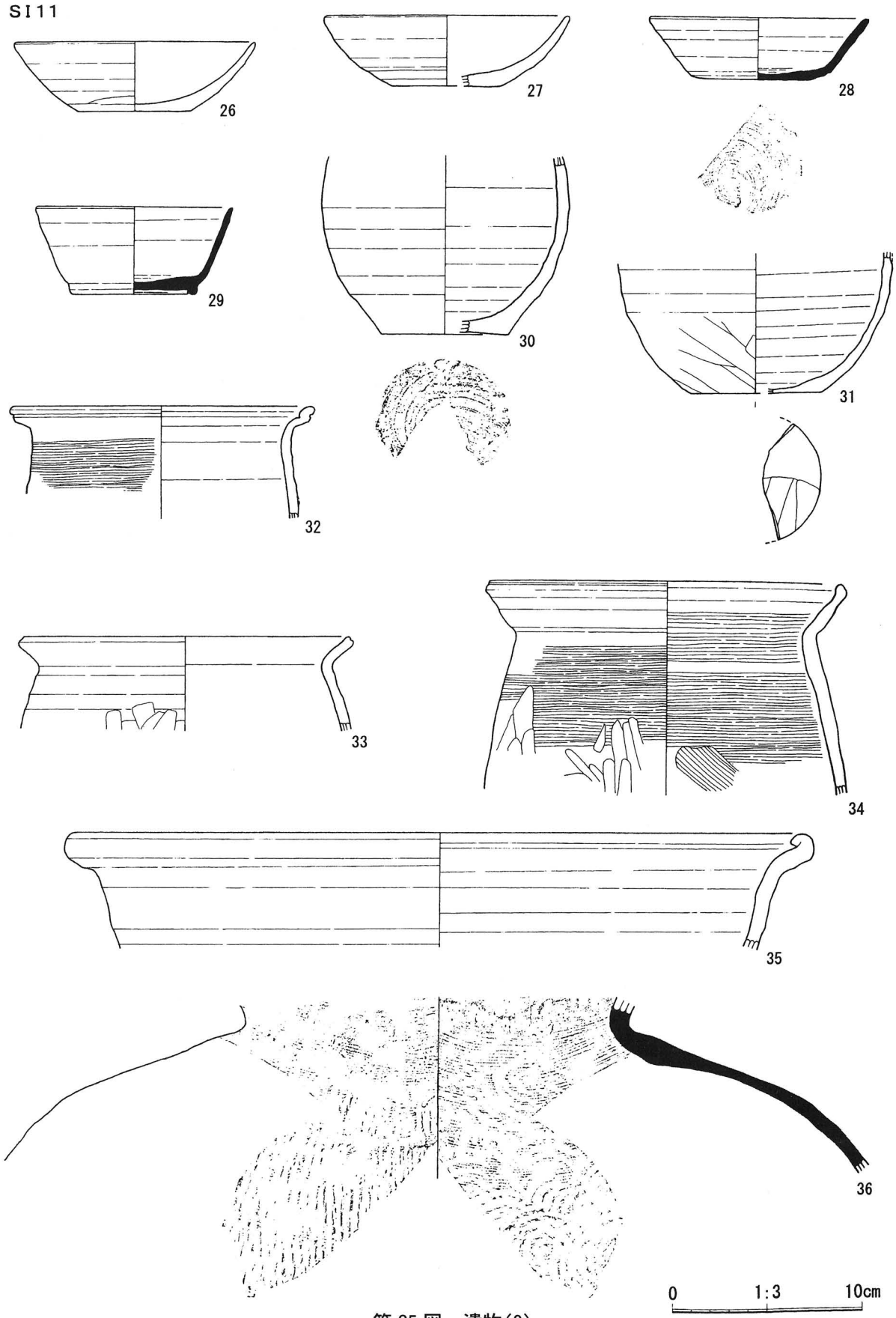
54は須恵器蓋である。口縁部端部は直角に折り曲げられており、天井部内面は摩滅し、転用硯の可能性がある。


SI01
SI02
SI03
SI04
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
（4　紡錘車）
0
1:2
10cm
（4を除く）
0
1:3
10cm

第23図　遺物(1)

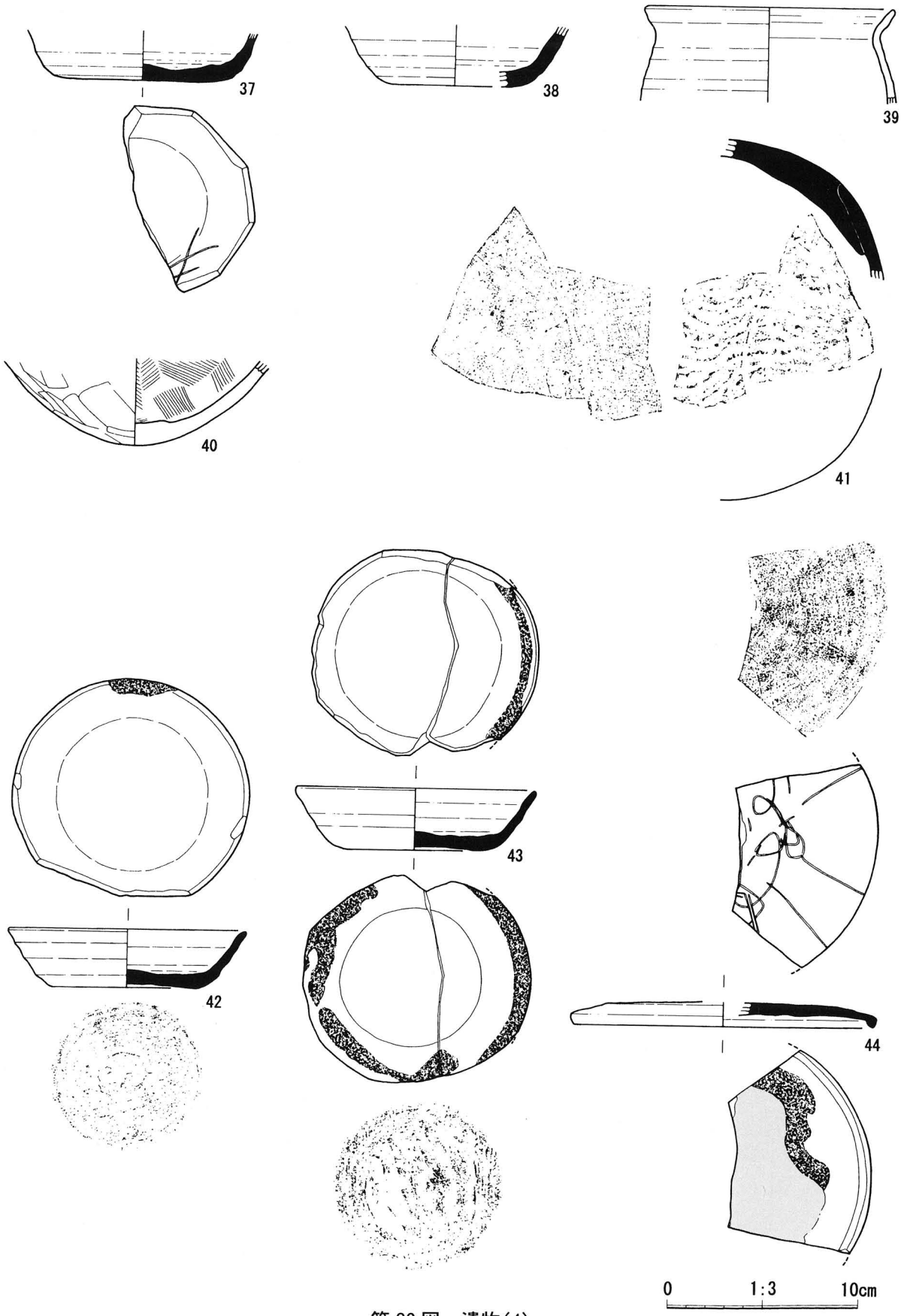

SI05
13
14
15
SI06
16
17
18
0
18
1:2
10cm
SI08
20
21
SI07
19
22
23
SI09
24
SI10
25
0
1:3
10cm

第24図　遺物(2)

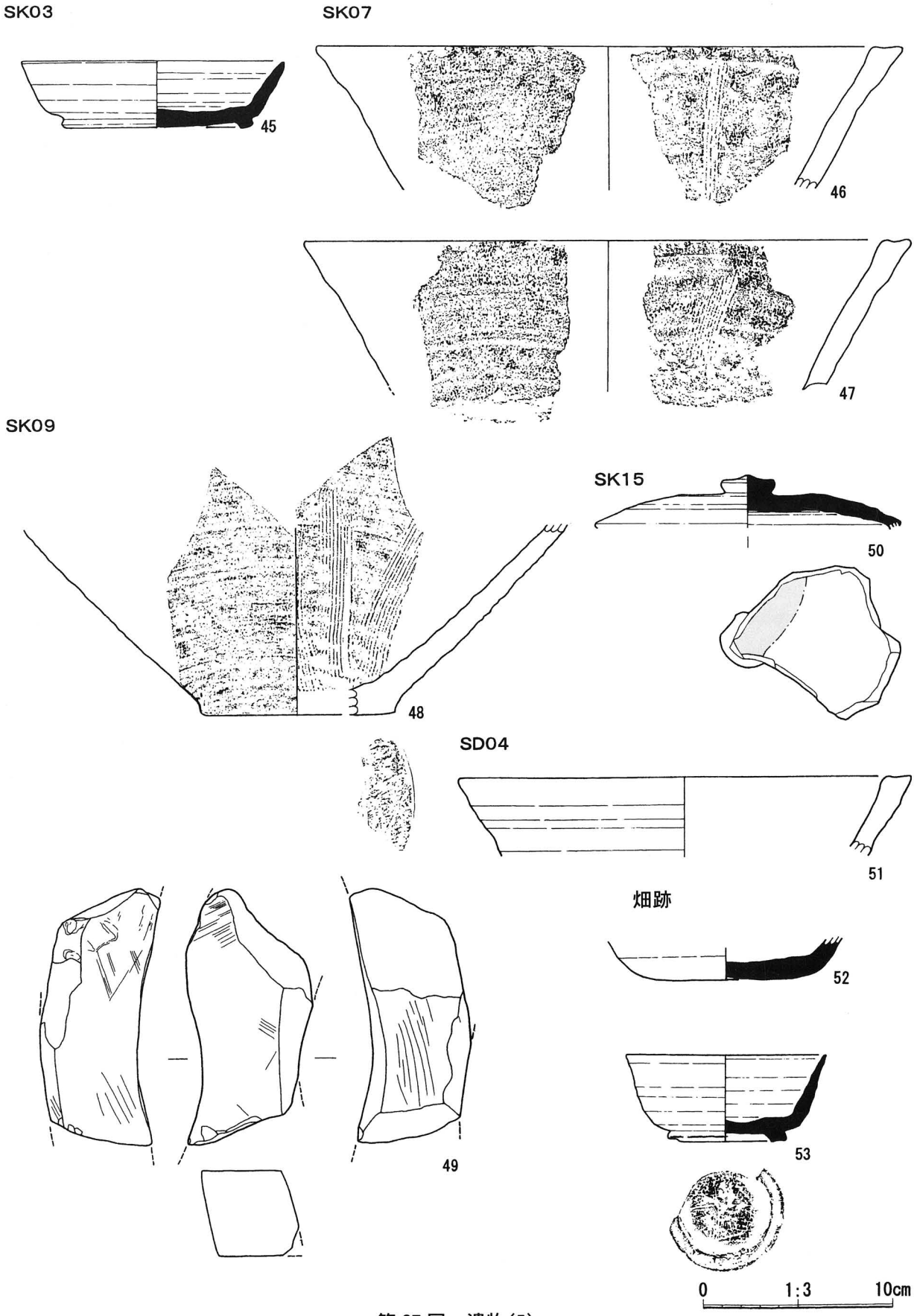


第25図　遺物(3)

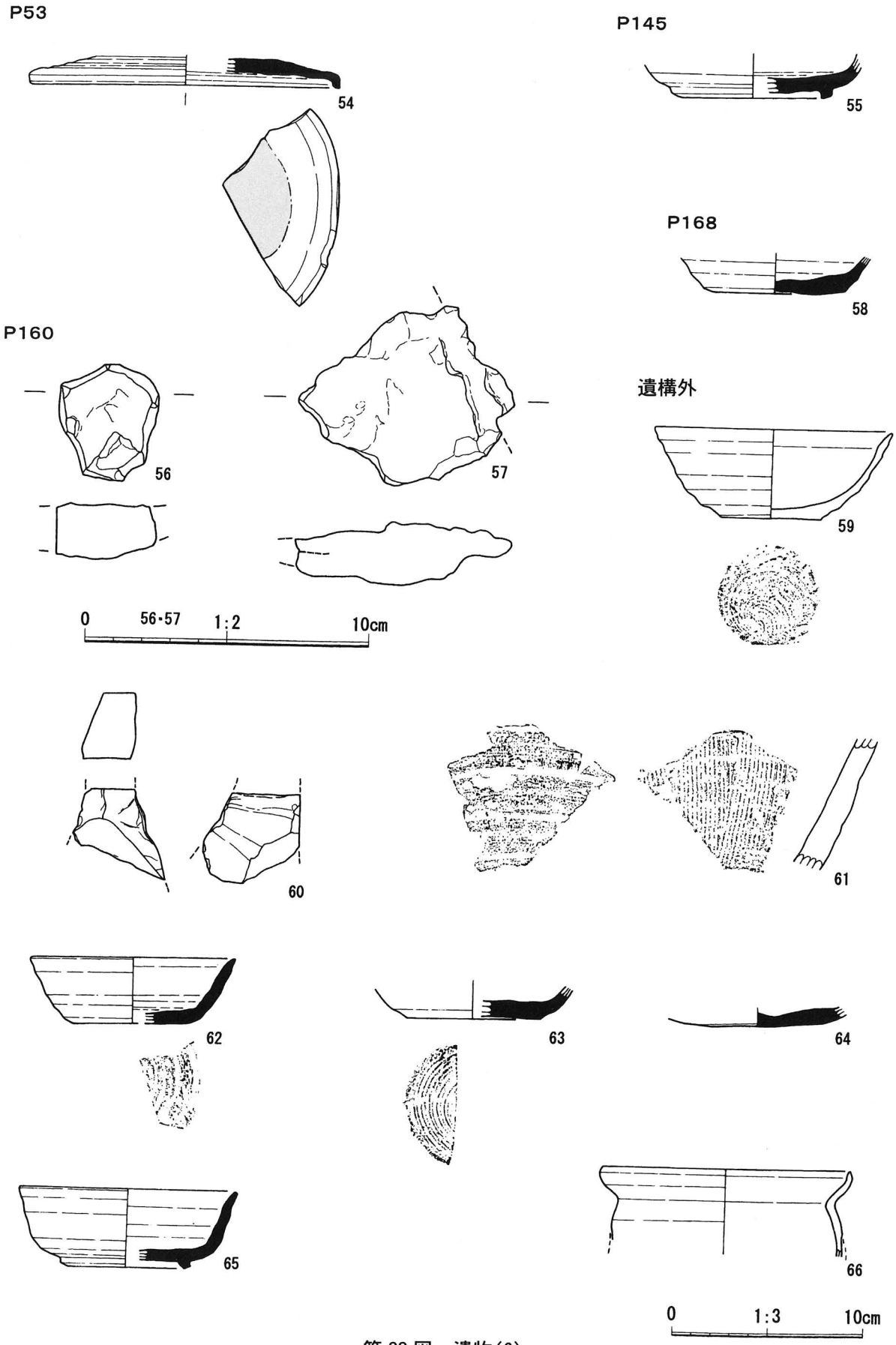
SI11



第26図　遺物(4)



第27図　遺物(5)


P53
54
P145
55
P168
58
P160
56
57
遺構外
59
0
56・57
1:2
10cm
60
61
62
63
64
65
66
0
1:3
10cm

第28図　遺物(6)

P145(第 28 図　図版 23)

55 は須恵器有台坏である。底部は丸みを持ち、体部との境よりかなり内側の高台が付く、高台は内端接地である。底部切り離しは回転ヘラ切り、内底面には不定方向のナデを施す。

P160(第 28 図　図版 23)

56・57 は鍛冶滓である。ともに碗形滓の破片で、端部は割られている。

P168(第 28 図　図版 23)

58 は須恵器無台坏である。底部きり離しは右回転ヘラ切りである。

遺構外出土遺物(第 28 図　図版 23)

59 はロクロ土師器椀である。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。底部は右回転糸切りである。60 は 4 面の研面をもつ凝灰岩製の仕上砥である。61 は珠洲片口鉢である。卸し目が密に施されている。62 ～ 64 は須恵器無台坏である。62 は体部がやや内湾気味となり、口縁部で僅かに外反し、底部は回転糸切りである。63 は底部切り離しが回転糸切りである。64 は底部切り離しが回転ヘラ切りである。65 は須恵器有台坏である。内面接地する高台は体部との境よりかなり内側に付き、口縁部は僅かに外反する。底部きり離しは回転ヘラ切りで、口縁～体部外面に墨痕が付着する。66 はロクロ土師器小型甕である。口縁部は受口状となる。　(折原)

V 理化学的分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

上新保遺跡は、常願寺川扇状地西側の扇央～扇端部付近に立地している。上新保遺跡における過去の調査では、古代および中世の集落、古代の畑跡をはじめとして、中世以前の自然流路等が確認された（富山市教委 2000）。前回の発掘調査区の東方に隣接する今回の発掘調査区では、古代～中世の竪穴住居跡や土坑、溝状遺構等が検出された。

本報告は、発掘調査で検出された遺構の年代、イネ科草本類に由来する栽培植物やカマドの燃料材の検討を目的として自然科学分析調査を実施したものである。

2 試料

試料は、土坑より出土した炭化材（KSB-SK07No.1）、畝と推定される溝状遺構埋土から採取された土壌（SD33-1 埋土）、竪穴住居跡のカマド灰層より採取された土壌（SI-12 カマドB 灰層中）である。以下に各試料の概要を示す。

（1）炭化材

炭化材（KSB-SK07No.1）は、SK07 埋土上層から出土した。残存部径約 3cm 程の破片であり、樹芯部分が欠落したほぼ反裁木に近い形状を呈し、表面には樹皮の付着が認められる。調査所見では、共伴遺物が出土しておらず、遺構の時期は不明であるが、埋土は平安時代の竪穴住居跡埋土に類似するとされている。

（2）土壌試料

① SD33-1

SD33-1 は、調査所見から平安時代以降の畝溝と推定されている。試料は、溝埋土内より採取された淡暗褐色の泥混じり砂質土であり、炭化物等の混入物は認められない。

② SI-12

SI-12 は平安時代の竪穴住居跡であり、住居跡北壁東側よりカマド（カマド B）が検出されている。試料は、カマドの灰層より採取された最大 1 ～ 2cm 角程度の炭化材が多量混じる暗褐色砂質土である。

上記の 3 試料のうち、SK07 の炭化材を対象に放射性炭素年代測定、SD33-1 と SI-12 の土壌試料を対象に植物珪酸体分析を行った。なお、炭化材については、試料の由来等に関わる情報を得るため炭化材同定も合わせて行った。

3 分析方法

（1）放射性炭素年代測定

炭化材の観察を行った後、観察範囲内の最外年輪部分を分析試料として抽出した。その際に、表面に土壌等の不純物が付着していたため、メスやピンセットを用いて除去した。その後、HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去を行った（Acid Alkali Acid 処理）。試料を 1g の酸化銅とともにバイコール管に詰め、管内を真空にして封じ切り、500℃（30 分）、850℃（2 時間）で加熱した。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO2 を精製した。真空ラインにてバイコール管に精製した CO2 と鉄・水素を投入し封じ切った。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成した。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径

1mmの孔にプレスし、タンデム加速器に装着し、測定した。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用した。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(Hox-II)とバックグラウンド試料の測定も行った。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いてδ13Cを算出した。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用した。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いた。

暦年較正結果は、測定誤差σ、2σ(σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲)双方の値を示す。表中の総対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ計算された較正年代が複数の年代幅を示す場合に、各年代幅の範囲内で真の値が存在する確率の総和を1とし各年代幅における確率を相対的に示したものであり、確率分布とも呼ばれている。

(2)植物珪酸体分析

分析対象とした2試料のうち、SD33-1試料については過去の調査結果(株式会社古環境研究所2000)との比較も考慮し、植物珪酸体分析含量の調査を行った。一方、SI-12カマド試料については、燃料材として利用された可能性があるイネ科草本類の痕跡を検討するため、珪化組織片や植物珪酸体の産状の調査を行った。以下に分析方法を示す。

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集した。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させた。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製した。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数した。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残滓量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求めた。結果は、植物珪酸体含量の一覧表および図で示す。各分類群の含量は10の位で四捨五入し、100単位として表記した。合計は、各分類群の丸めない数字を合計した後に100単位とした。

珪化組織片および植物珪酸体の産状については、検出された植物珪酸体や珪化組織片の分類群とその検出個数の一覧表で示した。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から燃料材について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の産状を図化した。その際、出現率は端細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

4　結果

(1)放射性炭素年代測定

SK07から出土した炭化材(No,1)の同位体効果による補正を行った測定結果は670±30BP(第1表)、暦年較正結果(σ)はcaℓ.A.D.1284-1383(第2表)を示す。また、試料に供した炭化材は、落葉広葉樹のブナ属に同定された。以下に、解剖学的特徴を示す。

・ブナ属(Fagus)　ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が集合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ

同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

第１表　放射性炭素年代測定結果

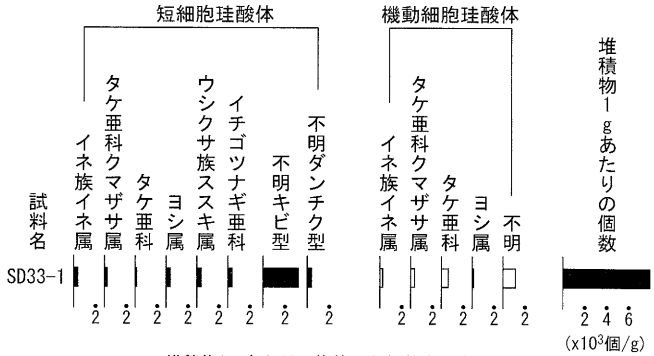
試料名	性状	樹種	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code No.	Measurement No.
KSB-SK7　No.1	炭化材	ブナ属	670±30	-28.76±0.42	730±30	10053-1	IAAA-80046

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

第２表　暦年較正結果

試料	補正年代 (BP)	暦年較正年代（cal）				相対比	Code No.
KSB-SK7 No.1 炭化材(ブナ属)	665±25	σ	cal AD 1,284 - cal AD 1,303	cal BP 666 - 647		0.520	10053-1
			cal AD 1,366 - cal AD 1,383	cal BP 584 - 567		0.480	
		2σ	cal AD 1,278 - cal AD 1,316	cal BP 672 - 634		0.528	
			cal AD 1,354 - cal AD 1,389	cal BP 596 - 561		0.472	

1)暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用いている。
2)暦年較正は、表中に示した丸める前の値を使用している。
3)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である
4)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



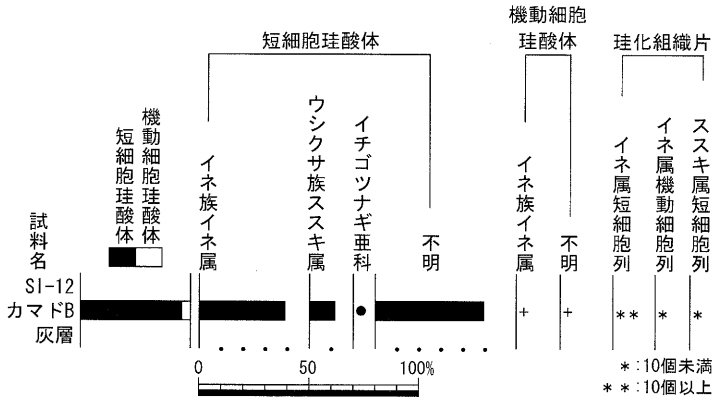
堆積物1ｇあたりに換算した個数を示す。

第 29 図　植物珪酸体含量

第３表　植物珪酸体含量

(個/g)

分類群 ＼ 試料	SD33-1 覆土
イネ科葉部短細胞珪酸体	
イネ族イネ属	400
タケ亜科クマザサ属	200
タケ亜科	100
ヨシ属	400
ウシクサ族ススキ属	400
イチゴツナギ亜科	400
不明キビ型	3,200
不明ダンチク型	400
イネ科葉身機動細胞珪酸体	
イネ族イネ属	200
タケ亜科クマザサ属	400
タケ亜科	600
ヨシ属	100
不明	1,100
合計	
イネ科葉部短細胞珪酸体	5,400
イネ科葉身機動細胞珪酸体	2,500
総計	7,900



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。●は１%未満、＋は100個未満の試料で検出された分類群を示す。*は珪化組織片の産状を示す。

第 30 図　植物珪酸体群集と珪化組織片の産状

第４表　植物珪酸体分析結果

分類群 ＼ 試料	SI-12 カマドB 灰層
イネ科葉部短細胞珪酸体	
イネ族イネ属	71
ウシクサ族ススキ属	21
イチゴツナギ亜科	1
不明キビ型	87
不明ダンチク型	3
イネ科葉身機動細胞珪酸体	
イネ族イネ属	12
不明	4
合計	
イネ科葉部短細胞珪酸体	183
イネ科葉身機動細胞珪酸体	16
総計	199
珪化組織片	
イネ属短細胞列	27
イネ属機動細胞列	2
ススキ属短細胞列	10

(2)植物珪酸体分析

① SD33-1

結果を第3表、第29図に示す。SD33-1覆土試料からは、植物珪酸体が検出されたが、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められるなど保存状態は不良である。植物珪酸体含量は約7,900個/gであり、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科、栽培植物のイネ属が検出された。イネ属は、葉部に形成される短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が認められ、短細胞珪酸体は約400個/g、機動細胞珪酸体は約200個/gである。

② SI-12

結果を第4表、第30図に示す。単体の植物珪酸体では、イネ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科が検出され、特に、イネ属が多産する。珪化組織片は、イネ属の短細胞列や機動細胞列、ススキ属の短細胞列が検出された。

5　考察

(1)遺構の年代観

土坑(SK07)の覆土上層から出土した炭化材は、13世紀後半～14世紀後半頃の年代を示した。土坑埋土の調査所見から推定される年代とは異なるが、今回の調査結果を参考とすると中世頃の遺構の可能性がある。

(2)栽培植物および燃料材

畑の畝溝と推定されるSD33-1覆土からは、栽培植物のイネ属が検出されたが、機動細胞珪酸体含量は400個/gであった。上新保遺跡において、過去に実施された古代の畑跡の畝溝埋土(底部)や上・下位の堆積物を対象に植物珪酸体分析調査では、イネ属(機動細胞珪酸体)は、Ⅰ地区0-36クグリッドの畝溝底部試料で3,100個/g、上・下位の試料では800～1500個/g、Ⅰ地区R-36グリッドでは黄褐色砂から800個/gといった含量が確認されている(株式会社古環境研究所2002)。今回はイネ属が検出されたことから、周辺域における稲作やイネの植物体の利用等が推定されるが、イネ属の含量が低いことやこの他のイネ科の栽培植物の植物珪酸体は検出されなかったことから、畑の可能性や栽培植物について言及することは困難である。

一方、SI-12カマドBの灰層では、イネ属やススキ属の珪化組織片や単体の植物珪酸体が多く検出された。イネ属の機動細胞珪酸体の産状を含量に換算するとサク試料の約4倍となり、イネ属の含量が高いことが指摘される。植物珪酸体の産状や試料の由来を考慮すると、イネ属やススキ属の葉部に由来する植物珪酸体が灰として残留したと推定される。また、同試料中に認められた炭化材のうち、約1～2cm角程の比較的遺存状況の良好な炭化材4点の概査を行ったところ、全て落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節(Quercus subgen. Quercus sect. Prinus)に同定された。したがって、カマドの燃料材には、イネ属やススキ属等のイネ科草本類やコナラ節等の木本類等が利用されていたことが推定される。

この他の分類群では、クマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、ススキ属を含むウシクサ属等が検出された。今回検出された分類群は、前述した分析調査(株式会社古環境研究2000)でも検出されていることから、本遺跡周辺にはこれらのイネ科植物が生育していた可能性がある。

Ⅵ　総括

上新保遺跡は今回の調査と2000年度の2回の発掘調査が行われている。2回の発掘調査で得られた資料はともに古代と中世の遺物・遺構が主体をなし、ほぼ同様な成果が得られている。そこで、2000年度の調査成果も考慮しつつ、今回の調査について総括してみたい。

1　古代の上新保遺跡の構造(第31図)

今回の調査では、竪穴住居と畑跡が検出され、遺物としては土師器・須恵器・鉄器・砥石が出土した。

時期的には竪穴住居が8世紀前半～10世紀初頭、畑跡が10世紀初頭以降となる。各住居の年代を見ると、調査の成果についてまとめるにあたり、その前に2000年度調査区(富山市教委2000)の古代について概観する。

2000年度の発掘調査区は、Ⅰ区とⅡ区に分かれており、古代の遺構・遺物はⅡ区を中心に検出された。Ⅱ区は今回の調査区の西方へ約100mの地点に位置し、遺構は竪穴住居約120軒・掘立柱建物約25棟を主体とする集落と畑跡が検出された。集落はⅡ区の西北部が中心となっており、東部の遺構分布は希薄である。遺物は須恵器・土師器・鉄器・石器などの一般的な遺物の他に墨書土器・石製権衡が出土しており、墨書土器は微量で、石製権衡は流紋岩製の簡易な例(望月精司　2003)である。畑跡は集落よりも新しく、10世紀以降から中世以前に耕作されたと考えられる。

次に今回調査区と2000年度調査区を合わせて上新保遺跡について考えてみたい。

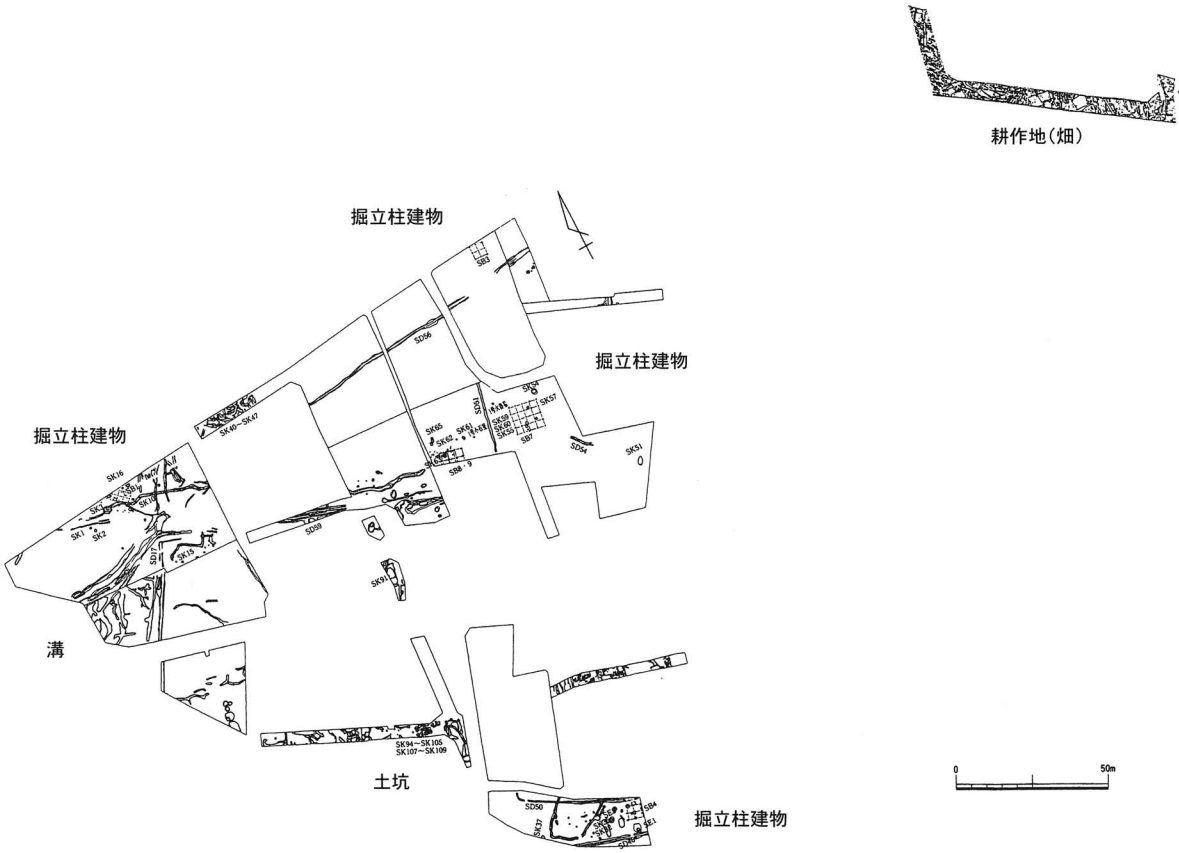
全体の位置的関係は、先に示した通り今回の調査区の西へ約100mに2000年度調査のⅡ区が存在する。Ⅱ区での集落は調査区西北部に中心が認められ、東～南に向かい竪穴住居の分布が薄く、端部において無くなり、掘立柱建物は西北部のみ集中している。この点から今回の調査区との間に竪穴住居と掘立柱建物の分布しない空白域が存在することが明らかで、両者は別々の遺構群を成すと考えられる。また、2000年度調査Ⅱ区の掘立柱建物の分布が集落の中心に限定されていることより考えると、今回の調査区は掘立柱建物が検出されていることから遺構群の中心に位置すると推測される。

遺物を見ると、集落は今回の調査区と2000年度調査Ⅱ区ともに8世紀前半～10世紀前半までの時期が中心となり、多少のずれがあるものの同時期の期間に存続しているが、両地区で出土遺物に異なる点と共通する点が多少なりとも認められる。

共通する点としては、転用硯が上げられる。転用硯は2000年度調査Ⅱ区に無く、今回の調査区において7点が出土しており、発掘された住居数よりみると2000年度調査Ⅱ区が約120軒に対して0点で今回が17軒に対して7点であることから考えると極めて集中していると言える。この転用硯の多さにもかかわらず、今回の調査区では墨書土器が無い点が矛盾し、問題となる。これは墨書された場所とその墨書土器を使用廃棄した場所が異なることから発生していると思われ、近隣に墨書土器が多出する地点が存在するのかもしれない。

両地区が共通する点としては、墨書土器の少なさが上げられ、今回の調査では出土は無く、2000年度調査Ⅱ区で16点前後出土しただけである。両地区の住居数を合わせると約140軒近い数に対してかなり少ないと思われ、本遺跡の西方の神通川沿いに存在する任海宮田遺跡では、発掘された竪穴住居数が上新保遺跡と対して変わらないにもかかわらず、約200点の墨書土器が出土しており(中野　2001)、同時期の集落として大きな違いが存在する。この上新保遺跡と任海宮田遺跡の相違点は後者に大型掘立柱建物や「城長」の墨書土器が存在する点などから拠点的な集落とすることが

第 31 図　2007 年度調査区と 2000 年度調査区の古代(1 ：2,500)



第 32 図　2007 年度調査区と 2000 年度調査区の中世(1 ：2,500)

でき、対して上新保遺跡は墨書土器の少なさから拠点集落に付随する衛星的な集落として捉えることも可能と思えるが、今回の調査で転用硯が7点も出土し、単純に衛星的な集落とは言い難くなった。この点2000年度調査Ⅱ区で出土した石製権衡が官衙遺跡や寺院に多いことからもそう言える。上新保遺跡は調査された範囲よりも北方に広がっており、未調査部分が多く、その中に墨書土器が多量出土し、大型建物などが見られる地区が存在する可能性がある。

以上から推測される上新保遺跡の集落構造は、下記のようになる。

○SI12のカマド内灰層の植物珪酸体等の分析ではイネ属ススキ属が認められ、炭化材としてコナラが検出されている。周辺にイネ科植物が生育していた可能性があり、本遺跡が稲作を主体とする集落であったと考えられる。
○遺跡内には竪穴住居と掘立柱建物により構成される群が2群以上存在し、複数の群でひとつの集落を構成していたと思われる。
○複数存在すると予想される群の中には中心となる群が存在すると思われる。
○中心となる群は、墨書土器の出土状況から2000年度調査Ⅱ区の可能性は低い。中心は、墨書土器は出土していないが転用硯が集中して出土した今回の調査区周辺の可能性が大きい。

上新保遺跡は調査されていない地区が大きく広がっており、今後の調査で集落構造が解明されていくものと考えられる。扇状地端部のため遺構の保存状況が良好で、古代開墾集落の実態を知る上で重要な遺跡といえる。

畑跡は、今回の調査区及び2000年度調査Ⅰ・Ⅱ区において検出されている。いずれも10世紀以降に耕作されたと考えられ、集落が無くなってから畑跡が広がったことが確認できる。畑跡は植物珪酸体分析ではイネ属が確認されているが、栽培種となるかは不明である。周辺には同時期の集落が見当たらず、畑跡のみ広がっており、大規模経営の存在を思い起こさせる。12世紀代に存在した上賀茂神社領越中新保御厨との関係が気になるところである。

2　中世の上新保遺跡の構造(第32図)

上新保遺跡の中世集落は、今回の調査区及び2000年度調査Ⅰ・Ⅱ区の全ての地区より遺物・遺構が検出されており、周辺には遺物・遺構の分布に濃淡があるものの全面に存在すると予想される。時期的には12世紀後半～15世紀後半までであるが、13世紀から14世紀までが主体となっている。

今回調査したSK07の出土炭化材の放射性炭化年代測定でも、13世紀後半～14世紀後半の年代を示している。

遺構の分布状況は、調査された地域の最西端となる2000年度調査Ⅰ区の西半部に掘立柱建物を中心とする遺構の集中が認められ、2000年度調査Ⅰ区東半～Ⅱ区のかけては散在している状況である。

今回の調査区の東部は土坑が集中しており、その周囲に中世段階の遺構群の集中を予想させる。

(平岡)

参考文献

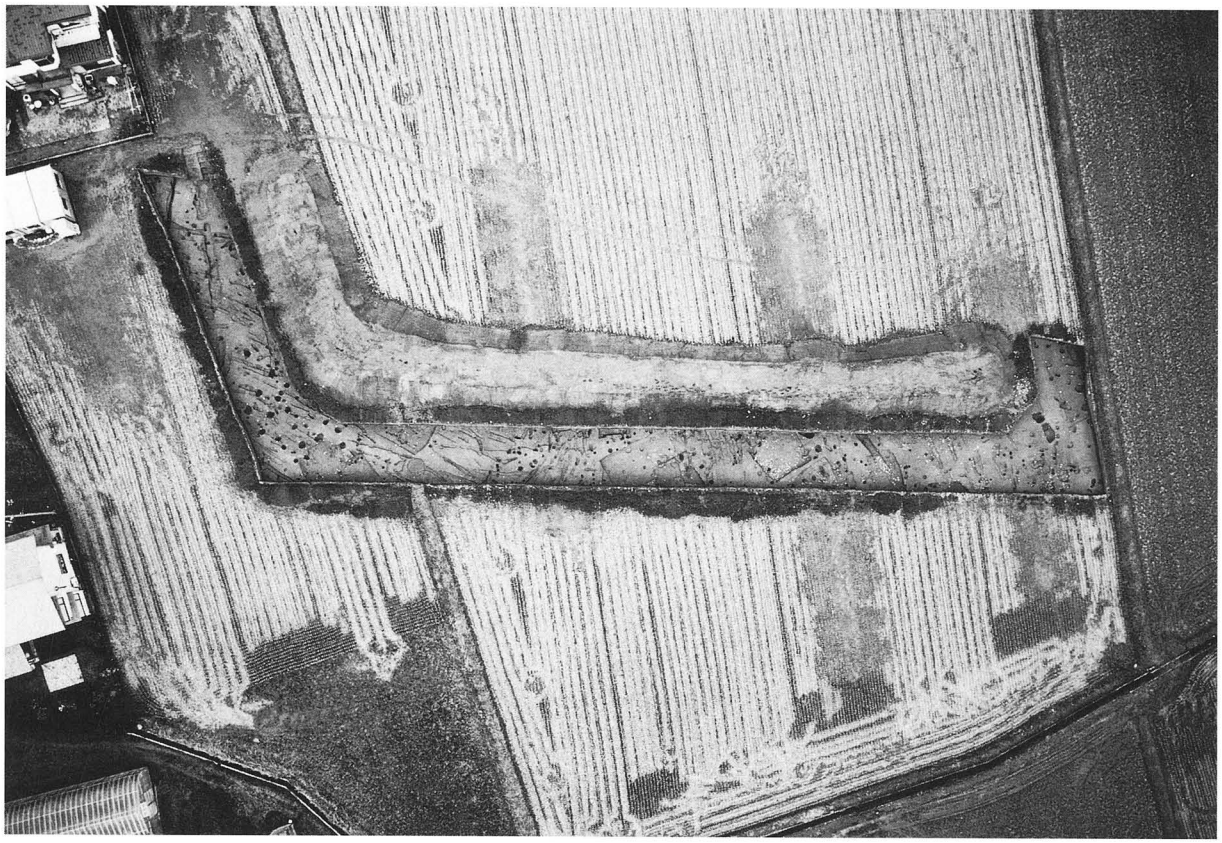
株式会社古環境研究所　2000　「上新保遺跡における自然科学分析」『富山市上新保遺跡発掘調査報告書―富山市上新保土地区画整理事業に先立つ発掘調査』富山市教育委員会

近藤錬三　2004　「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト』
富山市教育委員会　1996　『富山市上新保遺跡試掘調査報告－富山市上新保土地区画整理事業に先立つ試掘調査』
富山市教育委員会　1998　『富山県富山市上野井田遺跡』
富山市教育委員会　2000　『富山市上新保遺跡発掘調査報告－富山市上新保土地区画整理事業に先立つ発掘調査』
富山市教育委員会　2002　『富山市吉岡遺跡・経力遺跡発掘調査報告－珠泉ニュータウン造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
富山県埋蔵文化財センター　1996　『任海宮田遺跡発掘調査報告書』Ⅰ
富山県埋蔵文化財センター　1997　『任海宮田遺跡発掘調査報告書』Ⅱ
富山県埋蔵文化財センター　1998　『任海宮田遺跡発掘調査報告書』Ⅲ
富山市教育委員会　1997　『富山市吉倉Ｂ遺跡任海宮田遺跡－県営公害防除土地改良事業に伴う埋蔵文化財試掘調査報告（２）』
中野由紀子　2001　「任海宮田遺跡の墨書土器について－ B1 地区出土資料の紹介－」『紀要第４号　富山考古学研究』財団法人　富山県文化振興財団　埋蔵文化財調査事務所
望月精司　2003　「古代権状錘に関する一考察―北陸出土権衡資料の検討を中心として」『北陸の古代と土器』北陸古代土器研究第 10 号　北陸古代土器研究会
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』吉川弘文館

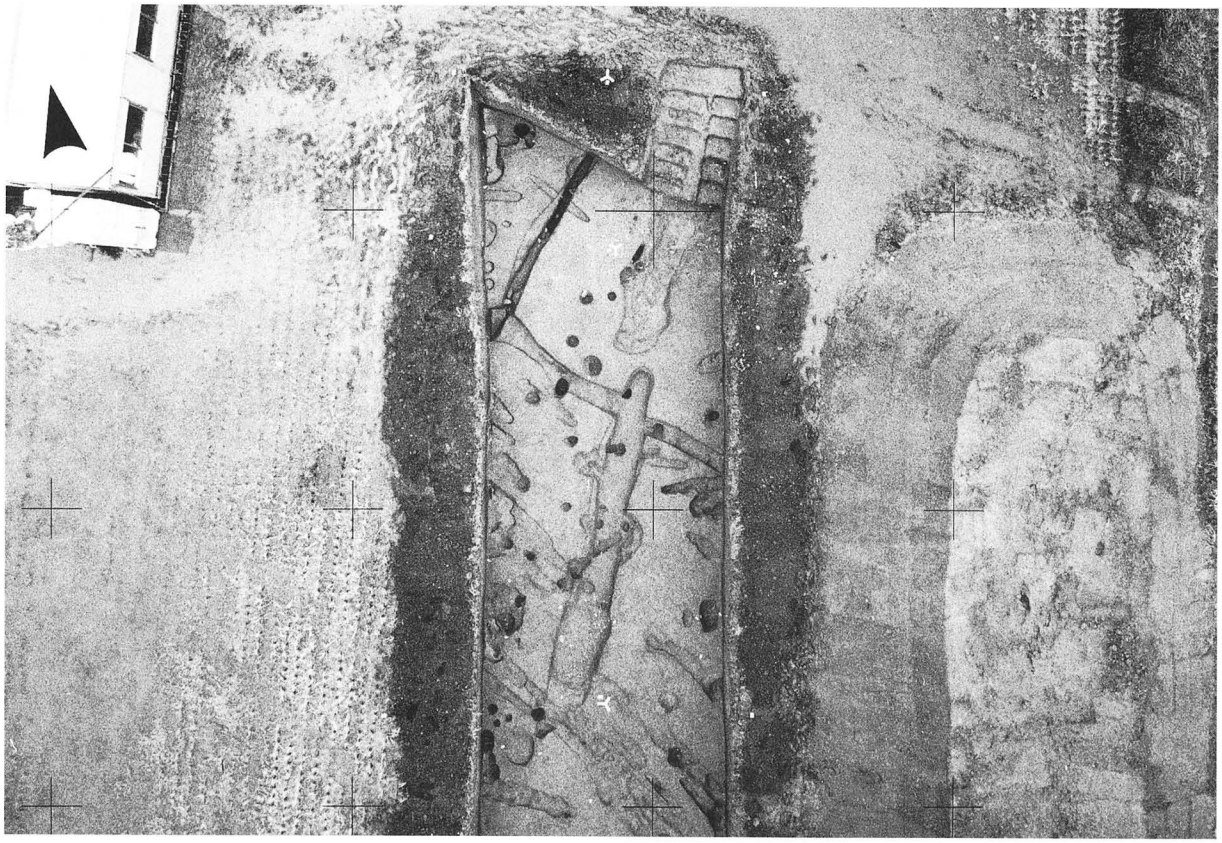
1　調査区全景（南東から）

2　調査区全景（南から）

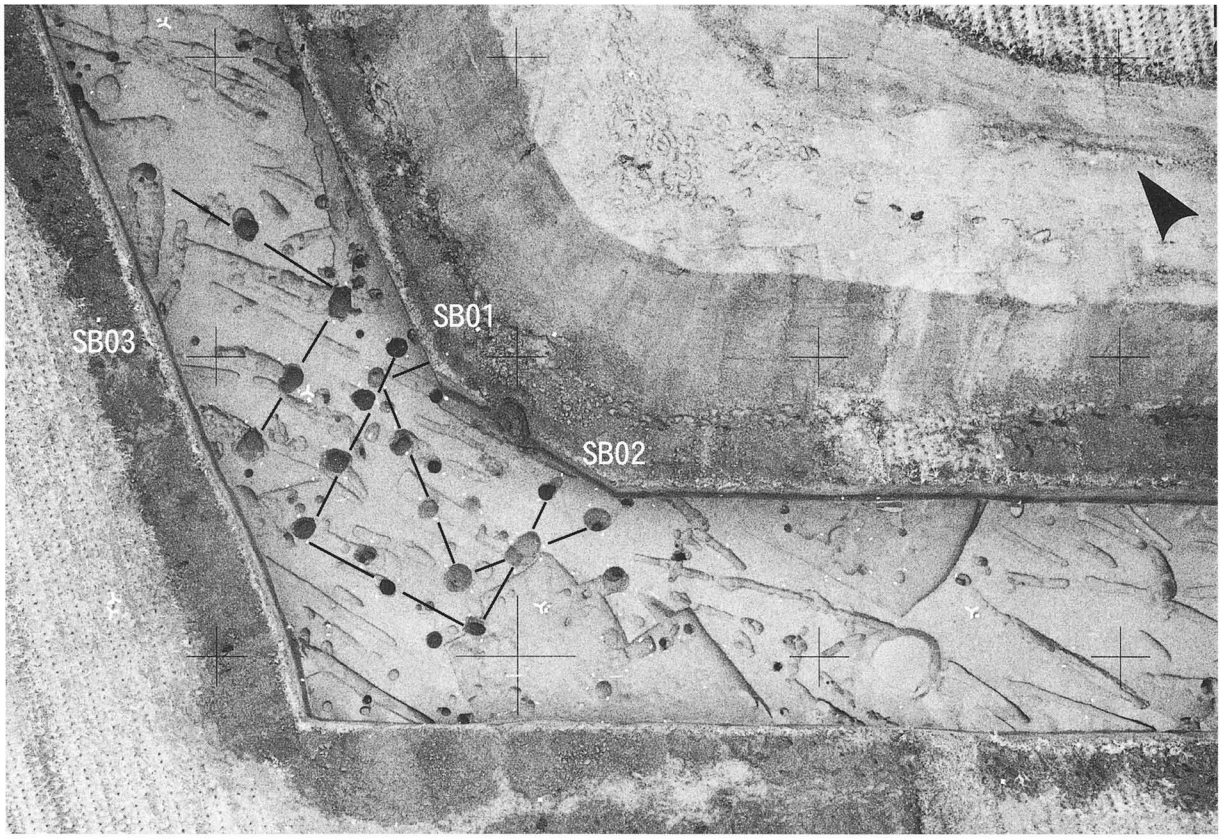
図版2



1　調査区全景（上が北）



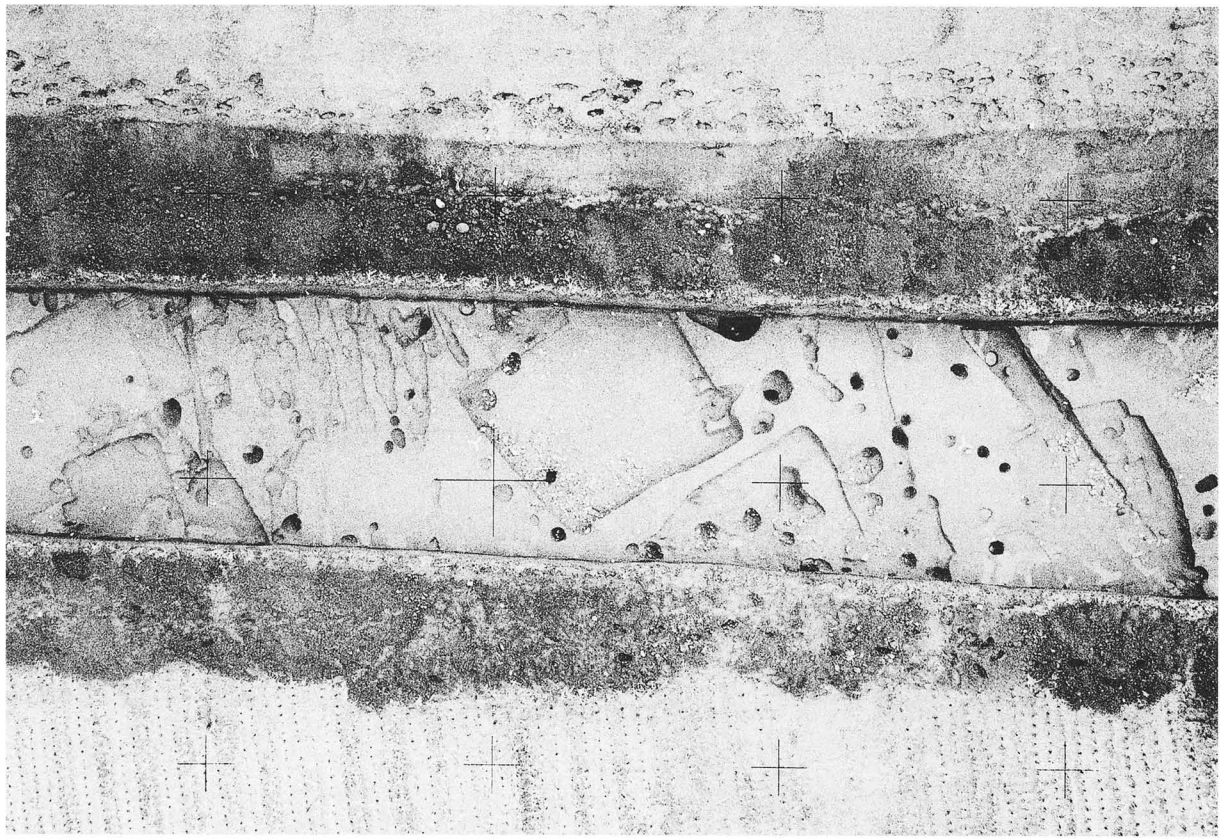
2　調査区北西部（X72630 付近から北）



1　調査区西部(X72630 以南、Y6430 以西)

2　調査区中央部(Y6430 ～ Y6450 付近)

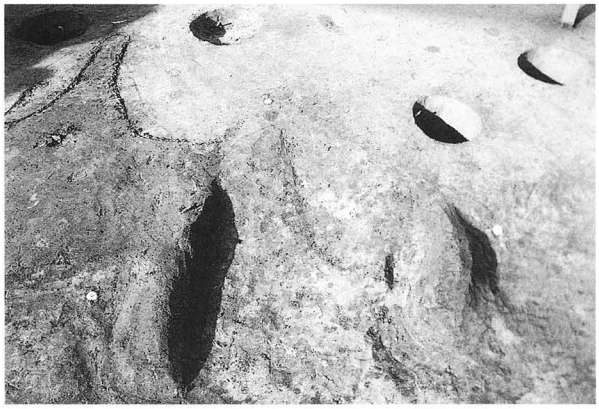
図版4



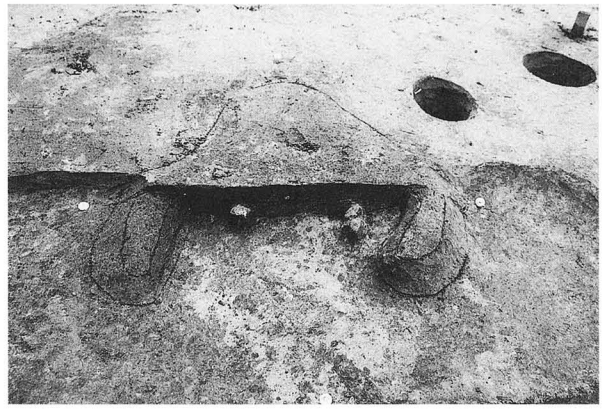
1　調査区東部(Y6450 ～ Y6465 付近)

2　調査区東端(Y6465 以東)

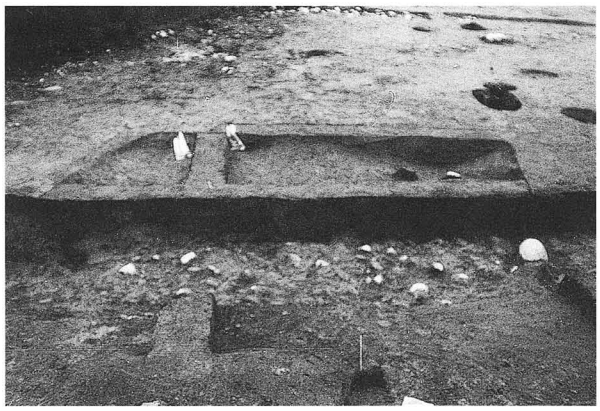
1　SI01(東から)



2　SI01 カマド(東から)



3　SI01 カマドセクション(東から)



4　SI01 セクション(西から)

5　鉄製紡錘車出土状況(西から)

図版6

1　SI02(東から)

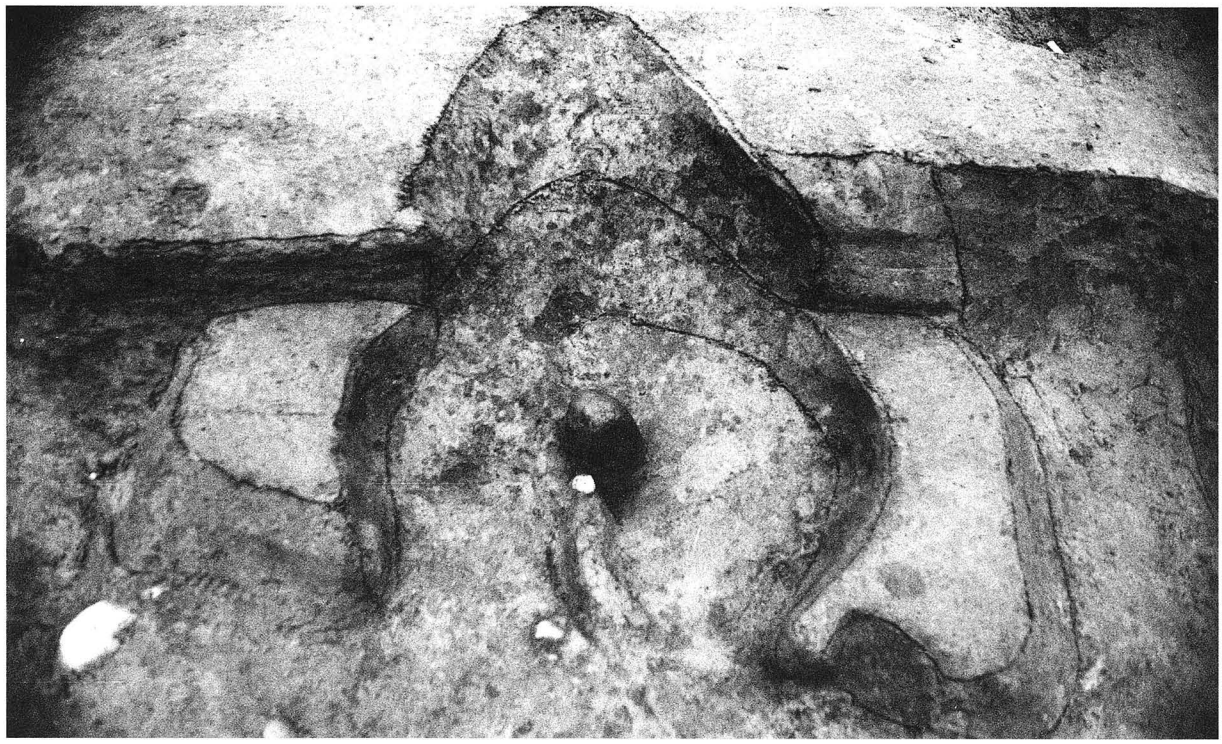
2　SI02カマド(東から)

1　SI03 カマド（東から）

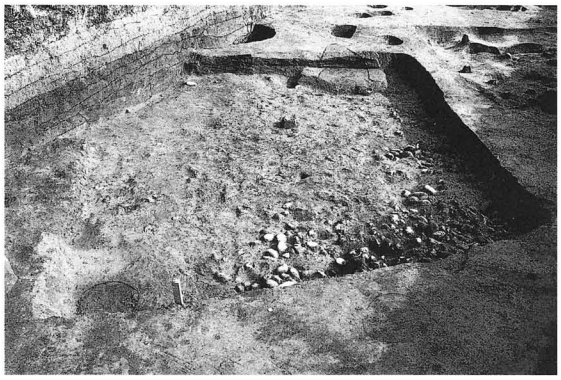
2　SI04・05（西から）

図版8

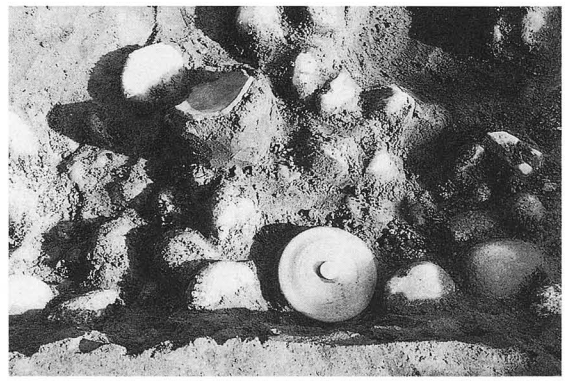
1　SI04 カマドセクション(西から)



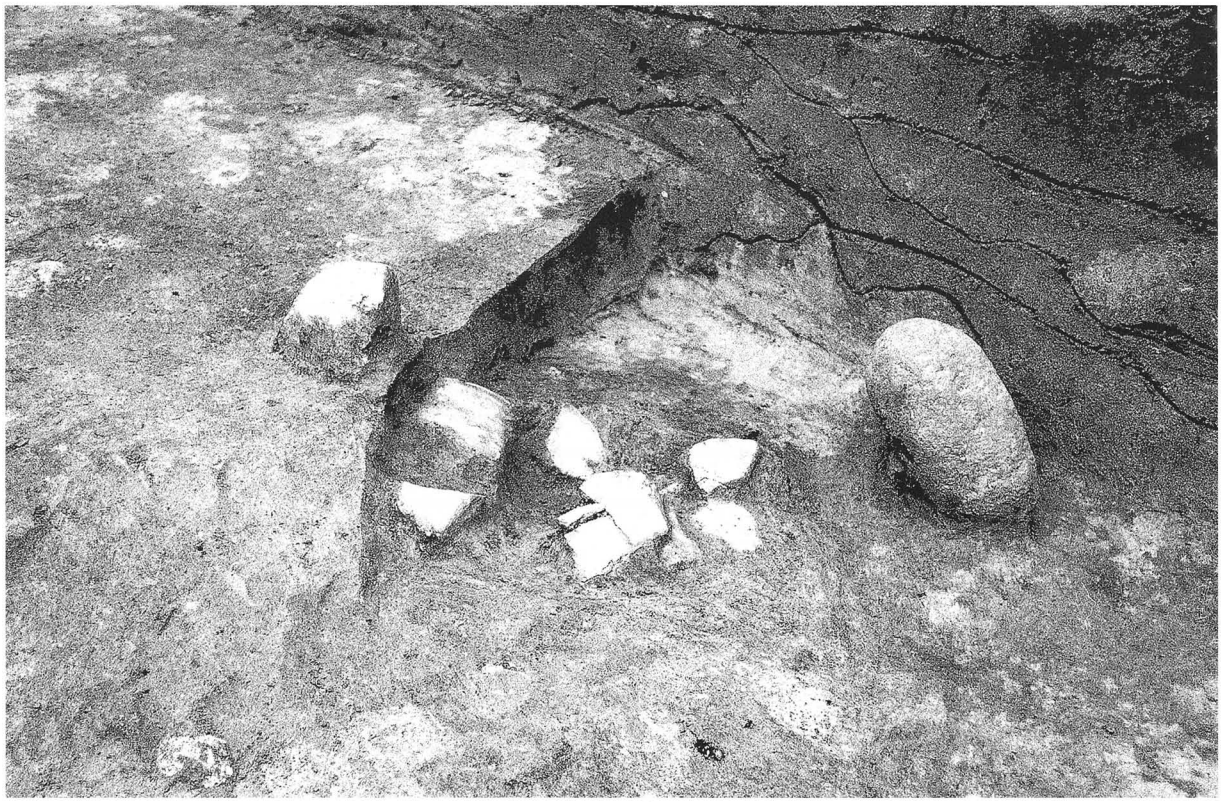
2　SI04 カマド(西から)



3　SI04 遺物出土(壁際)



4　SI04 須恵器出土状況



1　SI05 カマド(南東から)

2　SI06(北から)

図版10

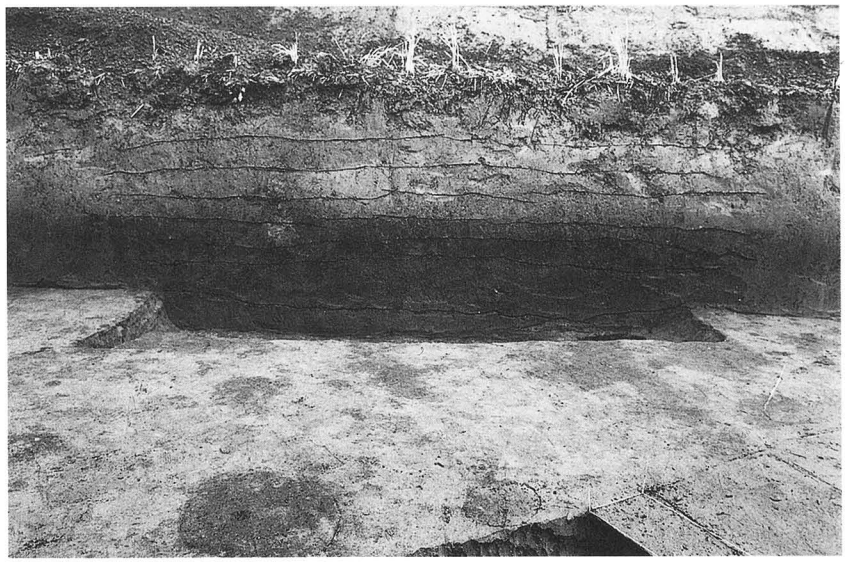
1　SI06 カマド(北から)

2　SI07・17(東から)

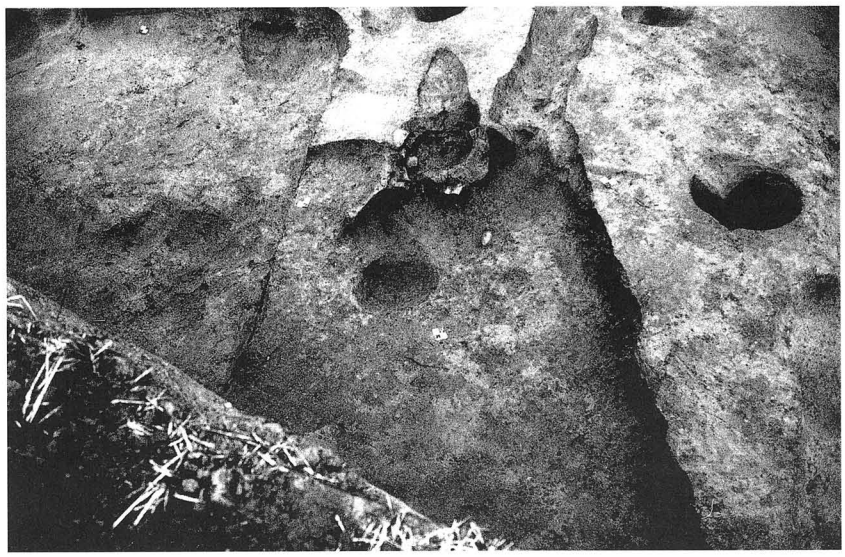
1　SI08(東から)

2　SI08 カマド(東から)

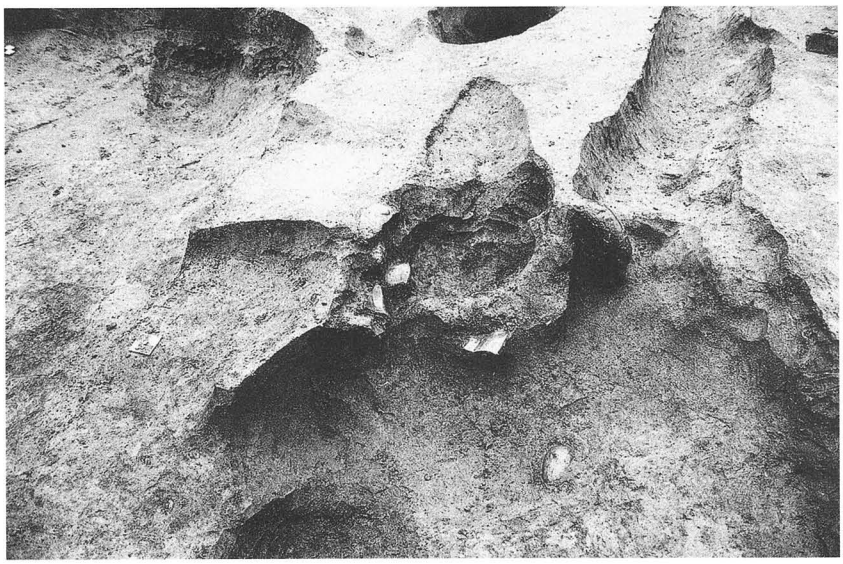
図版12



1　SI09(南壁)土層



2　SI10(南から)



3　SI10 カマド(南から)

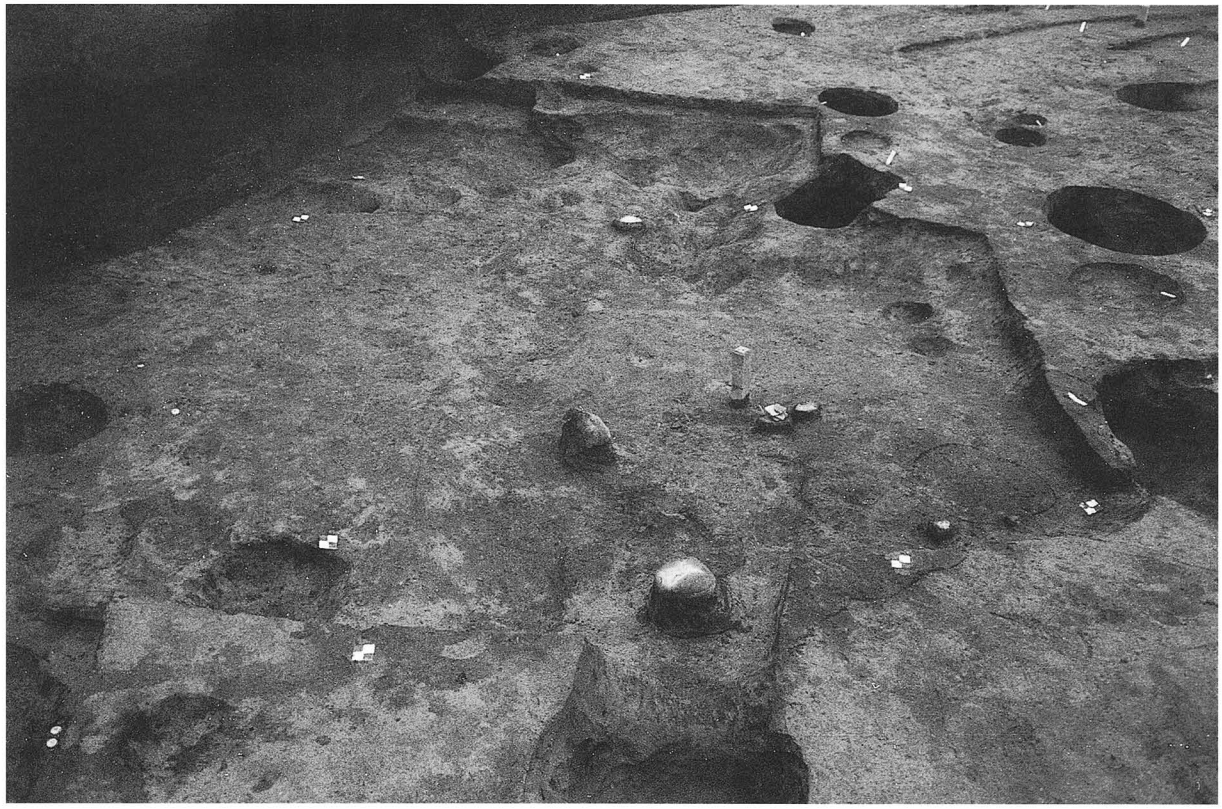
1　SI11・14(北から)

2　SI11 カマド遺物出土状況(北から)

図版14

1　SI12(東から)

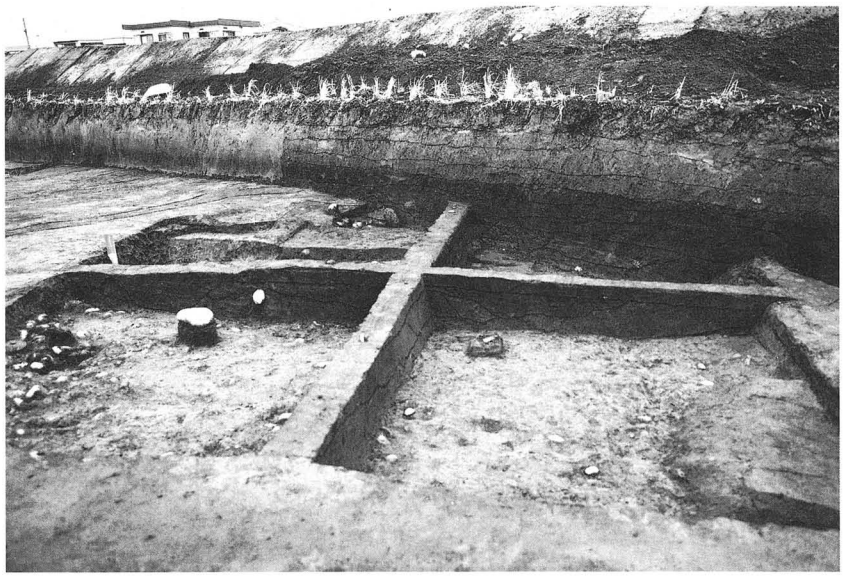
2　SI12カマドA(南から)



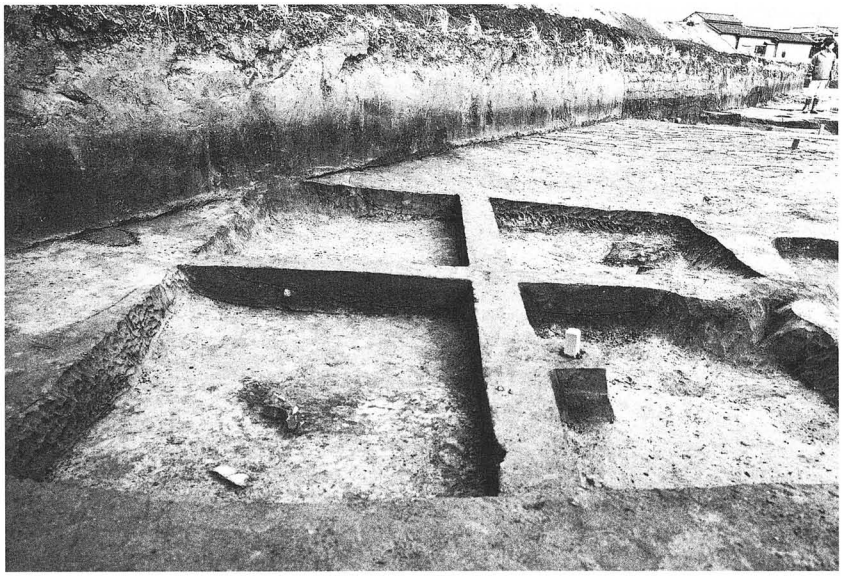
1　SI13・15(東から)

2　SI16(西から)

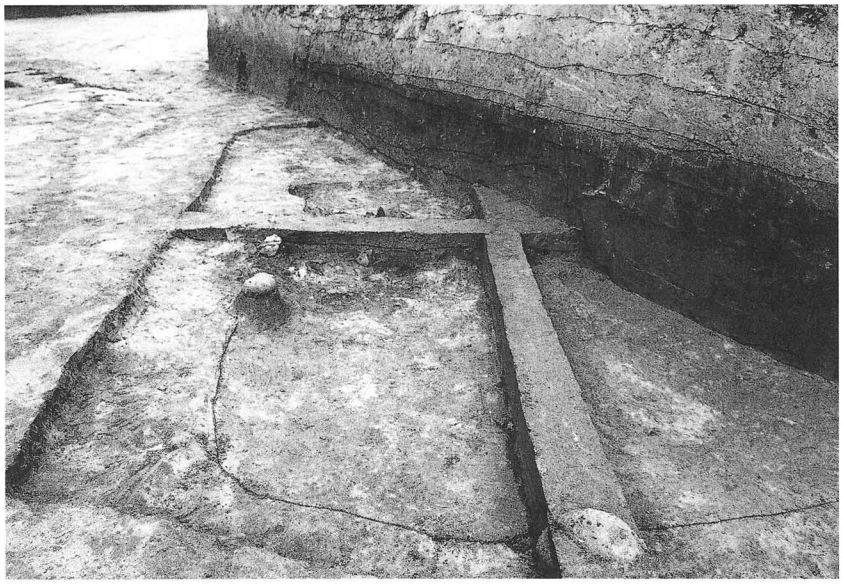
図版16



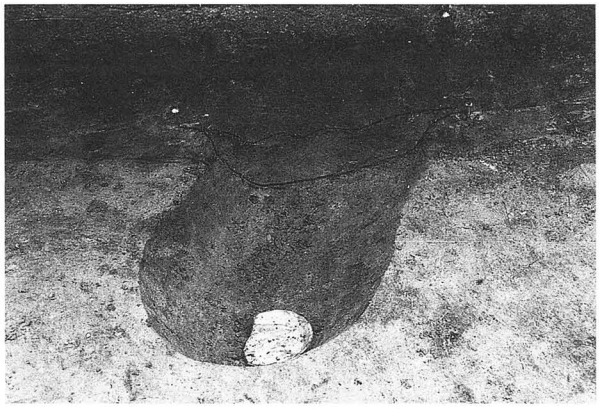
1　SI04　東西土層



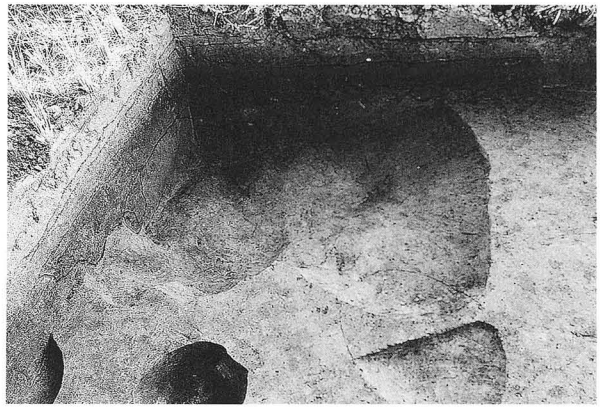
2　SI06　南北土層



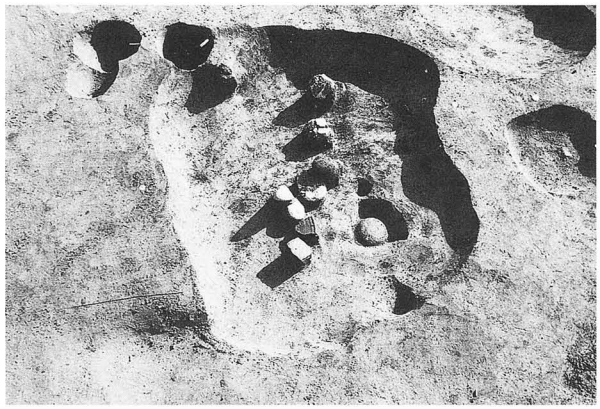
3　SI11　南北土層
及び貼床範囲



1　SK03(西から)



2　SK05(西から)

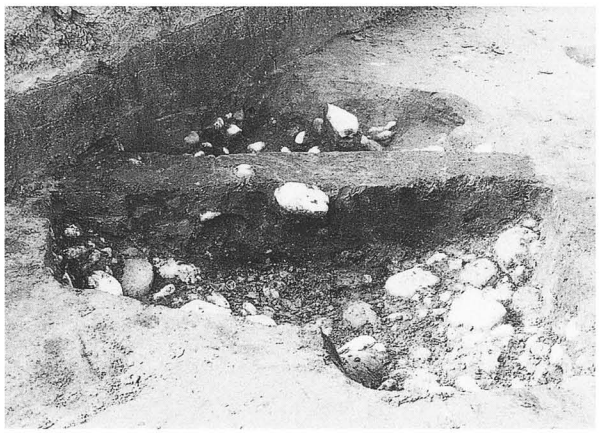


3　SK07(西から)

4　SK07 セクション(東から)

5　SK08(東から)

6　SK09(北から)



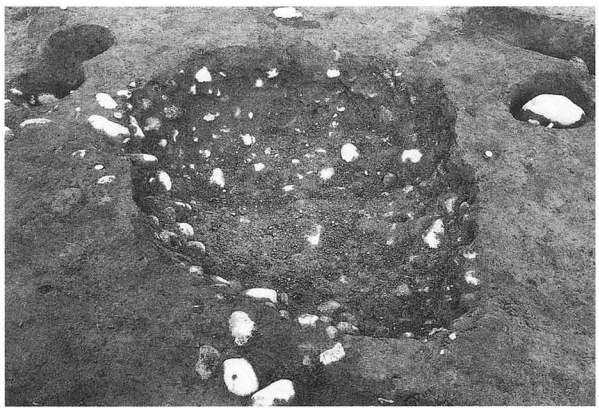
7　SK09 セクション(東から)

8　SK11(北から)

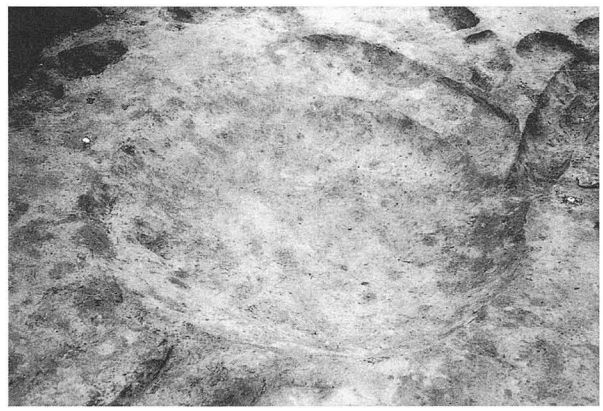
図版18

1　SK12(西から)

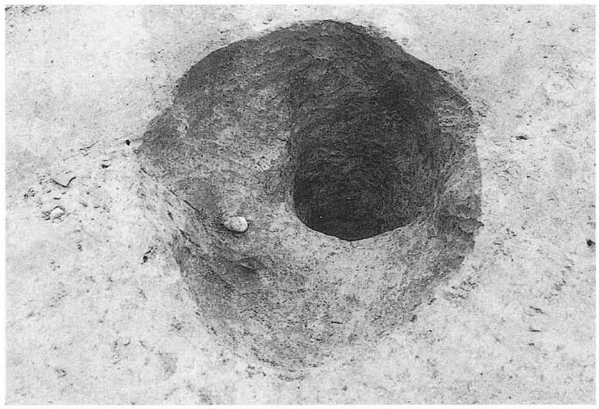
2　SK13(西から)



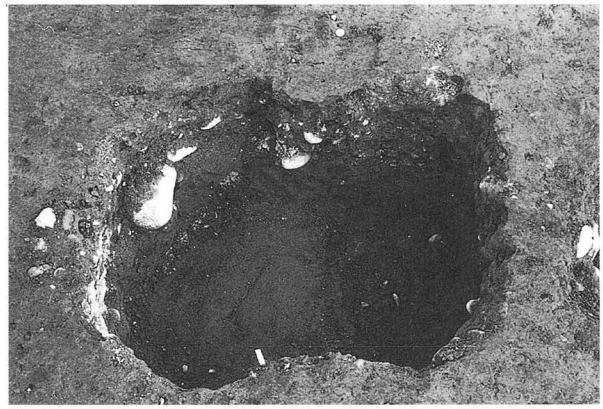
3　SK14(西から)



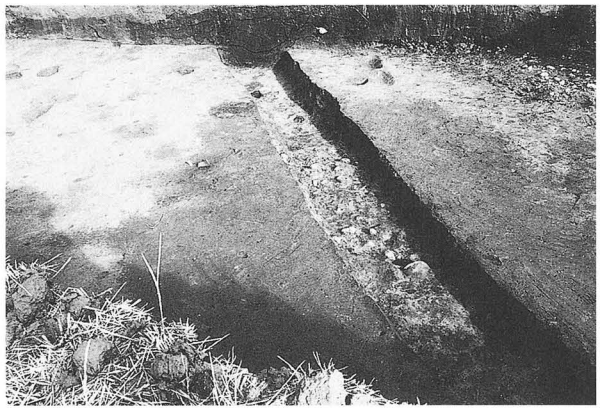
4　SK15(東から)



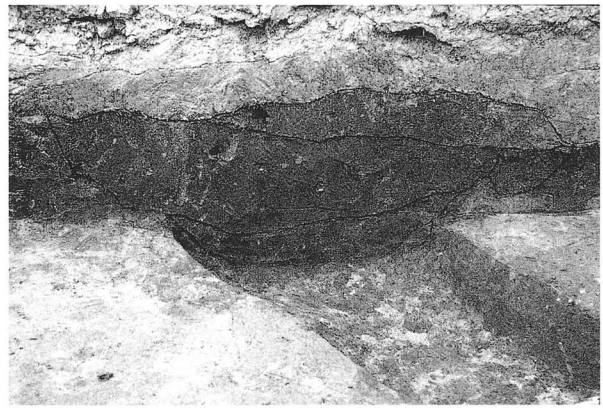
5　SK16(北から)



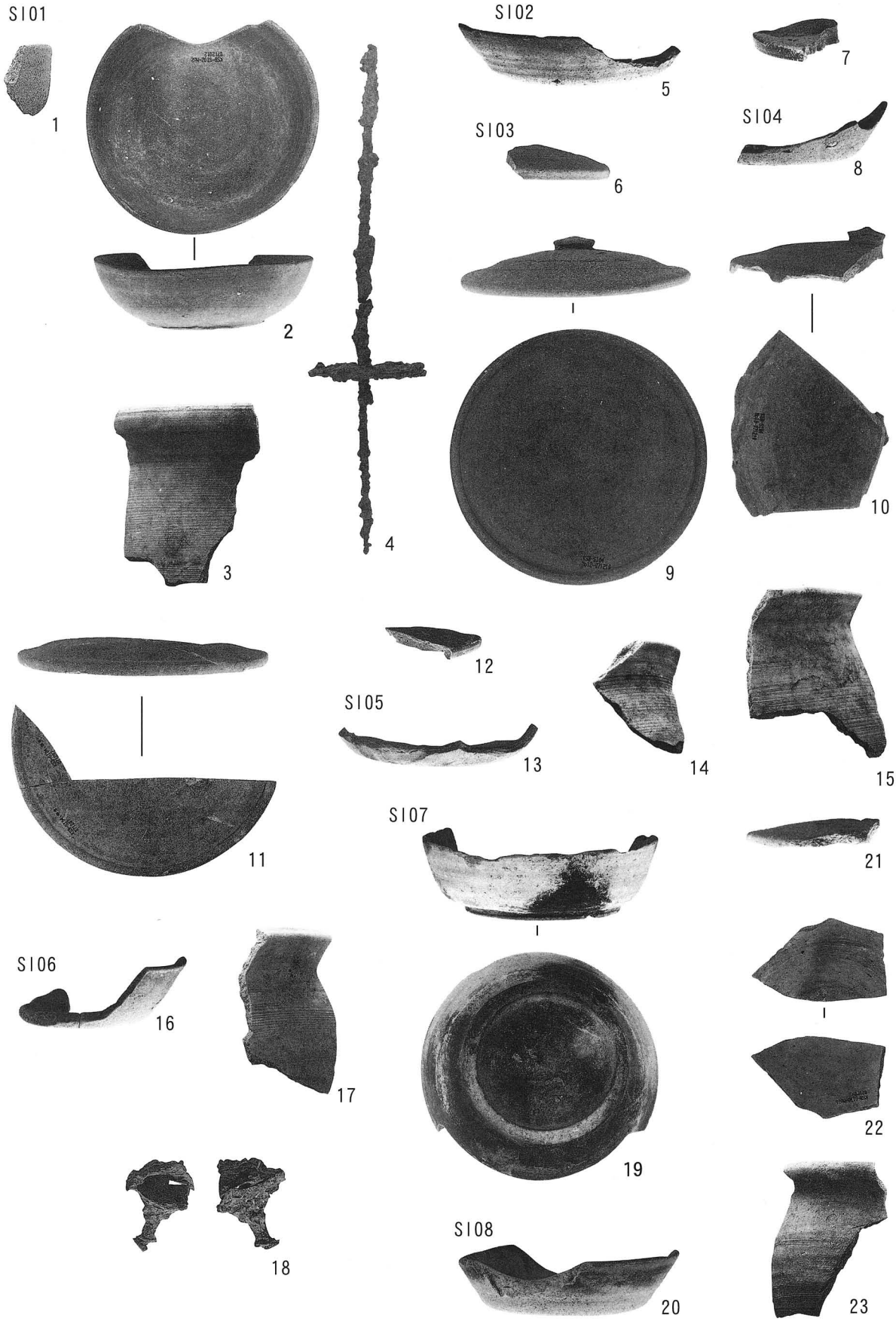
6　SK18(西から)



7　SD01

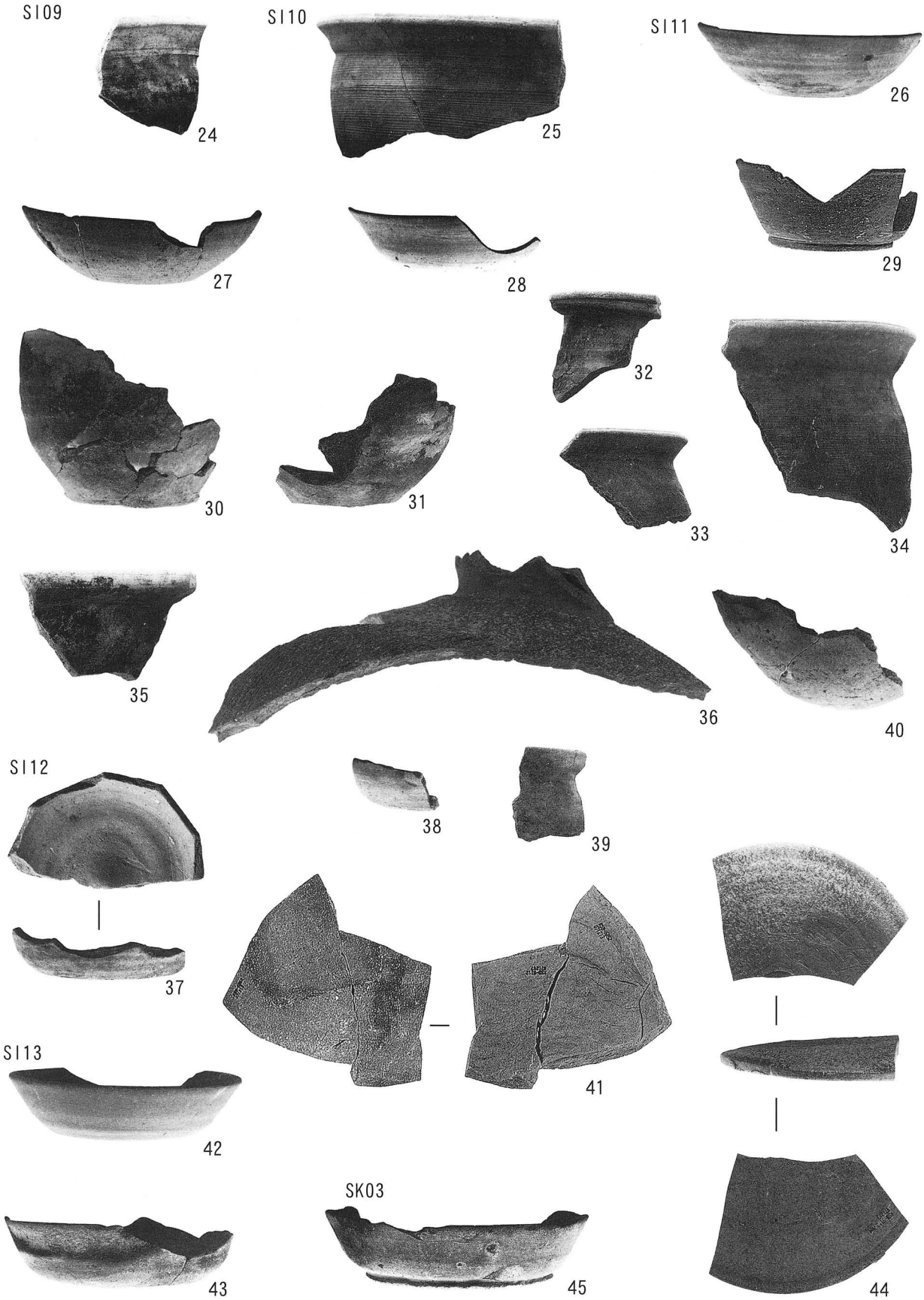


8　SD01 土層

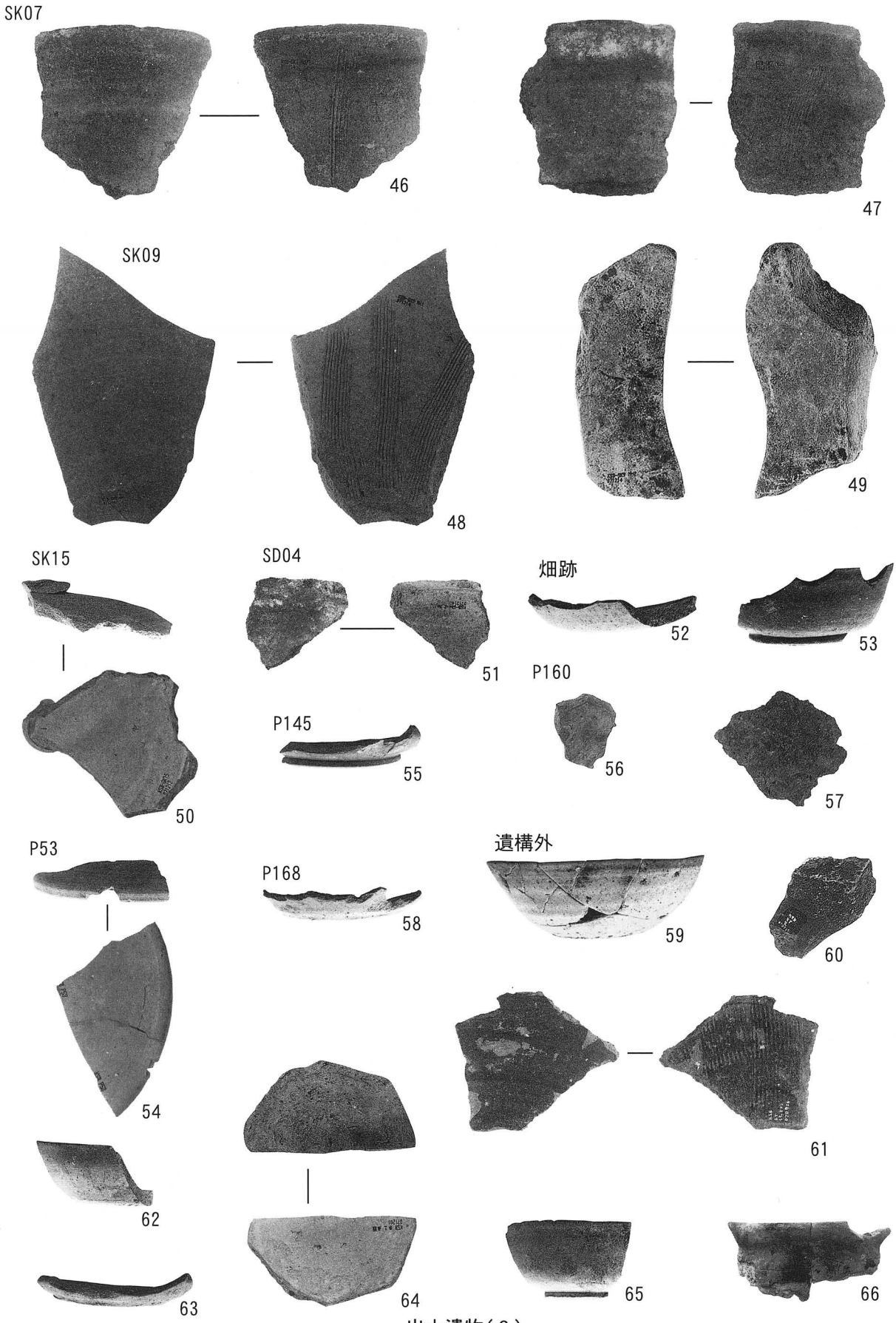

SI01
1
2
3
4
SI02
5
7
SI03
6
SI04
8
9
10
11
12
SI05
13
14
15
SI07
21
SI06
16
17
19
22
18
SI08
20
23

出土遺物(1)

図版20


SI09
24
SI10
25
SI11
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
40
SI12
38
39
37
41
SI13
42
SK03
43
45
44

出土遺物（2）


SK07
46
47
SK09
48
49
SK15
50
SD04
51
畑跡
52
53
P145
55
P160
56
57
P53
54
P168
58
遺構外
59
60
61
62
63
64
65
66

出土遺物(3)